

ISSN 0910-7282

# 大阪府立図書館紀要

第 35 号

2006 年 3 月

Bulletin of Osaka Prefectural Library No. 35

大阪府立中之島図書館

大阪府立中央図書館



## 紀要の再刊について

大阪府立中之島図書館館長 石崎重雄

昔、学生の頃、各学部の発行する雑誌に「紀要」という言葉を使っていたことを思い出す。その殆どを読んだ記憶はないが、こんな難しい文章をよく書く人がいるなど感心したことを覚えている。読ませるよりは書きたいことが縷々述べられていて、書く文化とも云うべき領域があると思った。話すことから書くに至る数万年の歴史のなかで書く行為はほんの僅かな時間であったと思うが、書くことの決定的な歴史的意義は本人にとっても、他人にとってもそれが後世に残ることに尽きると思われる。尤も書いたものが全て事実であったり真実であったりすることはないことすべての書物に共通していること、誰でも分っていることとしても。

日本人は話べたであるし、また論理よりは情が先行するため、どうしても話し言葉を文章化するのは難しくしてしまう。大阪弁や落語を書き言葉にできないように。そこで書き言葉に創意と工夫を凝らして、漢字、カタカナ、ひらがな、和製英語や和製漢語を駆使して文章化していくことになる。そして世界中で一番難しい言語を形成してきた。難しい書き言葉を普及させ、後世に残すために出版が起こり図書館ができた。

図書館は民草の書籍を集めるだけでなく、自らの人材を擁して、官製とはいえ自らの書物も多く作成したに違いない。その時代、時代の要請を受け、また書き人の趣味や遊びや信念を著すものとして、かつては貪るようにして読まれ、尤も、図書館が出来てから黙読がはじまり、朗読が廃れたというのは本当かどうか知らないが今は活字文化の一翼をになうものとして。

大阪府立図書館紀要もこのような歴史的経緯を踏まえたものとして発行され、1964年に第1号を出版して今回第35号を久しぶりに発行することにした。今回新たに、執筆された論考府立図書館に勤められていた方、現に勤められている方のいずれも力作である。

司書がこのような形で書くという行為を紀要で纏められたこと、今後の図書館司書のあり方やまた活字文化の一端の担い手として意義深いものだと自画自賛し復刊への挨拶としたい。

最後に「国破れても、言葉あり」としたい。そのためにも紀要の継続を期待する。

「大阪府立図書館紀要 35号」

巻頭 紀要の再刊について ..... 石崎 重雄 中之島図書館長

目 次

寸描 天王寺分館から夕陽丘図書館へ .....	貴田 春男 ( 3)
少年院と図書館サービス .....	脇谷 邦子 ( 7) 日置 将之
「子どもの本を読む会」の果たした役割 .....	前田 千慧 ( 33) 大西 登貴子 前野 貞子 脇谷 邦子
『大原文庫』をめぐって(第1部) 大阪府立図書館収蔵までの道程 大原社会問題研究所と大阪府社会事業会館 - .....	森田 俊雄 ( 47)
翻刻 役者更紗目鏡 .....	佐藤 敏江 ( 一)
福澤諭吉『覚』についての考察 .....	稲垣 房子 (三十七)
小野十三郎遺漏詩二十四篇 .....	高松 敏男 (四十七)

編集後記

## 寸描 天王寺分館から夕陽丘図書館へ

貴田 春男（元夕陽丘図書館）

館丁（守衛）さんが振り鳴らす開館、閉館の知らせる振鈴の音は、半世紀以上を経た今でも耳朶に新たである。「中之島百年」を繙きながら、戦後間もない頃から中之島 天王寺夕陽丘と共にあった36年間を懐古するとき、ただ感慨無量という他はない。百年の歴史と数々の故事来歴は、本書はあれこれと説き明かしてくれ、時を忘れて往時のそこかしこに引き入れてくれることに感謝したい。

特にこのたびは、天王寺と夕陽丘の両館について何か紹介をということなので、その頃を振り返りながらいくつかの様子を紹介することにしたい。

### 1 天王寺分館発足の頃

大阪に残された大原社会問題研究所図書館書庫内に設けられていた大阪府立図書館天王寺別館は、1950(昭和25)年4月1日付で大阪府立図書館天王寺分館として設置され、同年8月10日開館。中之島図書館の閲覧係から数名が天王寺分館勤務を命ぜられ、私もその中の一人であった。天王寺分館は木造2階建てで、既に完成し、内部の仕上げが少し残っているだけで、閲覧机や椅子、開架室の設備や目録カード箱の搬入などの仕事が待っていた。

当時の組織は、分館長以下、庶務係、司書係は第1係と第2係、それに閲覧係で構成され、司書第1係は、旧大原社会問題研究所の蔵書整理、第2係は、新刊図書の入力整理を担当していた。第1係は戦災を免れた大原時代の書庫内の一室を事務室として整理作業を開始した。焼け残った書庫と新館との間が離れていたため、書庫内での作業が効率的であるという判断からであった。整理は冊数の多い経済学分野からスタートし、現在貴重書とされているデイドロとダランベールの百科全書をはじめマルサス、スミス、カントやルソーなどの名著の初版に出会い、これらを手にしながらかえも言われぬ感激を覚えたものである。

さて、目録はN C R、分類はN D Cの第5版、件名はN S Hを採用。ところが作業開始から数ヶ月ばかり経過した頃、N D Cの第6版が刊行されたため、整理済の図書約3千冊を第5版から第6版に切り換え、8月10日の開館日には、開架室用の図書はすべて新分類により利用者に提供された。

## 2 レコードコンサートの開催

開館後、図書館業務も順調に進み出した頃、何か新しい利用者サービスをとということが話題になり、レコードコンサートなら開催できるのではということになった。

当時の分館は、大原社会問題研究所の蔵書を母体とした学術図書館という面もあって、開館時間は午前9時から午後5時まで、利用者は20才以上の一般成人（大学生は除く）に限られていた。

したがって、閉館後の時間を活用し、毎月第3金曜日の午後6時から定期的なレコードコンサートを開催することになった。当時はLPレコードが出はじめた頃であったが、価格が高かったため、音楽愛好家にとっては、評判もよく奈良、和歌山などからの来聴者もあった。

解説プログラムはガリ版刷（謄写版）、ポスターは、ポスターカラーによる自作のものを梅田、大月楽器店の店頭に貼ってもらうことを頼んだりした。これもコンサート用の新盤を適宜購入していたことから店主が快く協力してくれたお蔭であった。

一方、演奏用の機器類は、南諭造分館長の計らいで某氏が材料や部品を調達して組み立ててくれたセットであった。現在の多種多様な音響機器に比べると、そのスタイルや性能などは、とても足下にも及ばないが、当時としては素晴らしい音響効果を発揮してくれた。

閉館後、これらの機器類を閲覧室に運び入れてセットし、解説のアナウンスは、曲目ごとに司書が交代で担当した。しかし、夜間開館の実施を契機に多くのファンに惜しまれながら、その幕を閉じることになった。

## 3 天王寺分館から新館建築までの経緯

夜間開館の開始とともに勤め帰りの利用者が多くなった。主に司法試験や会計士試験などの国家試験を目指す利用者たちで小さな休憩室は、受験勉強の情報交換場所としてとても賑やかであった。やがて中之島から自動車文庫が移転してきて府下一円に対するサービスの拡大を開始する。

しかし、図書館機能の拡大、整備と裏腹に分館は開館後10年程経過した頃から、閲覧室の壁面が剥がれ落ちたり、大原社会問題研究所書庫棟の老朽化による雨漏りが年々ひどくなって

きたので「天王寺分館改築計画委員会」が設置され、5年間活動の後、調査費100万円が計上されたので「大阪府立図書館調査に関する会議」(座長 朝日放送社長飯島幡司氏、調査担当者 京都大学教授小倉親雄氏)が設置され、調査の結果は、1970(昭和45)年11月、「大阪府立図書館基本構想に関する報告書」としてまとめられた。天王寺分館の改築計画を発端に府立図書館全体の将来構想が明らかにされたわけである。

その2年後の1972(昭和47)年1月4日から天王寺分館は館外貸出を停止。2月1日から閲覧停止。その後昭和町にあった桃山学院大学あとの図書館を借用して臨時館を4月1日から開館。それまでの間に開架室の図書と自動車文庫用図書の移転、大原文庫をはじめとする書庫内図書約10万冊を新館完成までの間、住友倉庫へ預け入れる作業を行った。また、桃山学院正門横の空地进行し、自動車文庫用の車庫を新設し、巡回文庫活動に支障を来さないように留意した。

#### 4 工事期間中のあれこれ

1972(昭和47)年6月1日、分館の解体工事開始、10月1日、新築工事着工。地下1階(書庫は2層)地上4階(書庫棟は将来2階分増築可能)の建築工事が進むにつれて、当初より懸念していたことが起こった。建物の工事が3階あたりまで達した頃から、図書館西側の民家等にテレビ電波の障害が出始めた。NHKの現場調査を数ヶ所で実施してもらったデータをもとに、その対策を検討した結果、影響のある各戸を訪ねながら、共同視聴設備を取り付けさせてもらうことで了解を得た。

又、一方では、地下書庫建設のため必要とされる地下8米の地盤調査は、幸いにも地下鉄谷町線敷設による地盤調査のデータを参考資料として提供してもらえたことは有難いことであった。

しかし、地下工事の掘削作業が始まると、某民家から庭の泉水の水が濁り出したというクレームもあって、府立公衆衛生研究所へその水を持参し、分析、調査を依頼したことなど、工事に関連した数々のできごとは、今でも鮮やかに甦る。

やがて1974(昭和49)年1月31日に工事竣工。続いて館内設備の工事が急ピッチで進められた。特に地下に設置される積層の電動書架をはじめ書架の組み立て工事は、技術者が近くの旅館に泊り込み、その完成を急いだ。

書架工事の完成にともない、中之島図書館から大量の内外特許資料、国立国会図書館関西地区科学技術資料館として寄託されているPB、AD、AECレポートなどの科学技術資料が移

管され、昭和町の臨時館から開架図書と巡回文庫用図書の移転、それに住友倉庫預け分の搬入など順調に進められ、1974(昭和 49)年 4 月 1 日、従来の天王寺分館は、大阪府立夕陽丘図書館として新しい機能を備えた府立 2 館目の独立図書館としてその第一歩を踏み出したのである。



## 少年院と図書館サービス

脇谷 邦子（中央図書館）

日置 将之（中央図書館）

### はじめに

大阪府立図書館(以下、「府立図書館」という)と浪速少年院<sup>(1)</sup>との交流は 1958(昭和 33)年から始まり、1989(平成元)年まで続けられていた。この交流では、図書の貸出だけでなく、少年院の院生を招いた図書館見学の実施や、少年院の読書関係行事に司書が参加する等、様々な取り組みがなされていた。このような、図書館と少年院との交流については、関係雑誌等でもほとんど報告が見られないため、珍しい取り組みであったと考えられる。

上述した浪速少年院と府立図書館との交流は、残念ながら現在は完全に途絶えている。「子どもの読書活動の推進に関する法律」(平成 13 年法律第 154 号)が制定され、子どもの読書活動に対する社会的関心が高まっている今こそ、このような交流が必要なのではないだろうか。

そこで本稿では、図書館と少年院との交流が再び活性化することを期して、以下の点を中心に論述する。

- (1) 府立図書館を中心とした大阪の公共図書館と、浪速少年院との交流の歴史を明らかにする。
- (2) 少年院の読書環境や読書の活用方法を明らかにし、少年院における読書の意義について考察する。(全国の少年院を対象に実施したアンケート調査を実施)
- (3) 法務省矯正局が策定した先進的な図書館運営指針である「矯正図書館基準案」を紹介し、少年院における読書活動との関わりについても考察する。
- (4) (1) から (3) の内容を踏まえ、現在の図書館が少年院に対して提供することが可能なサービスを提案する。

## 1 少年院と図書館 大阪での交流の歴史

この章では、大阪の図書館と少年院との交流の歴史について、図書館及び少年院関係者等、多くの方々へのインタビューを中心に明らかにする。

### 1.1 浪速少年院と府立図書館との交流

府立図書館が浪速少年院と関わりをもった歴史は古い。1958(昭和 33)年頃には団体貸出をしていたことが、資料によって裏づけされている。『圖書あんない』No.15 の巡回文庫回付団体一覧に浪速少年院の名が見られる<sup>(2)</sup>。その後、およそ 2~4 ヶ月ほどの間隔をおいて、定期的に図書の交換をしていた。この状態は 1960(昭和 35)年の年末まで続いていたことが『圖書あんない』No.43 により判明している<sup>(3)</sup>。しかし、その後の状況は分からない。『圖書あんない』はこの号で終刊となり、以降は『わだち』と改題された新しい広報紙が刊行されることとなったが、『わだち』は自動車文庫活動が中心で、貸出文庫の記述が一切見られなくなったためである。また、1961(昭和 36)年から、貸出文庫の貸出方法を改め、それまで個々の団体と図書館が直接やり取りしていたのが、ブックステーションから各文庫に貸し出すという方式に変更されたため、実情が把握できなくなった<sup>(4)</sup>。当時の記録もなく、当時の関係者にも聞いて廻ったが、関係者の記憶にも残っていないことが多く、詳細は不明である。この頃から、自動車文庫の利用が活発化していくのと反比例して、貸出文庫の利用は減少していく。そのため、業務としての比重も軽くなり、印象も薄いものになっていったようである。

浪速少年院が貸出文庫を利用するようになった理由としては、下村治男元法務教官<sup>(5)</sup>によれば、少年院の建て替え工事(1959年 11月~1961年 8月)で、書籍に回す予算がなくなったために借りることにしたのではないかとのことである。当時の少年院では本の扱いも軽く、記録も必要と思われていなかったため、府立図書館の貸出文庫利用については、少年院の内部資料も含めて記録は残っていない。ただ、1961(昭和 36)年以降、1971(昭和 46)年に利用が再開されるまでの間、貸出文庫利用が長期間中断していたことは確かであると思われる。

### 1.2 利用の再開、読書会への参加

図書館と少年院との交流が再開したのは 1971(昭和 46)年 6月からである。『浪速五十年の歩み』の年表によれば、昭和 46 年、「6・23 各寮文化系の院生 3 名は、大阪市立天王寺

図書館へ図書借出しを兼ねて見学に行く」とある<sup>(6)</sup>。大阪市立天王寺図書館とあるが、これは大阪府立図書館天王寺分館の誤りである。下村氏へのインタビューにより確認した。

本の重要性が分かってもらえる院長に変わったことが大きな理由だったそうで、見学に行った時、神谷司書から「院生はどんな本を読んでいますか」と聞かれて、「(少年院に)来てください」、「行きますよ」ということで、読書会参加が実現した。図書館からの読書会参加が2～3回あった後で、11月26日には府立図書館整理課の上野武彦係長が少年院の読後感想発表会に講師ならびに審査員として招かれている。その後、浪速少年院から2ヶ月に1回程度、見学を兼ねて、本の借り出しに訪れ、図書館からは少年院の読書会に定期的に参加している。浪速少年院側の記録によれば、1973(昭和48)年9月神谷房子司書、1974(昭和49)年2月に林郁子司書、『浪速会たより 浪速少年院創立80周年記念誌』(以下、「80周年記念誌」という)<sup>(7)</sup>や、他の資料<sup>(8)</sup>により、1974(昭和49)年5月に松岡澄子・吉田敏代司書、7月に吉田敏代・木下紀夫司書が参加していたことが確認できる。1975(昭和50)年4月に「府立図書館から司書2名が来院し、読書会を行なう。少年6名参加」とあり、6月にも司書1名が参加とある。1975(昭和50)年以降は1978(昭和53)年までの間、夕陽丘図書館読書振興課振興係の前野貞子司書が2ヶ月に1回程度、定期的に参加していた。図書館・少年院双方の関係者の証言によれば、『80周年記念誌』では少年院に行った事柄が全て網羅されているわけではなく、実際の回数はもっと多かったとのことである。

読書会に参加した職員は課題図書の選定に関与していないこともあるのか、総体的に取り上げた本の内容、読書会の印象等は薄いものであった。また、前野司書の話によれば、前半の2年ぐらいは読書会であったが、後半の2年は読後感想文発表会であり、講評を求められたとのことであった。府立図書館からの少年院派遣は前野司書を以て終わった。

少年院読書会への職員派遣が実現した背景としては、以下のことが考えられる。

- (1) 1971(昭和46)年ごろは自動車文庫友の会の活動が活発化し、各地に多くの読書会が誕生していた。
- (2) 夕陽丘図書館開館に前後して、子ども文庫が各地に誕生し、自動車文庫の利用者も増加していた。また、子ども文庫に関わったお母さん方による図書館設置の住民運動が府内全域で活発になっていた。
- (3) 高度経済成長期で地方財政も潤い、各市で図書館が建設され、図書館振興・読書振興の気運が高かった。

このような状況のもとに、利用者の要求に応じて、府立図書館職員は積極的に各地域の

読書会に参加していった。ところが、高度成長期も終息し、各市の図書館が充実してきたところで、読書会への参加は本来府立図書館の仕事なのかという課内の声もあり、地元の茨木市立図書館にバトンタッチすることになった。しかし、図書館見学と図書の貸出は自動車文庫終焉の1989(平成元)年まで続いていた。

### 1.3 茨木市立図書館等と少年院との交流

茨木市立図書館と浪速少年院との関わりは1977(昭和52)年2月に府立図書館からの紹介で、団体貸出の登録をしたことから始まる。当時の久保田吉温館長(館長就任後司書資格取得)が元教員で、理解のある人であったため、積極的に協力したのだと思われる。おそらく館長の仲介であろうと思われるが、1977(昭和52)年11月には図書館障害者サービスのボランティアグループである「グループ藍野」が少年院文化祭で朗読を行っており、以後2回行なっていることが『グループ藍野のあゆみ』に記録されている<sup>(9)</sup>。『80周年記念誌』によれば、「昭和53年5月29日、茨木市立図書館司書来院、読后感想発表会を行なう」とある。この時、参加した斉藤茂夫司書<sup>(10)</sup>の当時のメモが残っており、5月29日(月)13時~15時だったことが分かった。これも府立図書館からの紹介だった。斉藤氏の話では「前もって3通ほどの感想文が届き、これに対して講評しなければならなかった。当日は講堂に院生が集められ、壇上で15分ほど話をした」とのこと。少なくとも1981(昭和56)年までは毎年担当者が招かれていた。それ以降は斉藤氏の異動があって分からない。異動で再び戻ってきた1984(昭和59)年には少年院への職員派遣は終わっていた。市長部局から異動で廻ってきた人が担当になったりして、派遣が困難になったのではないかと推測される。

茨木市立図書館の他に、東大阪市立図書館と河内少年院との交流もあった<sup>(11)</sup>。浪速少年院から異動した下村氏は、転勤先の河内少年院でも地元の図書館との交流を試みた。東大阪市立図書館に出向き、選書の相談をしている。当時の職員(山本久子司書)はそのことをよく覚えていて、できる限り相談に応えようと思ったと、回想している。団体貸出や、読書会への参加にまでは至らなかった。当時の東大阪市立図書館の蔵書はそれほど充実していなかったこともあったのかもしれない。

### 1.4 読書会のようす

少年院での読書会の位置付けはクラブ活動の一環であり、文芸クラブに所属していた院

生が読書会を行ったり、詩や文芸の創作等も行っていたようである。文芸クラブは週1回の活動だった。課題図書の設定は少年院の教官がしており、図書館に相談はなかった。関係者とのインタビュー等により判明している課題図書名は、『老人と海』（ヘミングウェイ著）、『大陸』（有馬頼親著）、『丁稚』（花登筐著）、『二十四の瞳』（壺井栄著）、『高瀬舟』（芥川竜之介著）、『野菊の墓』（伊藤左千夫著）等である。教官の一人は、本を読む時は主人公を自分に置き換えて、自分ならどうするかを考えて読むように指導していたという。『二十四の瞳』と『高瀬舟』は、境遇の似通った少年たちにとって思うところが多かったようで、『高瀬舟』では全国の少年院の感想文コンクールで何年も連続して金賞を取ったという。読書会に参加した松岡司書は、課題図書の関連資料を用意していった。司会進行は松岡司書が行なった。「ポンポンと話が盛り上がるというのではないけれど、順番に話してもらった感じではあるが、それでも結構、意見はたくさん出た」と言う。その後の読書会では少年の一人が司会を行なっている。それなりにしっかりした意見を述べている。参加した図書館職員のほとんどが取り上げた本のタイトルを覚えていない。松岡司書は芥川の小説と有馬頼親の小説（後に『大陸』と判明）とだけ覚えていた。茨木市の斉藤司書は『野菊の墓』は覚えていた。後、およそ10人の職員が読書会に参加しているのだが、書名や光景をはっきり覚えているものは少なかった。行ったこと自体も覚えていない職員もあった。ある職員はあまり面白い本ではなかったようだったと言っている。

また、少年院生と茨木市立西中学の生徒とが合同で読書会を行ったことも数回あったという。西中学の国語の担当の先生に選書の相談にのってもらったりして、実現した。中学生4~5人、院生10人程度で行なうのだが、それなりに活発な話し合いになった。それを院内の読後感想文にも生かしていたというのは、服部明夫元法務教官の話であった<sup>(12)</sup>。

#### 1.5 少年たちの図書館見学と本の借出し

図書館に本を借りに来ていた少年たちのことを記憶に留めている職員は少なくない。来館人数は2~3名で、詰襟の学生服（少年院から貸与）を着用していた。おとなしく、真面目そうだったという印象で、口数は少なかった。外出を許される少年は出院間近の優良生に限られるとのこと。前野司書は、一般の閲覧室から対面朗読室、児童室、そして特許資料閲覧室へと、できるだけ丁寧に案内することを心掛けたという。選ぶ本は府立図書館の場合は自動車文庫用の書庫の本に限られていたが、茨木市立図書館では一般開架室から選べた。事前に「こういう本を借りてきてくれ」と他の院生から頼まれることもあった。借り

る冊数は、府立図書館は1回150冊。茨木市立図書館の場合、1978(昭和53)年は年間452冊、79年600冊、1980(昭和55)年には1000冊と増加しているが、1981(昭和56)年以降は統計が文庫活動中心になったため、実数は分からなくなった<sup>(13)</sup>。少年たちが選んだ本は木箱に入れて院生が車両まで運んでいた。借りた本は少年院に戻ってから教官がチェックを行い、不適当な本(犯罪の手口が出ているもの、情緒不安定になると思われるもの、性的描写の多いもの等)は取り除いた上で寮内文庫に配っていた。

また、図書館から帰ってくると、全員の前で報告発表をした。利用者のマナーのよさとか、同世代の利用者が多くいたことや、もっと勉強をしなければいけないと思ったとか、図書分類が分かり、出版に興味を持った等の感想が寄せられている。

府立夕陽丘図書館の見学と図書の借出しは平成元年頃まで続いていたようである。毎回150冊、2~3ヶ月に1回程度、定期的に来館していた。天王寺分館時代、夕陽丘図書館建設のため分館が閉鎖していた時には中之島図書館の見学を行っていた。茨木市立図書館の場合は1984(昭和59)年ごろには貸出冊数は減少していった。

いずれにしても、浪速少年院との交流は1989(平成元年)年には両図書館とも終息する。府立図書館は自動車文庫の廃止、茨木市立図書館は新館準備で忙しくなる、浪速少年院も建て替えで院生が少なくなるという状況が重なり、30年余の長きにわたる交流は中断した。

少年院へのサービスはヤングアダルトサービスであり、アウトリーチサービスでもある。関わった職員には、その当時、そういう意識はなかったが、今日の社会状況においては、以前の時代にも増して、少年院へのサービスの重要性は高まっているのではなかろうか。

## 2 少年院と読書

この章では、少年院の読書環境や読書の活用方法について概説した上で、少年院における読書活動の意義について考察する。なお、この章の内容は、雑誌論文や図書等の関係資料、少年院を対象としたアンケートの結果、元浪速少年院職員等への聞き取り調査、並びに筆者(日置)自身の経験を踏まえたものである<sup>(14)</sup>。

### 2.1 少年院の読書環境

#### (1) 蔵書数及び図書予算

少年院の蔵書数や図書予算は、アンケート結果が示しているとおりである<sup>(15)</sup>。図書室の蔵書数(問1)は500冊から11,958冊、購入予算(問5)は年間11万から60万円となってお

り、いずれも施設ごとの違いが大きい。施設の規模が多様であるため一概には比較できないが、読書環境の整備に力を入れている施設と、そうでない施設とでは極端な違いがあると言えるだろう。少年院の運営方針は、院長をはじめとする幹部の意向に大きく影響される傾向があるため、このような違いについても、施設ごとの運営方針が色濃く反映されているのではないかと考えられる。

平均所蔵冊数(4,940冊)や平均図書予算(312,500円)については、類似施設であると考えられる学校図書館の平均(小学校：8,132冊・54万7千円、中学校：9,659冊・71万6千円、高校：24,198冊・102万5千円)と比較すると、かなり見劣りするものとなっている<sup>(16)</sup>。このように、少年院の蔵書数や図書予算は、一部の施設を除き、充実しているとは言えないものである。

## (2) 読書が可能な場所・時間

少年が読書を行う場所は、居室内か寮内のホールが一般的である。保安上の問題から、少年に図書室を長時間開放して読書に供することはほとんどない。このため、少年が図書室を訪れることができるのは、図書の貸出や返却を行う時だけの場合が多い。

読書が可能な時間は、食後の休憩等といった余暇時間や自己計画時間(自己の計画により、TV視聴・読書・学習等を行う時間)等である。また、日課に読書の時間を設けている少年院もある。

## 2.2 少年院における図書の取り扱い

少年院で扱われる図書は、官本と私本の2種類に大別できる。官本は少年用図書として入手された官有の図書で、少年院によって整備、管理されているものである。これに対し私本は、少年が入院時に携行した図書や、面会、郵送などにより差し入れられた私物図書のことである<sup>(17)</sup>。

図書の取り扱いについては、すべての少年院に共通のルールが存在しているわけではなく、刑務所等に適用される「収容者に閲読させる図書、新聞紙等取扱規定」<sup>(18)</sup>等に準じた規則が、各少年院の実情に応じて定められている。このため、少年院によって運用形態は様々であるが、官本は図書室や寮内に配され、私本は少年の申し出に応じて各寮の担当教官によって交付されるのが一般的である。官本(図書室と寮内)と私本の一般的な取り扱い方法は、以下のとおりである。

### (1) 図書室

正式名称は矯正図書館という<sup>(19)</sup>。学校図書館における学校司書や司書教諭のような専門職員が配置されているわけではなく、図書担当教官が寮担任や職業補導などの業務と並行して、図書の購入や図書室の整備を行っているのが一般的である。

図書の種類は、アンケート結果(問 2)が示しているように多様なものである。マンガを置いている施設もあるが、歴史マンガや手塚治虫の『火の鳥』『ブッダ』等の教育的な内容のものが多いようである。購入図書の選定方法は、施設によって様々であると考えられるが、少年から希望を募る、職員アンケートを実施する、出版社や読書関係団体の目録を参照する等の方法が一般的であろう。以前は、法務省矯正局による推薦図書目録が各施設に配布されていたが、この目録の作成は2004(平成16)年に廃止された。

アンケート結果(問 8)からも分かるように、少年が図書室を利用できる頻度は「二週間に一回」、「週に一回」、「週に二回」等となっており、施設によって大きく異なっている。貸出の方法は、少年が直接書棚から図書を選ぶものや、図書目録から希望する図書を選ばせるものなど様々であるが、貸出記録は図書カードや記録ノートに名前等を記入する形式がほとんどである<sup>(20)</sup>。

なお、図書室を少年に開放していない少年院も数多く存在している。このような施設では寮内文庫が主体となっており、図書室は書庫的な存在として位置づけられている。

## (2) 寮内文庫

寮内文庫の図書は、少年のたちの最も身近にある図書である。寮内の廊下や食堂、集会室などに書棚が置かれており、担当教官と共に、図書係の少年が図書の管理等を行うのが一般的である<sup>(21)</sup>。

少年への貸出については、同じ少年院でも寮ごとにルールが異なっている。これは、少年が個室で生活する寮と集団で生活する寮とでは性質が異なっているためである<sup>(22)</sup>。単独寮の場合は、決められた曜日に少年を一人ずつ居室から出して図書を選ばせる方法等がとられており、集団寮の場合も、曜日を指定して図書の交換を行っているところや、教官の許可があればいつでも図書の交換ができるところ等があるようである。

なお、寮内文庫が主体となっている施設では、定期的に文庫内の図書を書庫(図書室)や他寮の図書と入れ替えている。

## (3) 私本

私本には、官本の不足を補うという役割があるものの、管理運営上の問題から様々な制限が設けられている。例えば、犯罪の手段・方法や、性的感情を著しく刺激する内容が記



述されている等、矯正教育上不適当であると認められる図書は、差し入れがあっても閲読が許可されない場合がある。このような許可・不許可の判断は安易にできるものではないため、担当教官だけではなく、首席専門官や統括専門官等の幹部による確認が行われている。また、少年が同時に所持できる私本の冊数には、通常3冊以内といったような制限が設けられている。ただし、辞典や学習用図書は制限の対象外に置かれている場合が多い。所持期間についても同様で、通常の図書には一ヶ月以内といったような期限が設けられているが、辞典等の場合は必要な期間とされていることが多い<sup>(23)</sup>。

読み終わった私本は少年の願い出により領置扱いとなり、出院時まで領置庫に保管される。しかし、在院期間が長い少年や私本の差し入れが多い少年の場合は、図書が領置庫に入りきらなくなることもあるため、面会に来た家族等が持ち帰ることもある。

このほか私本については、不正書込み等の不正行為<sup>(24)</sup>に利用される可能性が高いため、定期的に点検が行われている。

### 2.3 少年院における読書の活用

少年院における読書は、矯正教育として利用する「読書指導」と、余暇時間における「読書」の二種類に大別できる。

#### (1) 読書指導

読書指導は処遇技法の一種として古くから研究されており、これまでに様々な方法が実践されている。近年は個別処遇が重視される傾向にあり、読書指導も個別担任の教官と少年との、一対一の関係の中で行われることが多くなってきている。各施設での実践形態は様々であるが、読書指導の主要な方法としては以下のものが挙げられる。

- ・課題図書 課題図書を利用した読書指導は多くの少年院で実施されている。実施方法は少年院によって様々であるが、少年の問題性や必要性等を考慮して個別担任が図書を準備し、読書記録や読書感想文などを書かせた上で、面接等を行うのが一般的な流れである<sup>(25)</sup>。通常、課題図書の目録は各少年院で作成されている。
- ・読書会 対象者が読んだ図書を紹介するものや、順番に朗読するもの、感想を発表し話し合うもの等の形式がある。対象者を(読書)能力や問題性等でグループに分け、少人数で行うのが一般的である。また、施設によっては外部講師を招き、近隣にある中学校や高等学校の生徒を交えて実施しているところもある<sup>(26)</sup>。
- ・読書集会 少年院で伝統的な処遇技法である集会指導に、読書指導を組み合わせた

ものである。参加する少年の数は読書会よりも大人数で、全員が課題図書を読んでいることが前提となる。少年に司会をさせて討議を行い、指導教官は必要に応じて助言・指導を加え、最後にまとめを行うのが一般的である。読書会と同様、外部の援助者を招いて実施している施設もある<sup>(27)</sup>。

- ・読書感想文発表会 読后感想文発表会ともいう。アンケート結果(問 15)にあるように、多くの少年院で実施されている。課題図書を定めて行う場合や、少年自身に図書を選ばせて行う場合がある。対象となる少年すべてに 1,500 字程度の感想文を作成させ、各寮で数名の代表者を選抜した上で、全院生の前で発表させるのが一般的な流れである。発表の講評は、篤志面接委員や教諭師等の外部の援助者に依頼することが多い<sup>(28)</sup>。

## (2) 特徴的な取り組み

少年院によっては、読書を用いた独自の取り組みを行っているところがある。例えば、盛岡少年院では、郷土の偉人である宮澤賢治を題材にした「賢治祭」を毎年 9 月に実施している。この行事では、本番の数ヶ月前から賢治に関する壁新聞やポスターの作成等といった準備が始められ、その過程で賢治の伝記や作品を少年たちが自然と読み込んでゆけるようになっている。本番では、読書感想文の発表や合唱、創作劇の上演等、賢治をテーマにした多彩なプログラムが実施されている。この行事は、まさに読書を中心にすえた取り組みであると言えるだろう<sup>(29)</sup>。

また、1 章で述べたような浪速少年院と公共図書館との緊密な連携についても、非常に特徴的な取り組みであったと言える。現在でも公共図書館と連携している少年院は存在している(アンケート結果の問 12 参照)が、図書の貸出や図書館見学といった単純なものがほとんどである。当時の浪速少年院と府立図書館・茨木市立図書館の関係のような多角的な連携を行っている少年院は、現在では存在していないだろう。

## (3) 余暇時間における読書

すでに述べたように、少年院で読書ができる時間は、余暇時間や自己計画時間、「読書」に関する日課の時間に限られている。この内、自己計画時間や「読書」に関する日課の時間は、概ね週数時間であるのに対し、食後等の余暇時間は比較的豊富に存在している。このため、少年が読書をする時間は余暇時間が中心となっている。

余暇時間には、学習・読書・新聞閲読・手紙の作成のほか、TV 視聴等を行うことができる。ただ、TV 視聴については、少年が自由にできるわけではなく、平日の午後 8 時台や休日の午後など、決められた時間のみに認められているのが一般的である<sup>(30)</sup>。また、新

聞についても各寮で一紙程度をまわし読みすることが多く、読める時間は限られている。このため、余暇時間に少年が自分の判断で自由にできることは、学習や読書、手紙の作成にしぼられる。これらの中で、娯楽としての要素がある活動は読書だけである。そのためもあってか、少年院の少年は概してよく本を読むと言われている<sup>(31)</sup>。このように読書は、少年院における数少ない娯楽の一つとして、非常に重要な位置を占めている。

## 2.4 少年院における読書の意義

### (1) 読書の意義

アンケート結果(問 11)が示しているように、少年院の職員は読書の意義を大いに認めている。では、具体的にどのような意義があるのだろうか。『矯正処遇技法ガイドブック』の「読書指導」に関する解説では、以下のようなものが挙げられている<sup>(32)</sup>。

- ・「人の社会化」に大きな役割を果たす代理経験を与え、人格形成に影響を与える。
- ・社会生活に必要な様々な情報を伝える。
- ・人に様々な慰安を与え、余暇には娯楽を提供する。
- ・視野を広め、語彙を豊かにして自己表現力を高める。
- ・認識を明確化して、自己の客観視を可能にする。

これらの働きは読書一般に当てはまるものだと思われるが、罪を犯した少年の、社会不適応の原因を除去し、健全な育成を図ることを目的とする少年院にとっては、特に有意義なものであると考えられる。

上述したもの以外にも、少年院にとっての意義として、他の処遇との相乗効果が考えられる。例えば、読書感想文や読書集会は読書指導と作文指導・集会指導を融合させたものであるし、教官と少年が「読書」を共有すれば、個別面接の話題にすることも可能である。

少年院に入院してくる少年には早期に学校をドロップアウトした者が多く、本を読んだ経験がほとんどない者も多い。そのためもあってか、少年たちには、概して語彙力や表現力が乏しいという特徴がある。このような少年たちに対して、適切な指導を行えば読書習慣を身につけさせることができるという点も、少年院における読書の意義と言えるだろう。

### (2) 少年の言葉

少年院経験のある俳優の宇梶剛士は、少年院で出会った一冊の本が人生のターニングポイントになったと述べている<sup>(33)</sup>。同氏によれば、少年院で読んだチャップリンの伝記が契機となり、役者の道に進もうと考えるようになったそうである。

筆者の接した少年の中にも、「もっと早く読書に出会っていたら、少年院に来ることもなかったかも知れません」と、読書の意義を自らの実感として述べた少年がいた。この少年は、これまで見向きもしなかった読書から様々ことを学び、考えさせられたという。そして、傷害事件を起こした自分の短絡さや想像力の無さをあらためて思い知ったと述べている。この少年は、「これ以上道を踏み外さないためにも、少年院を出てからもずっと読書が続けていきたい」とも述べており、読書が自分にとって必要なものであるとの認識を示していた。このような少年の例は、全国の少年院で数多く存在しているのではないかと思われる。

本から最も遠い存在であった少年たちが読書の楽しみを知り、出院後も読書が続けることで生きる力を得られるのならば、少年院における読書には極めて大きな意義があると言えるだろう。

### 3 矯正図書館基準案について

この章では、矯正図書館基準案とはどういうものなのか、また、この案がその後、矯正局関係者にどう伝えられたのか、また伝えられなかったのかということについて考察する。

#### 3.1 矯正図書館基準案とは

調査の過程で「矯正図書館基準案」の存在を知った。この基準案に関しては「「矯正保護図書館規定」立案審議」<sup>(34)</sup>、「わが国の矯正図書館」<sup>(35)</sup>、「日本の刑務図書館 行刑施設被収容者の「本と読書」をめぐる制度と現状」<sup>(36)</sup>等の先行文献がある。「日本の刑務図書館」には「基準案」の全文と、「基準案」に先立つ「矯正保護図書館規定案」全文も紹介されている。この「基準案」を初めて目にした時は驚かされた。第1章・総則では、「施設内に矯正図書館を設けなければならない」(1条)、「収容者の希望等に基づいて運営しなければならない」(2条)、「少年を収容した時は、矯正図書館の運営に特別の考慮を払わなければならない」(3条)、「地方教育委員会、公共図書館、学校その他の機関と密接な連絡を取り、その協力を得ること」(5条)とある。第2章・職員では、「矯正図書館主任及び司書を置く」(7条)、「他の機関の主催する講習会、会合に参加させる、公共図書館等を見学させる」(10条)。第3章・施設と設備においては、「便利な場所に設置すること」(11条)、「自由接架式」(13条)、「絵画や植木等も設けるように」(14条)。第4章・資料の整理と保管では「NDCで分類すること」(19条)、第6章・読書指導では、「公共図書館関係職

員や著名な著者を招いてその講演をきかせること、公共図書館を見学させること」(32条)第7章・閲覧室の運営では、「自由時間はできる限り閲覧室を開放して、収容者が十分これを利用することができるように考慮しなければならない」等々、収容者の人権をも尊重したきわめて先進性、理想性の高い内容である。教育委員会、公共図書館、学校等との連携・協力や、運営や活動内容に関して、具体的な内容に触れていることにも注目したい。

「矯正保護図書館規定案」は1949(昭和24)年に、「基準案」は1953(昭和28)年に策定されているが、残念ながら成案には至らなかった。先述の文献等によれば、図書館の機能を高く評価し、必要性を認識し、矯正施設の図書館を改善して、収容者にも優れた図書館サービスを提供しようと努力した矯正局関係者が少なくなかったことが伺える。

### 3.2 「基準案」はどう伝えられたのか

「矯正図書館の管理と読書指導」という資料がある<sup>(37)</sup>。加藤正明<sup>(38)</sup>が、研修会講師を務めた時の配布資料であるらしい。第2回目まとめの資料として、「矯正図書館基準案を作るまで - 九州管区教育家の調査によると」として、「(1)明治9年の監獄への私本差入許可」から、「(12)昭和20年8月の刑政甲第1720号での私本の取り扱い」までの経緯を記した後、「基準案」に関して、触れている。少し長くなるが引用する。

(13) 昭23 国会法、昭25 公共図書館法、昭28 学校図書館法と我が国の図書館は、その社会的重要性が認められて飛躍的に強化されてきたので、矯正局菊池教育課長(現高松管区長)井田課長補佐(現新潟少年院長)等は矯正図書館も日本の図書館運動におくれることなく強化するため、矯正図書館基準案を立案するに至った。

(14) この案は、現在、案のみで止まっているが、その内容は中央矯正研修所の図書担当官研修で伝達され、昭27、矯正施設の図書館にもNDCが採用されるなど、1部分はとり入れられて実施されている。

(15) 矯正図書館は将来何らかの法的保護のもとに強化されなければならない。そして学習の資料センターとして、教養資料センターとして活動すべきである。そのためには単なる図書の格納庫たるに止まらず、教材のクリッピング、ファイリングを行い、視聴覚資料等の教材センターをも兼ねて、寮生活の憩いの場となるべきであり、図書担当係官は熱心に読書指導を行なうことにより、良き生徒の教官たるつとめを果たすべきである。それらの活動の評価は別紙学校図書館評価基準により、反省向上の道へ進んでゆきたいものである。

1953(昭和28)年から、案の状態で止まったままであるが、(14)にあるとおり、細々と伝達されており、矯正職員必携の『矯正実務六法』には矯正図書館基準案が収録されていたという。しかし、現在の矯正関係職員の中に、その内容の詳細を知る人は少ない。

この「基準案」を知った時、浪速少年院の取り組みは、まさにこの基準案に沿ったのではないかと思い、読書会・図書館見学に関わった下村・服部の両氏に尋ねたところ、「関係はない」と否定された。「基準案」があろうとなかろうと、少年たちの更生と読書を大切に思うが故の試みは、自ずと決まってくるというものなのかもしれない。

「矯正図書館基準案」はなぜ成案に至らなかったのでしょうか。「矯正局教育課から示されている矯正図書館基準案なるものに初めてお目にかかった。あまりに立派すぎて、これが実施されると、さぞや各少年院、鑑別所は当惑するのではなからうか。まあ、案でよかった、と当所のお粗末な図書室を見回しながら・・・」<sup>(39)</sup>という矯正職員の本音が成案に至らなかった理由の一つなのであろうと推測される。あまりに理想主義的すぎたのかもしれない。残念なことである。

#### 4 少年院への図書館サービスをすすめるために

この章では、少年院に対して図書館サービスを進めるための、法務省矯正局と図書館双方の役割について考察し、図書館で実行できる具体的な取り組みについて提案する。

##### 4.1 法務省矯正局の役割

少年院の少年たちはよく本を読むという。調査の過程で、少年院の図書室も見せていただいた。本当によく読まれていると実感した。しかし、新しい本が少ない。特に今、「外の社会」で少年たちが読んでいる本とは大きな隔たりがある。少年院の図書予算は少ない。忙しくてじっくり本を選ぶ時間的余裕もない。勢い、名作物や古典に偏るのはいたしかたない。ほとんどの少年院では法務省矯正局教育課が選定した推薦図書リストを参考にして、購入図書を選ぶという<sup>(40)</sup>。リスト作成にあたっては半年に一度出版社の新刊情報から600冊ほどを選んで買い、それを各施設に20～30冊ずつに分けて送り、手分けして読んでもらってコメントをつけて送り返してもらうのだという。それで、ちょっとした解説付きのリストができあがるという。600冊選ぶ基準は特にないが、色々なジャンルからバランスよく選び、猥褻なもの、犯罪の知識を植えつけるもの、読めそうもない難しい専門書は外すという。この推薦図書リストは少年院のみを対象にしたも

のではない。刑務所等を含む矯正施設全般を対象にしている。しかし、この推薦図書リストの作成は2004(平成16)年度から廃止されている。2005(平成17)年度の組織改変で、教育課自体がなくなった。矯正図書館基準案も最新の「矯正実務六法」からは、姿を消したという。

2001(平成13)年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定され、2002(平成14)年には「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」も策定されている。この基本計画の中では、社会全体での取り組みの推進が謳われている。しかし、障害児(者)や在住外国人への配慮については、「計画」の中やパブリックコメントでも、指摘され、触れられているが、少年院の中の少年たちのことは忘れ去られている。少年院は行刑施設ではなく、教育施設である。しかも、国の機関である。ある少年院関係者に、法律制定後に読書活動の推進につながるような通達や取り組みの奨励などの、何か変化はなかったかと問うたところ、残念ながら「何もない」という答えであった。アンケート(問11)によれば、少年院関係者の方のうち100%の方々が読書は役に立つと回答されているとおり、読書の重要性が認識されているにもかかわらず、少年院の読書環境の整備は遅れていると言わざるを得ない。

法務省は「子どもの読書活動の推進に関する法律」の精神にそって、少年院の読書環境の整備を図るべきではないだろうか。すなわち、図書室の環境整備、図書の充実、自由に本が読める環境、矯正職員への啓発等　いずれも“人”と“金”を要することなので大変かもしれないが、少しずつ計画的に取り組む方法もあれば、公共図書館等との連携により、解決できる部分もある。

「矯正図書館基準案」は立案された当時は、あまりに理想主義的で先進的すぎたかもしれないが、21世紀の今からみれば、当たり前の内容ではないだろうか。もちろん、矯正施設としての制約もある。しかし、「文字・活字振興法」(平成17年7月29日法律第91号)が制定され、読書の重要性が再認識された今こそ、法務省によって、新たな「矯正図書館基準案」の制定が検討されることを望みたい。

#### 4.2 少年院への図書館サービス～具体的取り組みの提案

図書館界における取り組みも充分とはいえない。読みたい人に読みたい本を届けるのは図書館人としての使命である。矯正施設収容者に対する図書館サービスについては中根憲一らが長らく取り組んでおり、論文も多数執筆されている<sup>(41)</sup>。また、第52回IFLA東京大会において、アウトリーチサービスの一つとして取り上げられているが<sup>(42)</sup>、その後、

具体的なサービスの取り組みが進んでいるとは言いがたい状況である。そこで、今回の研究をきっかけに、過去の図書館と少年院の交流や、少年院の実情を踏まえて、「本を読みたい少年たちがいる」ことを多くの図書館関係者に知ってほしい。図書館で何ができるか考え、以下の取り組みを広く図書館界に提案したい。

(1) 本の情報を届ける

現状では法務省も少年院も、少年たちに適切な図書の選定を行なうことは極めて困難な状況がある。図書館ならば、多くの新刊図書の中から、適切な図書を選び出し、解説をつけて届けることができる。勿論、選定基準については少年院関係者と調整する必要がある。古典も名作も悪くないけれど、今を生きる少年たちが共感できる作品を届けたい。

(2) 団体貸出をする。

少年院の蔵書冊数は限られている。予算も少ない。本を読みたい少年たちの読みたい気持ちに応じて、団体貸出を行なうことは、今日の多くの図書館では可能なはずである。場合によっては、移動図書館等を活用して少年院に図書を届けることも可能であろう。

(3) 読書会等へ参加する

読書会は、多様な人の多様な読みや感想を知ることで、自分自身の読みが深まる。多くの場合、教誨師や更正保護婦人会等の年配者の参加が多いらしいが、あまり教育・矯正ということを少年たちに意識させない、ということで、図書館司書が参加する意義がある。

(4) 朗読会やストーリーテリング、ブックトーク等を出前する

少年院では、本が読めなくて、読むということ自体から指導しなければならない少年も少なくないという。図書館ではその子の読書力に応じて、適切な本を紹介することができる。本を読めない少年には読み聞かせや、ストーリーテリングを通して、本に親しんでもらうことができる。ブックトークを通じて、読書意欲を喚起することができる。

(5) 少年院からの見学を受け入れる

情報時代の今日、最も身近で、誰もが利用できる図書館の役割を知ることは、出院後、社会に戻った少年たちにとって、その後の人生に役立つであろう。



以上の取り組みは、現在の公共図書館では十分に可能な取り組みである。以上の取り組みができることを少年院に知らせ、法務省にも働きかけていきたい。

少年院の少年は本を求めている。図書館界はこのことを心に刻み、少年院への図書館サービスの取り組みが少しでも前に進むことを期待したい。

この論文は、「日本図書館研究会 児童ヤングアダルト図書館サービス研究グループ」の協同研究として取り組み、最終的に脇谷・日置がまとめたものです。

この論文を執筆するにあたり、多くの方々・関係機関のご協力をいただきました。ここに謹んで謝意を表します。

## 注・引用

---

- (1) 少年院とは、家庭裁判所から保護処分として送致された少年に対し、社会不適応の原因を除去し、健全な育成を図ることを目的として矯正教育を行う法務省所管の施設である。  
『希望を胸に 少年院のしおり』法務省矯正局、発行年不明、1頁
- (2) 「巡回文庫回付団体一覧」2頁、『圖書あんない』No.15、大阪府立図書館巡回文庫課、1958.1
- (3) 「十一月貸出文庫交換案内」2頁、『圖書あんない』No.43、大阪府立図書館巡回文庫課、1960.10
- (4) 「貸出文庫について」5頁、『圖書あんない』No.43、大阪府立図書館巡回文庫課、1960.10
- (5) 2005年11月14日インタビュー実施。同氏は1957.3～1975.3,1977.8～1993.3の間、浪速少年院に在任していた。
- (6) 『矯正院から少年院へ 浪速五十年の歩み 五十周年記念誌』浪速少年院、1973年、178頁
- (7) 浪速少年院創立80周年記念誌発行委員会『浪速会たより 浪速少年院創立80周年記念誌』浪速少年院、2004、122頁～126頁
- (8) 『浪速文芸』浪速少年院文芸部、1974年
- (9) グループ藍野『グループ藍野のあゆみ「ありがとう二十年」』茨木市立図書館、1995年、62頁
- (10) 2005年11月7日インタビュー実施。茨木市立水尾図書館館長
- (11) 下村治男「河内少年院における図書の取り扱い」67頁～71頁、『矯正教育』28-236、大阪矯正管区、1977年
- (12) 2005年12月19日インタビュー実施。同氏は1975.3～1989.4の間、浪速少年院に在任していた。
- (13) 『図書館統計資料』昭和51～54年度、茨木市立図書館(謄写版刷)
- (14) 筆者(日置)は、1999～2002の3年間、法務教官として初等・中等少年院で勤務していた。
- (15) アンケート結果については、添付資料を参照のこと。
- (16) 全国S L A研究・調査部「2005年度学校図書館調査報告」37頁～50項、『学校図書館』661、全国学校図書館協議会、2005年
- (17) 別所恒夫「少年院及び少年鑑別所における図書の取扱いについて」38頁、『矯正教育』28-236、大阪矯正管区、1977年
- (18) 昭和41年12月13日付法務大臣訓令、矯正甲第1307号
- (19) 中根憲一「わが国の矯正図書館」20頁、『びぶろす』28-6、国立国会図書館連絡部、1977年
- (20) 酒居豊ほか「“雑感” 図書の取扱い」76頁～90頁、『矯正教育』28-236、大阪矯正管区、1977年
- (21) 芳賀貞雄「読書指導について」113頁、『刑政』116-7、矯正協会、2005年

- 
- (22) 少年院に入院したばかりの少年や規則違反のあった少年、出院間近の少年等は単独室の寮（単独寮）で生活し、それ以外の少年は集団室の寮（集団寮）で生活するのが一般的である。
- (23) 別所恒夫「少年院及び少年鑑別所における図書取扱について」39頁～40頁、『矯正教育』28-236、大阪矯正管区、1977年
- (24) 出院後に連絡を取り合う目的で、他生の電話番号やメールアドレス等を記入していることが多い。
- (25) 芳賀貞雄「読書指導について」114頁～115頁、『刑政』116-7、矯正協会、2005年
- (26) 梅村謙「読書指導」83頁～97頁、『矯正処遇技法ガイドブック 第2分冊』矯正協会、1991年所収
- (27) 山田重廣「少年院における読書指導」72頁～78頁、『刑政』98-10、矯正協会、1987年
- (28) 芳賀貞雄「読書指導について」113頁、『刑政』116-7、矯正協会、2005年
- (29) 小田島輝夫「盛岡少年院における賢治際取組」92頁～98頁、『刑政』110-6、矯正協会、1999年
- (30) TV視聴の時間は、一般的には余暇時間よりも自己計画時間に設けられていることが多いようである。
- (31) 下村治男氏や服部明夫氏はそう述べていた。筆者（日置）自身も、少年たちが本をよく読んでいたという印象が強い。
- (32) 梅村謙「読書指導」83頁、『矯正処遇技法ガイドブック 第2分冊』矯正協会、1991年所収
- (33) 宇梶剛士「私の分岐点」3頁、『ビッグイシュー日本版』37、ビッグイシュー日本、2005年
- (34) 「「矯正保護図書館規定」立案審議」164頁、『図書館雑誌』43-11、日本図書館協会、1949年
- (35) 中根憲一「わが国の矯正図書館」18頁～24頁、『びぶろず』28-6、国立国会図書館連絡部、1977年
- (36) 中根憲一「日本の刑務図書館 行刑施設被収容者の「本と読書」をめぐる制度と現状」5頁～78頁、『図書館研究シリーズ』31、国立国会図書館、1994年
- (37) 財団法人矯正協会の運営する「矯正図書館」（東京都中野区）より提供を受けた。発行年不明。謄写版刷。
- (38) 矯正職員で司書有資格者、1964年当時中央矯正研究所図書館・JLA保存図書館調査委員会委員
- (39) 別所恒夫「少年院及び少年鑑別所における図書取扱について」36頁、『矯正教育』28-236、大阪矯正管区、1977年
- (40) e x c i t e ・ b o o k s 「ニュースな本棚」vol.43、“少年院の読書事情”（オンライン）  
入手先（<http://media.excite.co.jp/book/news/topics/>）（参照2006 1 16）
- (41) 中根憲一「刑務図書館に対する邦語文献目録」77頁～78頁、『図書館研究シリーズ』31、国立国会図書館、1994年
- (42) 1. 中根憲一「矯正施設収容者に対する図書館サービス」147-149頁『昭和61年度・全国図書館大

---

会記録<IFLA 東京大会記念資料 5 >』、日本図書館協会、1987 年所収

- 2.天満隆之輔「刑務所図書館についての考え方<研究例会報告(第 80 回) - IFLA 東京大会記念 >」、  
122 頁-124 頁、『図書館界』39-3、1987 年

## 少年院の読書環境アンケート

### アンケート調査の概要

調査目的：1. 全国の少年院がどのような読書環境にあるのかを調べる。

2. 少年院内での、読書の活用方法について調べる。

3. 少年院と公共図書館との連携に関する情報を集める。

実施対象：医療少年院を除く、全国の少年院（50施設）

実施期間：2005年10月下旬に郵送で送付。（回答期限は同年11月15日とした）

回答数：25（この内、回答できない旨の返答が3件あったため、有効回答数は22であった）

### アンケート結果

#### 問1．図書室の蔵書数はおよそ何冊ありますか。

500冊～11958冊 平均4940冊

図書室を設置していない施設の場合は、寮内等の所蔵冊数

#### 問2．どんな資料がありますか。（複数回答）

1. 文芸書	22	100%
2. 学習用図書	22	100%
3. 資格取得のための図書	22	100%
4. 芸術関係	20	91%
5. 一般教養書	22	100%
6. 実用書	22	100%
7. その他	3	21%

「その他」内訳：犯罪もの、ポルトガル語を中心とした洋書、宗教関係

**問3 . マンガを置いていますか。**

1. 置いている	a 図書と同じ扱い	12	55%
	b 特別な時のみ閲覧可	6	27%
2. 置いていない		4	18%

「図書と同じ扱い」にあった注記：歴史マンガ

「特別の時のみ閲覧可」にあった注記：夏冬特別期間のみ、許可制、薬物治療解説書

「置いていない」理由：・限られた入院期間内に資格取得の勉強や良書の読破に集中させて矯正教育の効果をあげるため  
 ・矯正教育に支障がでる  
 ・不要

**問4 . 雑誌を置いていますか。**

1. 置いている	8	36%
2. 置いていない	14	64%

「置いていない」理由：・「マンガ」を「置いていない」理由に同じ  
 ・私費で購入

**問5 . 年間購入予算はどれくらいですか。**

11万円~60万円 平均 312,500円

**問6 . 図書室以外に本を置いているところがありますか。(複数回答)**

1. 寮に置いている	22	100%
2. その他	2	9%
3. 図書室以外においていない	0	-

「その他」内訳：・教科教室

**問7 . 寄贈図書はどうしていますか。(複数回答)**

1. 内容を見て図書室に受け入れる	16	79%
2. 寮内文庫に入れる	7	32%
3. 原則的に受け入れない	0	-
4. その他	1	5%

「その他」内訳：・職員が教育部門に保管し、必要に応じて貸出す

**問8 . 入院者が図書室を利用できる回数はどれくらいですか。(複数回答)**

1. 2週間に1回	2	9%
2. 1週間に1回	3	14%
3. 1週間に2回	4	18%
4. いつでも	5	23%
5. その他	8	36%

「その他」内訳：・図書室は設置していない

- ・各寮の図書を週に2回程度交換している
- ・図書室は実質「図書保管室」として運用しているため、被收容者は通常入室しない
- ・寮単位に図書館コーナー設置されている
- ・個別処遇のものについては適宜担任が用意する
- ・必要に応じて、月一回程度、各寮の文芸担当者に委任
- ・各寮内に任せてある
- ・職員が許可をし、貸し出す

「いつでも」と回答した施設の内4施設は、寮内文庫についての利用回数（図書室を設置していないか、設置していても少年には開放していないとの記述があった）

問 9 . 図書室の担当者は決まっていますか。

1. 決まっている	18	82%
2. 決まっていない	4	18%

問 10 . 矯正図書館基準案を知っていますか。

1. よく知っている	0	-
2. 知っている	4	18%
3. 聞いたことはある	6	27%
4. 知らない	12	55%

問 11 . 読書は入所者にとって役に立つと思いますか。

1. 大いに役に立つ	22	100%
2. まあまあ役に立つ	0	-
3. あまり役に立たない	0	-

問 12 . 地域の公共図書館と連携していますか。

1. 連携している	A 本を借りている	2	9%
	B 本についての情報を聞く	0	-
	C 図書館見学	2	9%
	D 図書館からの訪問受け入れ	0	-
	E その他	1	5%
2. 連携していない		17	77%

「その他」内容不明



問13. 図書館に団体貸出の制度があり、希望すれば、まとめて本を貸出しているのをご存知ですか。

1. 既に利用している	A 図書館が選書	0	-
	B 指導教官が選書	0	-
	C 院生が選ぶこともある	2	9%
	D その他	0	-
2. 知っているが利用していない		11	50%
3. 知らない		9	41%

問14. 上記質問で、 と答えた方に、理由をお聞かせください。(母数20)

1. 手続きが面倒	3	15%
2. 希望する本がない	0	-
3. その他	15	75%
回答なし	2	10%

「その他」内訳：・検討中 ・今後検討 ・以前に利用していたが休止中  
・現在、図書の整備を図っているため、院内にある本で充足

問15. 読書に関する取り組みを実施していますか。(複数回答)

1. 読書会	3	14%
2. 読后感想発表会	15	68%
3. その他	8	36%
4. 実施していない	0	-

「読書会」の頻度：毎月、月2回

「読后感想発表会」の頻度：毎月、2ヶ月に1回、3,4カ月に1回、4カ月に1回、半年に1回、年に1回、寮ごとに毎月及び全体で年1回、頻度不明

「その他」内訳：・月1回「図書だより」発行

- ・毎日新聞社主催の読書感想文コンクールへの参加
- ・少年の問題性に応じて個別に課題図書を指定し、その感想を書かせている

#### 問16．公共図書館への希望（自由回答）

- ・新刊図書や人気図書の情報があれば、当院にもその情報を教えてほしい。
- ・図書館にある本の案内などがあれば、利用しやすいのではないかと思う。
- ・今回のアンケート結果を図書館研究会の発表に反映させたいということですが、当院の教育資料として役立てたいと思いますので、今回の研究の発表原稿の要旨でも結構ですが、送付していただくとありがたい。
- ・巡回文庫などがあればいいと思います。
- ・連携についての制度等の広報につとめてほしい。
- ・この度の結果を参考にさせていただき、当方の改善に役立てたいと考えておりますので、よろしければ調査結果を送付していただければ幸いです。ご多忙だとは思いますが、よろしく願いいたします。
- ・10代、若者を対象とした就労・就職を支援する図書(出版)の充実。

## 「子どもの本を読む会」の果たした役割

前田 千慧 (元中央図書館)

大西 登貴子 (中央図書館)

前野 貞子 (中之島図書館)

脇谷 邦子 (中央図書館)

### はじめに

大阪府立図書館に「子どもの本を読む会」(以下、「読む会」という職員有志による研究会があった。1968(昭和43)年2月に発足し、2004(平成16)年3月に解散するまで、じつに36年間にわたって活動を続けてきた会である。

「読む会」の活動については、中之島図書館の百周年記念に刊行された『中之島百年』において、1974(昭和49)年に夕陽丘図書館で児童室が設置され、その活動が中央図書館のこども資料室へとつながっていった経過とともに簡潔にまとめられている(注1)。また発足当初からの「読む会」の活動については、『大阪府立図書館紀要』第8号にまとめられている(注2)。あわせてお読みいただきたい。

この36年の間に「読む会」にかかわった府立図書館職員は多数にのぼり、そうした人たちの努力の積み重ねによって今日の府立図書館の児童サービスが作り上げられたといっても過言ではないであろう。

この小稿は、夕陽丘図書館における児童室開室の頃を中心に、その前後における「読む会」の活動の歴史をたどり、活動の記録として書き留めておくことを目的とし、「読む会」が府立図書館の中で果たした役割についても考察する。

### 1 夕陽丘図書館での児童室開室前後を中心に

#### 1.1 児童書合評会を通して

「読む会」では、資料をみる目を養うことを目的に子どもの本の合評会を“とぎれそうだとぎれることなく続け”てきた(注3)。合評会の成果は、府立図書館巡回文庫課の広報紙『わだち』の中での児童書の紹介や、児童書のリスト作成等の業務に活かされていた。

『わだち』には1968(昭和43)年から“子ども達に楽しい読書を!”(注4)“子供たちにこんな本を!”、“私の選んだ本”、“新刊ガイド本を読むたのしみ”などの欄で本の紹介をしたり、“栄養士の子供の読書についての講義”(注5)、“子どもと子どもの本

と自動車文庫と”（注6）、“子どもと一緒に楽しもう 子どもの読書とお母さん”（注7）などの子どもの本と読書に関する記事も随時掲載された。

児童書紹介リスト『児童読み物案内』は、夏休みに向けて、1969～1971(昭和44～46)年のいずれも7月に4ページだてで発行され、『わだち』と一緒に配布された。その後巡回文庫課での配布を目的に冊子の形をとることになり、1972(昭和47)年10月には『としよかんで借りて読むどうぶつの本』が作成された。このリストは、“はじめに”に記されているように館の職員研修事業に組み込まれることになった。さらに翌年からは会員も参加する形の児童書リスト編集委員会が組織され、1973(昭和48)年10月には『こどものための100冊の本 1973』を、夕陽丘図書館開館後の1976(昭和51)年12月には『としよかんでかりてよむこどもの本 1976』が刊行された。なおこれらリスト作成にあたっては、巡回文庫課と「読む会」との関係づけ、リスト作成に伴う研修のこと、定価表示の可否、リストの名称など、館当局と「読む会」との間で、さまざまな論議があったことを付記しておきたい。また、館報『ゆうひがおか』の“新刊紹介 みんなで楽しい読書を”などでの図書紹介に会員も参加した。これらのことが児童室開室後の閲覧課と読書振興課共編の『なつのほんだな』刊行へと継続されていったといえるだろう。

1977(昭和52)年7～8月には「読む会」メンバーが中心となって、大阪新聞に“夏休み図書案内”として、お薦め本を紹介した。また、1980～1984(昭和55～59)年にかけては毎月、『職員時報』（注8）に“シリーズ児童文学のすすめ”や“読書フリータイム”を連載、1981(昭和56)年3月末からはふたたび大阪新聞の“この本読んでごらん”のコーナーで子どもの成長をとらえた作品を紹介したりもした。

## 1.2 「こっぺぱん」の創刊～児童サービスの開始を願って

都道府県立図書館では児童への直接サービスは必要ないという考え方が多数をしめる中で、「読む会」の会員は、府立図書館においても児童への直接サービスを実施するべきだと考えており、新しく開館する夕陽丘図書館ではぜひ児童サービスをと願っていた。一方、府立図書館の外でも、60年代末から活発になっていた子ども文庫関係者を中心に夕陽丘図書館での児童サービスを望む声が強く出ていた。

しかし、1974(昭和49)年5月の夕陽丘図書館開館時には児童への直接サービスは見送りになっていた(注9)。

開館に先立つ1973(昭和48)年2月には「読む会」として、府立図書館の組合分会の機関紙『日刊ペチカ』に“新分館で直接児童奉仕を”を5回にわたり掲載した。また、図書館問題研究会大阪支部では1973年3月8日に問題別集会を開催したが(注10)、この集会に向けた討議資料を「読む会」が作成するなど、府立図書館での児童サービスの必要性を訴える活動を行っていた(注11)。

こうした中で「読む会」では、自らの機関紙を発行して府立図書館職員へ児童サービスの必要性を訴えることが必要と考え、手作りの機関紙『こっぺぱん』を創刊した。

以下に『こっぺぱん』の目次を紹介しながら、児童室開室に至るまでの動きを振り返ってみることにする。(〔 〕は補注)

0号 1974(昭和49)年5月13日 [B4 1枚/2種類あり]

[他に小型のちらし<ぼくたちに本をください!>も作成配付した。]

- ・子どもの本をよむ会からのメッセージ!  
あなたもいっしょにべんきょうしませんか!!
- ・『こっぺぱん』・・・?
- ・[会員からの]ひとり一言

創刊号 1974(昭和49)年5月27日 [B5 6ページ]

- ・創刊のあいさつ
- ・大阪の図書館 むかし・・・そして今・・・ 遠山孝子(大阪市立中央図書館)
- ・BOOK GUIDE キスなんてだいきらい
- ・府民センターだより 南河内府民センター図書室 脇谷邦子
- ・「課題図書」の課題
- ・[会員からのひとり一言]

1.5号 1974(昭和49)年6月15日 [B5 1ページ]

- ・“こっぺぱん”問題についてみなさんに訴えます!

『こっぺぱん』創刊号を発売してすぐに大きな問題が発生した。館から、『こっぺぱん』は「府立図書館では児童への直接サービスを行わない」という館の方針にそわないことを外部に向けて発信するものであるとしてクレームがついたのである。館長・副館長・司書部長・司書部各課長と「読む会」との話し合いがもたれたが、以降の館内での会の活動禁止を言い渡されることになった。これに対して緊急発行されたのが『こっぺぱん』1.5号である。組合分会も組合員が自主的に作ったサークルであるとして、「読む会」を支持し、活動禁止の撤回を求めて館との交渉をおこなった(注12)。

しかし、図書館内が『こっぺぱん』問題で揺れていた時、図書館の外では大きな動きが起きていた。当時の黒田了一知事が、大阪府内の家庭文庫・地域文庫でつくる「家庭文庫・地域文庫を育てる会」の要望に応える形で、6月12日に夕陽丘図書館に主婦や児童のための部屋を設けると発言したのである。この発言以降、図書館は児童室づくりに向けて急展開した。「読む会」でも、あるべき児童室の姿を検討し、『こっぺぱん』2・3号で発表した。

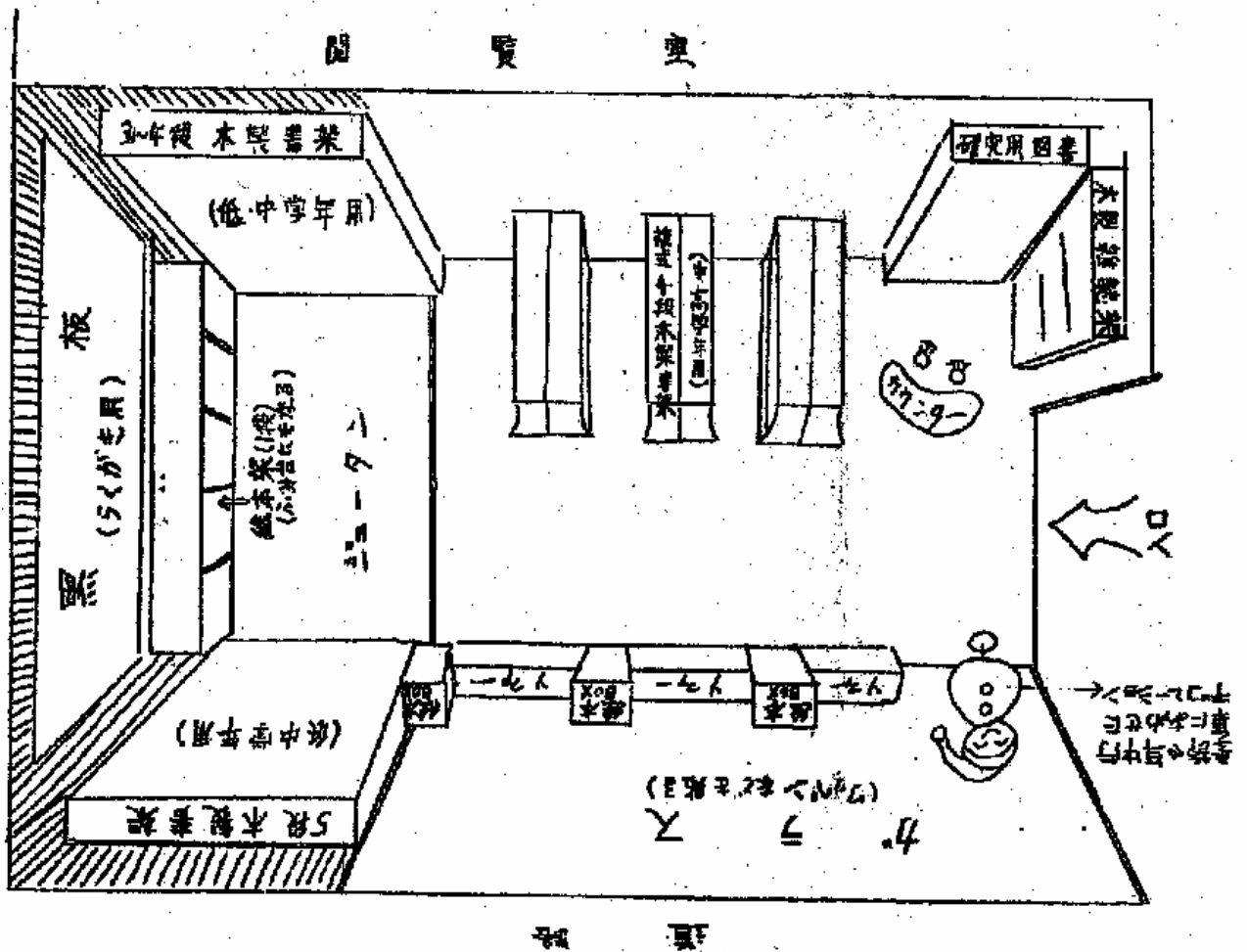
2号 1974(昭和49)年8月15日 [B5 4ページ]

- ・夕陽丘図書館の児童室問題に想う
- ・編集後記

・夕陽丘図書館の児童室問題に想う(2)

[付] こんな児童室はいかがですか? [B5とB4の図2枚]

# こんな児童室は いかがですか?



4号 1974(昭和49)年9月末 [B5 6ページ]

- ・東京・図書館見てあるき その1 町田市立町田図書館  
南河内府民センター図書室 川本香代子
- ・[BOOK GUIDE] 絵本ねずみくんのチョッキ
- ・[東京・図書館見てあるき その2] 浦和市立図書館を見学して  
大阪キリスト教短期大学付属図書館 高橋寿恵子
- ・イギリスだより (1) エクセター会議への出席  
[大谷女子短期大学助教授] 三宅興子

5号 1974(昭和49)年10月末 [B5 8ページ]

- ・イギリスだより (2) グリーン・ノウへの旅  
[大谷女子短期大学助教授] 三宅興子
- ・[東京・図書館見てあるき その3] 昭島市民図書館を見学して
- ・夕陽丘図書館に児童室が!
- ・編集後記 [図書館問題研究会全国大会分科会で事例報告をしたことなど]

この間、9月22～24日に富山で開催された図書館問題研究会の全国大会第5分科会“子供のための図書館活動”で、「読む会」の活動について事例発表をおこなった(注13)。

10月4日には、1975(昭和50)年4月からの児童室設置に向けて予算要求が、さらに10月8日には部課長会議で児童奉仕についての方針が決定された(注14)。

特別号 1974(昭和49)年11月19日 [B5 7ページ]

- ・[11月7日の]「夕陽丘図書館の児童奉仕に関連して司書部長との話し合い」  
から

11月7日に行われた司書部長との話し合いの内容は、(1)リスト作成について (2)西河氏の寄付金による児童書購入について (3)児童室の設置についてであった。

(1)は、中之島図書館で発行していた“あなたの読書のために一灯下の100冊”が、図書館は良書推薦事業をすべきではないという理由で、発行中止になったことを受け、子どもの本のリストも発行中止と決定された。(2)は、箕面市在住の西河久平氏より500万円の寄付の申し出があり、10月28日付けで児童書6,792冊を受け入れたもので(注15)、その後の児童サービス展開の基礎資料となった。「読む会」は購入リストの作成などの協力を行った。(3)児童室の設置については、この時点では館が予算要求をしている段階であった。司書部長から運営方針や奉仕内容の説明を受け、研修体制の確立の必要性や児童書資料コーナーと児童室との関連などを話し合った。

さらに11月～12月には副館長、司書部長、庶務課長と職員の意見交換会がもたれ、府立のかかえる様々な事柄(2階休憩室の騒音対策、書架増設の必要性や禁帯出資料の範囲

の緩和、延滞料廃止の検討等々)について話し合われたが、児童奉仕についても基本的な考え方が示された(注16)。

6号 1974(昭和49)年12月23日 [B5 6ページ]

- ・図書館とマンガ 第一回マンガを読む会より 無仁彰
- ・再出発にあたって 吉田[敏代]
- ・イギリスだより (3) チルドレンズ・ブック・センター  
[大谷女子短期大学助教授]三宅興子
- ・記録 夕陽丘図書館の児童奉仕基本方針  
[11~12月の]副館長等との意見交換会/[10月8日の]部課長会議報告より
- ・子どもの本をよむ会この一年をふりかえって

この年も、「児童書を読む会」(1969(昭和44)年10月に府内の図書館員を中心に発足)やストーリーテリングの勉強会「あまのじゃく」、英語原書で子どもの本を読む「オルコット会」、児童図書館研究会近畿支部(1973(昭和48)年1月発足)の学習会などに参加している。1973・74(昭和48・49)年の11・12月には、夜間に高石市にある保育士の養成校である南海保育専門学院の講師として児童文学を担当し、会員が交代で講義を行った。

7号 1975(昭和50)年3月18日 [B5 8ページ]

- ・東京からのおたより 府県立図書館における児童奉仕について  
東京都立日比谷図書館児童奉仕係長 中多泰子
- ・[BOOK GUIDE]「十三才の夏」合評会より
- ・ハンディキャップを持つ人々への図書館サービス(1)  
“ふきのとう文庫”と公共図書館 無仁彰
- ・編集雑記

第7号の「編集雑記」では、地域文庫「町の子文庫」のことが紹介されている。この文庫は1975(昭和50)年5月24日に大阪市の阿倍野区に誕生。篤志家から100万円の寄贈と建物の提供を受け、運営は図書館問題研究会大阪支部に一任された。府内各地の図書館員らが中心になって毎週土曜日に開いたが、ここにも会員が交代で参加していた(注17)。

家庭文庫・地域文庫との交流は、会発足当時から会員が願っていたことであり、巡回文庫課の職員らを中心に積極的に文庫行事などに参加していった。1970(昭和45)年10月に会員の自宅で開設された「くすのき文庫」(のちに地域文庫に移行)やこの「町の子文庫」では実際に運営にかかわった。なお1970(昭和45)年7月に松原市に誕生した「雨の日文庫」(中川徳子氏主宰)開設(注18)や、吹田市の「青山台文庫」(正置友子氏主宰)の運営にも会員がいろいろな形でかかわっている。

また、障害者(児)サービスにも目を向け、1973(昭和48)年の秋に府立砂川厚生福祉センターの見学や(センターの都合で絵本の読み聞かせなどの実践は結局できずに終わって



しまったが)職員との話し合いを試みたことがある。

8号 1975(昭和50)年7月14日 [B5 8ページ]

- ・(寄稿)夕陽丘図書館の児童奉仕について 一研究者より
- ・まず動きだしましょう! 千葉県立中央図書館 荒井督子
- ・ヨコハマだより(私信) 元当館職員 辻田敏代
- ・街頭紙芝居の保存を!
- ・『図書館白書'74』のさしえから 大谷女子短期大学助教授 三宅興子
- ・[編集後記]

9号 1975(昭和50)年9月13日 [B5 4ページ]

- ・新たなる出発のために 夕陽丘図書館児童室の課題
- ・編集後記

[付]大阪府立夕陽丘図書館児童室(周辺図) [B4 1枚]

9月14~16日に神戸市須磨区で開催された図書館問題研究会全国大会に参加し、第15分科会“児童室の設計・運営”で、児童室の現状を事例報告(注19)。この第9号はその討議資料を兼ねている。

10号 1976(昭和51)年3月15日 [B5 4ページ/この号で休刊]

- ・まんが研究会開かれる 「はだしのゲン」を中心に
- ・“ベスト3”の掲載について  
生きることの意味/いちご/まぼろしの丘/りんごがたべたいねずみくん

各会員おすすめの“ベスト3”は次号にも掲載する旨の記述がある。休刊の理由は今となっては定かでない。会員のさまざまな事情が絡んでいたのだろうが、児童室の開設という大きな目的を達成し、また府立図書館において児童サービスが必要だという認識が広がったということで、『こっぺぱん』は役割を終えたのだと評価したい。

## 2 児童室開室から児童サービスの基盤を確立するまで

念願の児童室が、1975(昭和50)年7月18日に開室した。

児童室は、当初職員2名、広さ90㎡のささやかなものであったが、ここに確かな“場”と“人”を得たことで着実に実践活動を広げていくこととなった。

児童室の活動とそれに関わる「読む会」会員について、<行事> <ブックリストの発行> <展示> <講演会・研修会> <じどうしつだより『はらっぱ』の発行>と、項目を立てて動きをたどっていこう。

## 2.1 行事

児童室では、開室当初の1976(昭和51)年1月、「映画とブックトークの会」、同年8月「紙しばいとおはなし会」を開いた。しばらく途絶えていたが、5年後に定例行事として年間を通じて行われるようになった。

- ・定例かみしばい会                   1981年7月 ~  
  (毎月第二水曜日   1回目   2:30~   2回目3:30~)
- ・定例おはなし会                   1982年6月 ~  
  (毎月第一木曜日   2:30~ )

「おはなしの部屋」というスペースのない児童室では、絵本コーナーや書架と書架の間を利用するなど試行錯誤と工夫を重ねながら「おはなしの時間」が定着していった。その後、夏休みには「なつのおたのしみ会」、冬休みには「クリスマス会」等季節に合わせた行事も年間行事計画に組み入れられるようになった。

「読む会」の会員は児童室の行事に生かしたいと人形劇グループ「こっぺばん座」をつくり、会員外の人も巻き込んで練習に励んだ。この一座は府内各地の図書館行事などにも参加した。また、読み聞かせやストーリーテリングの勉強に再度取り組んだり、会員外の職員にも理解を広めようと職員向けの「おはなし会」を開いたりもした。

## 2.2 ブックリストの発行

子どもたちに本を紹介するものとして、ブックリストの果たす役割は大きい。読書意欲高まる時期に魅力的な本を紹介しようと、ブックリストの発行が年間発行計画の中に組み入れられるようになった。

- ・『なつのほんだな』                   1981年7月 ~ ('93)  
  (年間の推薦図書の紹介:年1回刊行)
- ・『わたしのほんだな - あき - 』   1981年10月 ~ ('92)  
  次号より『あきのほんだな』に改題  
  (テーマに沿った本の紹介:年1回刊行)
- ・母親に向けた『ほんはともだち - おかあさんごいっしょに』や、ミニ・ブックリスト(おりがみの本、クリスマスの本、おいしい本など)も次々に発行

読みつがれてきた本を知ること、本を選ぶ目を養うことは児童サービスの基本である。従来から「読む会」が続けてきた児童書の合評会は、この「本を選ぶ目」を育ててきたといえるだろう。また、会員は、系統立てて児童書を学んでいこうと、昼休みの時間を利用して、『日本児童文学案内』(鳥越信著 理論社)等をテキストに児童文学史の勉強を開始するなど活動はさらに多様になっていった。

児童サービスを担う部署は、児童室のほか、読書振興課、整理課(集書係児童書受入担当)があった。いずれにも「読む会」の会員がいて、互いに協力しつつサービスの展開を担っていった。特筆すべきは、1983(昭58)年に始まった選書会議である。当初は児童室担当者と集書係であったが、のちに読書振興課振興係児童書担当も加わり、定例化していった(注20)。府立図書館の児童書の収集は幅広く、受け入れる多様な児童書の中から直接こ

どもたちが手に取る開架室に置くにふさわしい資料かどうか等一冊一冊を手にとって意見を交えた。「選書」には児童サービスについての経験と研鑽が欠かせない。選書会議は“人”を育て、その人材の輪を広げる役目も果たしていたといえるだろう。

ブックリストにあげる図書の選定や紹介原稿の執筆にはさらに多くの会員の支援があった。

### 2.3 展示

直接子どもたちが利用する資料以外に、府立図書館所蔵の児童書の収集範囲は幅広く、特に外国絵本のコレクションには貴重な資料が多い。児童室開室1周年記念として1976(昭和51)年7月「世界の民話・昔話絵本」展が行われた。その後も幾度か展示は行われ、やがて、研究者のみでなく一般利用者にももっと楽しんでもらおうと1階展示コーナーで児童書の展示が活発に行われるようになった。

- ・こどもに空想とやさしさをおくる絵本作家 - アメリカの絵本作家三人展(1981.10)
- ・ラテン5ヶ国の絵本(1982.5)
- ・マザーグースの世界(1983.6)
- ・アルファベットの絵本(1983.8)
- ・こんな家に住みたいナ 絵本にみる住宅と都市(1984.7)等々。

以後も毎年継続して、さまざまなテーマで活発に展示が行われている。

### 2.4 講演会・研修会

1977(昭和52)年1月、児童室主担で、間崎ルリ子氏を講師に迎え「お母さんのための読書研修会」が行われた。

府内図書館や文庫等子どもと本に関わる人たちへの研修は、府立図書館の児童サービスの大きな柱のひとつである。ただし、文庫活動への支援・振興業務は、読書振興課(自動車文庫係・振興係)が担っていた。かつて、府内に図書館が少なく自動車文庫の果たす役割が大きかった時代に比べ、次第に市町村図書館が建設され、児童サービスにおいてもサポートが求められていた。府内図書館職員等も含めもっと幅広く子どもと本に関わる人たちへの研修を行っていくには、児童室と読書振興課が連携していくことが必要になっていた。ここでも、「読む会」会員がそれぞれの部署にいて、スムーズな連携協力を可能にした。

「北欧圏の絵本の現状」(木村由利子氏) 1982(昭和57)年10月

「現代に生きる子どもとおはなし」(大月ルリ子氏) 1984(昭和59)年3月

「幼年文学をめぐる」(上田由美子氏) 1986(昭和61)年2月

以後、児童文学・児童サービスに関する講演会を読書振興課と協力しつつ、隔年で担当していくこととなった。

### 2.5 じどうしつだより『はらっぱ』の発行

1985(昭和 60)年に府内図書館向けの情報提供誌“大阪府立夕陽丘図書館じどうしつだより『はらっぱ』”が創刊された。府内図書館の児童サービスを支援する情報を発信するこの冊子は、児童室の長年の課題であり念願でもあった。「読んでみてどこか心に残り、傍らにおいて少しは役立ち、そして子どもと本に関わる者の思いを交流できるものをめざしたい」これが創刊号に記された『はらっぱ』の目標である。初期の号は児童室以外の会員の関わりの度合いが大きかった。児童書の評価、資料紹介、子どもの本の世界大会報告、行事、読書離れ、児童奉仕のあり方等を取り上げて、問題提起と情報提供に努めた。

## 2.6 “人の輪”が力になって

1979(昭和 54)年 10 月に鳥越信氏の児童文学関係コレクションが大阪府に寄贈されることが決定した(注 21)。1984 年に大阪府立国際児童文学館が誕生した。この児童文学館と府立図書館の役割分担が新府立図書館建設構想の中で論議の対象となった。行政改革の見地からも、大阪府としての児童に対する図書館サービスのあり方が検討課題となり、組合分会でも論議がなされた(注 22)。開室から 10 年を経て、実践を積み上げ、サービス基盤を確立してきたことが、新府立図書館での児童サービス継続決定の力になったといえるだろう。

また、「読む会」会員を中心とした図書館内部からの支援、加えて、府立図書館の児童サービスの継続を願う府内図書館・文庫関係者の方たちからの声が大きくな支えとなったのも確かである。こどもと本を結びつける直接サービス、そして、府立図書館として市町村図書館の児童奉仕活動を支援する間接サービス、どちらの面においても、府立図書館の児童サービスが「読む会」の有形無形の援助に支えられてきたことは言うまでもない。

サービスは“人”が育てていくものであり、また、“人”はサービスを真摯に続けていく中で育てられる。「読む会」という人の輪は、その大きな源泉となっていたといえるだろう。

## 3 読書振興課で果たした役割

### 3.1 「読む会」での学習を力に

府立図書館にあって、児童室開始以前は府民と直接接する自動車文庫が実質的な児童サービスを担っていた。1974 年の夕陽丘図書館開館を機に、巡回文庫課から、読書振興課へと課名を改め、自動車文庫係に加えて振興係を設けて、府内全体の読書振興、図書館未設置市町村に対する補完サービス並びに図書館設置を促すための役割も果たしていった。時に子ども文庫の隆盛期で、図書館設置を求める住民運動が各地で盛んになってきた時期でもあった。文庫のお母さん方の学習意欲も高く、各地で読書会や勉強会が開かれ、振興係の職員は講師として、進行役として、館外に出向いていくこととなった。そういう時にも「読む会」で力をつけていたことが大いに役立った。

読書振興課では自動車文庫用と読書会用に資料を収集・提供していたが、自動車文庫に載せる児童書の選定及び読書会用児童書の選定には会員である職員があたった。府内の読書会で取り上げる作家・画家の作品を出来るだけ集め、作家・画家の研究書と共に提供した。

特に松原市や熊取町や阪南市（当時は町）の文庫では児童書の合評や研究が活発に行われており、レベルの高いレファレンスも多く寄せられた。日本語の参考文献が少ない作家・画家についての質問もあり、その場合も、児童室とタイアップして、英語のレファレンス・ブックで調査し、作家・画家のプロフィールや、書誌をコピーし図書とともに提供した。

絵本作家では、例えば、センダック、ワイルド・スミス、レオ・レオーニ、エッツ、エリック・カール、バーニンガム等々。この時も、「読む会」の日ごろの研究活動による知識・経験の蓄積が大いに役立ったといえる。

### 3.2 市町村図書館への協力

府内に新しい図書館が設置される時は、読書振興課が府の社会教育課と共に支援したが、資料面では、基本図書リスト、参考図書リストや、児童書のリスト作成にあたった。児童書のリスト作成に関しては、「読む会」の会員が全面的に協力した。1989(平成元年)阪南市立図書館(当時は町立)など多数の開館に立ち会った。

読書振興課では、一日緑陰図書館と銘打って自動車文庫車数台で出向き、主に子ども向けの企画を催した。1979(昭和54)年、1983(昭和58)年、いずれも豊能町にて実施。

また、自動車文庫の出動休みの8月には、府内各図書館主催の「としょかんサマーキャラバン」に自動車文庫車で赴き、協力参加した。1981(昭和56)年 於：和泉市立図書館 1982(昭和57)年 於：茨木市立図書館 1982(昭和57)年 於：和泉市立図書館 等。これらの行事にも会員の経験が生かされた。

児童奉仕活動の一環として、1979(昭和54)年に、会員を中心に結成した人形劇団「こっぺぱん座」は、館内の児童室のみならず、府内の図書館、公民館、保育所などで「三匹のやぎのがらがらどん」「食べられた山姥」「白雪姫と七人の小人たち」「赤ずきん」「なかよし」等の人形劇や、紙芝居、ペープサート、絵本の読み聞かせなどを公演し、読書の楽しみにつながる活動をめざした。

## 4 終焉、そして新たな始まりへの期待

### 4.1 36年間を振りかえって

「子どもたちと本をつなぎたい、図書館サービスを子どもたちにも届けたい」との思いで始まった「読む会」であった。時代が変わり、社会が変わり、大阪府立図書館における児童サービスがスタートし、「読む会」会員の協力により、着実に地歩を固めていった。しかし、サービスが定着してもまだ、図書館職員全体からみれば、「府立図書館に児童サービスは必要ない」と考える職員も多く、係員2名のちっぽけな児童室存在の比重は軽かった。そんな中で、月に1回、「読む会」で本について語り合い、情報交換することは会員にとっては、楽しみであり、心の支えともなっていた。時には子育ての悩みをこぼしたり・・・、よいストレス解消の場にもなっていた。

会員はリスト作成の協力、休暇をとって行事に参加したりと、有形無形の協力をしてきたが、次第に時間外の協力が困難になってきた。児童室は図書館の一つの業務として課・係の中で自立することが求められていた。

そんな中で、新図書館建設が決まり、様々な人々の努力と協力があって、児童室存続が決定した。新府立中央図書館でのサービス開始準備に向けての取り組みが始まった。長期間にわたって、子どもの本を読み、自費で研修に参加し、勉強を続け、図書館員としての技量を磨きつづけ、お互いの学びや、経験を「読む会」を通して共有してきた実績は大なるものがあった。会員の思いと蓄積してきたノウハウが新府立中央図書館での児童サービスに結実したのだと言えよう。中央図書館でのサービスの展開については『中之島百年』に記されているので、ここではふれない。

#### 4.2 「読む会」の果たした役割は受け継がれていく

しかし、新中央図書館開館後、「読む会」は残念ながら休会状態となってしまった。職場環境の変化や、開館直後の利用増大による業務に追われ、少なからぬ会員が会を続けるゆとりを無くしてしまった。児童サービスが図書館業務としてしっかりと確立・自立できたことも理由の一つである。

休会状態になってしまった「読む会」は2004(平成16)年3月、発足当初の会員の退職を機に区切りをつけ、解散することとした。過去に「読む会」で徴収していた会費(合評会のための図書の購入目的等で月100円徴収、時に児童サービスのために使ってきた)の残額(約9万円あった)は絵本を購入して、「読む会」として中央図書館に寄贈して清算した。

1968(昭和43)年の会の結成以来、「府立図書館で、子どもたちと本をつなぎたい、図書館サービスを子どもたちにも届けたい」と、思いつづけた願いはかなった。

その間、「読む会」を通して、多くの本を読んできた。「読む会」を通して、多くのことを学んできた。多くの会員の学習と体験を交流しあい、お互いを高めあうことができた。本だけでなく、人形劇など、子どもの文化全般に対する視野を広げることができた。図書館の仕事全体に対しても、真摯な意欲を持ちつづけることができた。

1993年、夕陽丘図書館の若い職員を中心に勉強会「夕陽丘倶楽部」が発足した。「子どもの本を読む会」が一つのモデルになったと思いたい。大会・研修会等の参加報告、障害者サービス、レファレンス、YAサービス、図書館の自由等のテーマに加えて、組織の話、予算についてもテーマとして取り上げている。仕事に対する研鑽を積み、仕事に熱意と意欲を喚起していった。ただ、この「夕陽丘倶楽部」も新図書館が開館してまもなく中断してしまった。

しかし、今また新たな勉強会が中央図書館の若い人たちを中心に幾つか試みられている。「読む会」以来の図書館員(専門職)としての誇りと、よりよい仕事を追及したいという熱意は、大阪府立図書館にしっかりと根付いている。

## 注・引用

---

- (1) 『中之島百年 大阪府立図書館のあゆみ』、大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会、2004年、pp.238-240
- (2) 西澤千慧「大阪府立図書館の子どもの本を読む会と児童書を読む会のこと」、『大阪府立図書館紀要』8号、大阪府立図書館、1972年、pp.14-18
- (3) 金子幸子「「児童・・・」との関わり その一端」、『こどもの図書館』30(3)、児童図書館研究会、1983年、pp.21-22
- (4) 大阪府立図書館巡回文庫課『わだち』No.123、大阪府立図書館、1968年。：これが会としては最初に活字化され広報された図書紹介。見開き2ページを使い6点掲載。
- (5) 金子幸子『わだち』No.143、1970年
- (6) 『わだち』No.152、1971年：巡回文庫課勤務だった神谷房子が書いた記事で、後段で「読む会」のことや『児童読み物案内』の発行にまつわる話に触れている。
- (7) 西澤千慧『わだち』 No.154、1971年
- (8) 大阪府職員課『大阪府職員時報』 大阪府職員互助会、
- (9) 1974(昭和49)年7月に児童書資料コーナーが読書振興課の片隅に設置された。研究者や文庫関係者対象の研究書や洋絵本を中心とした資料群で、児童室開室後は第一閲覧室に移設された。
- (10) 『図書館問題研究会大阪支部報』No.55、図書館問題研究会大阪支部、1973年、pp.37-40
- (11) 子どもの本を読む会(文責・金子幸子)「大阪府立新分館で直接児童奉仕を！！」『図書館問題研究会大阪支部報』No.54-1、図書館問題研究会大阪支部、1973年、pp.32~35
- (12) 「こっぺぱん」よその子には食べさせるな！」『分会ニュース』No.10 大阪府職員労働組合夕陽丘図書館分会、1974.6.11  
「こっぺぱん」問題で副館長と交渉 『分会ニュース』No.13 1974.6.24
- (13) 『第21回図書館問題研究会全国大会記録』 図書館問題研究会、1974年、p.51
- (14) 『こっぺぱん』6号に記録を掲載
- (15) 『ゆうひがおか』No.3、大阪府立夕陽丘図書館 1975年
- (16) 『こっぺぱん』6号に記録を掲載
- (17) [前田章夫]「図問研文庫(仮称)設立のための準備会報告」『図書館問題研究会大阪支部報』No.78、図書館問題研究会大阪支部、1975年、pp.17-18  
「町の子文庫誕生記」『図書館問題研究会大阪支部報』 No.83 図書館問題研究会大阪支部、1975年、pp.19-23  
前田章夫「“町の子文庫”誕生記」『図書館問題研究会会報』No.165、図書館問題研究会、1975年8月、pp.51-52ほか
- (18) 池内進「家庭文庫をつくりたい」『わだち』 No.144、大阪府立図書館巡回文庫課 1970年
- (19) 『第22回図書館問題研究会全国大会記録』 図書館問題研究会、1975年、pp.92-95  
『図書館問題研究会会報』 No.166、1975年、p80
- (20) 末永敏子「スケッチ 選書会議 子どもの本」 『ゆうひがおか』No.38、1987
- (21) 古野勝利「財団法人大阪国際児童文学館の役割と将来」『ゆうひがおか』No.21、大阪府立夕

---

陽丘図書館 1981年

- (22) 児童サービスについては、『分会ニュース』No.439(1984.9.12)に当時の児童室担当の大西登貴子と前田千慧が“あなたとともに考えていきたい児童室のしごと・今後”と題して現状と課題を掲載。他に『図書館問題研究会大阪支部報』No.186(1983)に“府立図書館の児童資料サービスのあり方を考えるために”(前田千慧)を掲載したのち加筆訂正し『こどもの図書館』Vol.31, No.5(1984)にも掲載。



# 『大原文庫』をめぐって（第1部）

大阪府立図書館収蔵までの道程

大原社会問題研究所と大阪府社会事業会館 -

## 第1部 大原社会問題研究所の資料蒐集

森田 俊雄（中之島図書館）

### はじめに

筆者は1998(平成10)年度から2002(平成14)年度まで大阪府立中央図書館資料情報課第2係長として大原文庫<sup>(1)</sup>の洋書の遡及入力業務に携わった。前任の福井係長から引継ぎを受け係員の宗保、安井両司書に細かな作業手順を教わる形で始まり、書誌データ作成は大原文庫と旧中之島図書館所蔵の洋書を合わせ年平均8,000冊のペースで進んでいった。

夕陽丘図書館勤務時代、大原文庫の和図書を手に取ることがあったが、洋書はほとんどなかった。この遡及作業で大原文庫の洋書に触れ実に様々な内容と装丁の図書、古書店のシール、所蔵者の書き込み、献呈者のサインを目の当たりにして改めて大原文庫への関心が高まっていった。

大原文庫は倉敷紡績株式会社社長大原孫三郎が1919(大正8)年大阪天王寺区に創設した大原社会問題研究所(以下「大原社研」)の蔵書である。1937(昭和12)年大原社研は土地、建物、蔵書約7万冊を大阪府に譲渡して東京に移転した。大阪府は旧大原社研の土地、建物を大阪府社会事業会館として転用、譲渡の図書も収蔵し社会事業の拠点施設として活用した。その後厚生会館と名称を改め昭和20年には活動を停止した。戦後大原文庫は譲渡条件を巡ってその行方が注目されたが、大阪府は旧大原社研跡地を大阪府立図書館の天王寺別館とし厚生会館から大原文庫の蔵書を移管させた。

戦後天王寺別館の活動は焼け残った旧大原社研の書庫から始まり、1950(昭和25)年開館の天王寺分館を経て1973(昭和48)年夕陽丘図書館となった。大原文庫は貴田春男氏の「<

寸描>天王寺分館から夕陽丘図書館へ」(本誌掲載)にあるように天王寺分館時代に再整理され公開された。1996(平成7)年大阪府立中央図書館が東大阪市荒本に開館し、夕陽丘図書館は廃止され大原文庫は中央図書館に移管された。

このような経緯から大阪府立図書館には幾人かの職員が大原文庫に強い関心と愛着を持ち、加藤和基、石井敬三の両氏はこれまでに『大阪府立図書館紀要』等で大原文庫の紹介や研究を発表している(2)。

筆者は2002(平成14)年中之島図書館開館百周年記念出版物『中之島百年』(3)に大原社研の創設から夕陽丘図書館に至る歴史について執筆依頼を受けた。しかし大原社研についての知識もそれほどあるわけではなく書けるとは到底思えず拒み続けていたが、遑及入力業務で手に触れた大原文庫の洋書とその蒐集への関心が一方にあり、この機会に調べてみるのも勉強になるだろうと東京町田の法政大学大原社会問題研究所を訪ね資料を閲覧し、それを用い大原社研の初期の図書蒐集の様子などを交え一応の歴史は辿ることができた。

今回ここに平成10年以来発行が止まっていた『大阪府立図書館紀要』が再刊になり、『中之島百年』では書くことができなかった大原社研の欧州での図書蒐集のエピソードや図書室の活動等を中心にその様子を描き、大原文庫が最初に譲渡された大阪府社会事業会館の図書室の様子にも触れながら大阪府立図書館に大原文庫が収蔵されるまでを辿ってみたい。

### 1-1 資料蒐集の始まり

大内兵衛(4)は大原社会問題研究所の大阪時代をこんな風に紹介している。『大原社会問題研究所が、大阪時代にやろうとしたことは三つあった。一つは世界で一番いい社会問題研究所をつくらうということ。それには世界中の社会主義および社会運動に関する図書、資料を含めて集めよう。これが高野先生の一つの理想であった。高野先生は本が非常に好きな人で、大原さんもそれにはずいぶん金を出しました。モスクワにいまマルクス・レーニン研究所というのがありますが、それと競争して、それにまけないような立派なものができあがったのです。』(5)、最初に海外で資料蒐集に当たったのは櫛田民蔵と久留間鮫造で、2人が神戸港から旅立ったのは1920(大正9)年10月29日であった(6)。櫛田民蔵(7)は当時34歳。東京外国語大学、京都帝国大学、東京帝国大学に学び、東京帝国大学経済学部時代に高野岩三郎と知ることになる。同志社大学の学生部長から大阪朝日新聞社を経て1919(大正8)年4月高野の勧めで大原社研の嘱託として勤務同年7月研究員となった。

久留間鮫造(8)は倉敷市生まれの26歳。1918(大正7)年に東京帝国大学政治学科を卒業後、一時大阪の住友銀行に入行したがほどなく退社し、友人の林桂二郎の紹介で大原孫三郎に面会、新しくできる大原社研に入所の希望を伝え、高野岩三郎から入所の許可をえた青年であった。

#### 1-2 櫛田民蔵

大阪府立中央図書館の大原文庫には Eltzbacher 文庫が含まれている。この Eltzbacher 文庫入手の経緯について宇佐美誠次郎は以下のように紹介している。

『エルツバッハー(Paul Eltzbacher, 1868~1928)は、アナーキズムの研究者であるとともにアナーキズム文献の収集家として世界的に知られ、大原社会問題研究所が彼のコレクションを譲り受けた当時はベルリン商科大学の教授であった。エルツバッハー文庫は、1921年に櫛田氏がエルツバッハー教授から譲り受けた956冊の基本蔵書をもとに、1922-23年に森戸氏が譲り受けた補充を加えたものであって、補充分は教授がフランス・ドイツ・オーストリア・イタリアのアナキストたちに依頼して基本蔵書に欠けているものおよびその後の出版物を収集したものである。』(9)。



櫛田民蔵と Eltzbacher (法政大学大原社会問題研究所蔵)

1921(大正10)年ドイツで資料蒐集をしていた櫛田はどのような機会に Eltzbacher と知りあったのだろうか。櫛田と Eltzbacher は1921(大正10)年以前から知人であったのだろうか。仮に交流があったにしても櫛田が Eltzbacher と意気投合し、というよりも Eltzbacher が櫛田に魅かれて、と言ったほうが当たっているかもしれない。個人の蔵書を譲渡されたというところに、櫛田民蔵という人物の人柄を想像することができよう(10)。

Eltzbacher が櫛田に送った自分のポートレートが残っている。49 頁右の写真がそうであるが、その台紙に彼のサインで櫛田と 2 人の美しい思い出にという趣旨の添え書きがある。またドイツの櫛田の下宿先であろうか、彼と櫛田らしき人物が写った写真も残っている(11)。大原社研から欧州に派遣され図書蒐集に任じた人は他にもいたが、このようなエピソードを残したのは櫛田を置いて他にいない。

筆者が見た限りで、櫛田の手紙は走り書きというのだろうか、大変読みにくい。読みやすく書くことなど全く拘らない風である。大原社研の研究者であった林要は自著『おのれ・あの人・この人』で、櫛田の人物描写をしている。「そっ歯で、よく食べものの汁などを髭からたらした。」「蓬頭垢面(垢面の証拠は不十分だが)に無精ヒゲの櫛田さん」とか、取り分けた野菜を、食べたばかりのオムレツの残汁に漬けて食べたと書いている(12)。揶揄ととれるこの描写から伺えるのは、何事にも飄然として、あるがままに生きる櫛田の人柄をよく表しているのではないだろうか。飄とした櫛田がドイツの古書店にひょっこり現れ、本の注文をする光景を想像するだけで楽しいものである。

欧州で蒐集旅行中の櫛田の手紙を読むと、若い久留間を気遣い、励まし、時に慰めている。同行した久留間鮫造は気遣いと繊細さの人であったから、彼の拘らない性格に援けられることも多かったのではないだろうか。櫛田には大原社研入所までに屈折した人生経験があったが、彼の経験と天性の人柄が Eltzbacher や図書蒐集を競った当のロシアのリャザーノフ(13)からも一目置かれてロシアに招かれるなど、人と運までも引寄せて貴重な図書を大原社研にもたらしたと言えよう。なお櫛田がドイツで 1921(大正 10)年 8 月 14 日から 1922(大正 11)年 5 月 16 日の間、大量に書籍を購入した書店などはフォック書店、フライハイト社、ユンゲガルテ書店、ストライサンド書店、オエスターヘルド書店であった(14)

### 1-3 久留間鮫造の図書蒐集

久留間鮫造は櫛田と共に 1921(大正 10)年 1 月 7 日ロンドンに到着した。櫛田は 10 日ほど滞在し 1 月 17 日ドイツへ旅立っていった。久留間の最初の住所は、30, Upper Park Road, Hampstead, London であった。ほどなくして Highgate 地区、Causton の下宿に移った。

Highgate はロンドン北部の「高い台地上の住宅地」(15)で、Highgate Cemetery(ハイゲイト墓地)は有名で、墓地にはカール・マルクスの墓がある。久留間は Highgate にマルクスの墓があることを知っていて半年間同宿した星島茂と何度か行ったという(16)。今ではロンドン中心部と Highgate の間は地下鉄で結ばれているが、当時は Causton の近くに

Edgware, Highgate & London Railway の Highgate 駅があり、久留間はここからロンドンの書店に通った。

久留間は 1921(大正 11)年 3 月、研究所から次の電報(17)を受取っている。日付は 1921 年 3 月 1 日、午後 3 時 30 分。文面はローマ字で手書きである。

“mazukaiireni kakare atofumi ”(まず、買いいれにかかれ、あとふみ)

久留間はこの電報を受取る前に研究所に何を相談したのだろうか、その回答としての「買いいれにかかれ」の文面には緊迫感が感じられる。

電報を受け取ってから 1 ヶ月ほど経った、1921 年 4 月 22 日付けの所長高野岩三郎宛の手紙で、高野からの図書購入の指示については、その趣旨を十分承知したこと、また本の買入れには少しも手違いが生じないこと、しかし途中で購入の方針を変更した為、努力のわりには購入が捗っていないことを御推察くださいと書いている。途中からの変更とは、「当初はなるべく一般的に(方面に付いても年代に付いても)蒐集」する方針だったが、丸善でも蒐集できるような本は止め、ロンドンでしか蒐集できない「オーエニズムとチャーティズムとを中心として先世紀前半迄の労働問題関係文書」(18)を集めた。労働問題関係文書は、「ネグレクトせられて居ました事とて目録を作って本屋に渡しても十分に集めることが出来ませぬ、それでやむを得ず 2 週間餘りもかかってミュージアム・ブックストアと云う本屋(此種のを一番多く蔵して居る店)の穴倉から山積した本を出して来て其中から選り出しました。先週の土曜日にやっと穴倉漁りを終りました。」(19)と報告している。その結果「オーエンのものは殆ど完全、チャーティズムのものも比較的善いコレクション」が出来たが、チャーティズムの有名なものは、ロシア政府の代表者がきて購入した後だったという。後に久留間は「下宿におちつくとすぐ、ぜひこれだけではなくてはならぬとわかっている本のリストを作って本屋にわたすと同寺に、猛烈な俄勉強をはじめた。経済学史、社会思想史、社会運動史、といった種類のものをいろいろ読んで、第二次、第三次とリストを作って本屋にわたし、またチャーロング・クロスを中心にかなり方々歩きまわって古書漁りもしました。」(20)と回想している。

#### 1-4 久留間とイギリスの書店

大原社研に送られてきたロンドンの古書店のカタログ(21)から久留間の回想の中にある The Museum Book Store、George Harding、P. S. King & Son、Luzac & Co. の 4 軒を紹介する。

The Museum Book Store は、大英博物館の正面ゲート近く Museum Street にあった。

1926(昭和 5)年発行の The Museum Book Store のカタログ 102 号は “ Political economy  
An extensive collection of important books and pamphlets relating to all braches  
of political and social science ” というタイトルである。内容は Agriculture にはじ  
まり、“ Chartism and the chartist movement ” “ Comers and trade ” “ East India trade ”  
“ Fisheries ” と続き、最後は “ Early socialist movement ” “ Transport ” で終わる。  
163 ページ、2,834 タイトルが掲載されている。掲載されている書籍の出版年代は 17 世紀  
から 20 世紀初頭までの本である。1926(昭和 2)年当時の経営者は L.Kashnor。久留間が穴  
倉にもぐりこんで探したというのに相応しい品揃えの豊富な店である。

George Harding 書店は、大英博物館の西、Great Russell Street にあった。ここで久留  
間は経済を中心とした書物を集め、George Harding から発送している。1921(大正 10)年発  
行のカタログのタイトルは “ Catalogue of old & modern books etc. ”、古書店兼新刊本  
を扱っていた。内容は Part1 ~ Part5 に仕分けされている。Part1 は考古学、伝記、年代記、  
歴史、法律、哲学、地誌学等。Part2 はチャールズ 1 世、Civil War(チャールズ 1 世と議  
会の争い)、イギリス共和国、チャールズ 2 世関係。Part3 は女性問題関連図書。Part4 は  
書誌学。Part5 は最新入荷分。カタログ中最古のものは 1640(寛永 17)年に出版された  
〔Parker 著〕: Case of ship mony briefly discoursed according to the grounds of law,  
policie, and conscience, presented to the High Court of Parliament.である。17 世  
紀の出版物をかなり多く販売している。

政府刊行物はキングで、東洋関係の資料はリュウザックで蒐集したという。

キングとは、P. S. King & Son のこと。1819(文政 2)年の創業である。ウエストミンス  
ター寺院の西を南北に走る Great Smith Street と Orchard Street が合流する付近にあっ  
た。1927(昭和 2)年発行のカタログ King ' s monthly list の書店名の下段にサブタイトル  
風に、Publishers,Parliamentary and General Bookseller, Bookbinder and Printers.  
と印刷されている。キングはイギリス政府刊行物の販売者であり、書籍の製本、印刷、出  
版者を兼ねた書店である。カタログを見ると統計書、年報、報告書や国際連盟、コロンビ  
ア大学出版局の出版物や The American political science review なども扱っている。

1921(大正 10)年 6 月 15 日付けの P. S. King & Son から大原社研宛の手紙(22)には、久  
留間が選んだ Parliamentary Papers を 3 つの大きな木箱で送ったこと、将来にわたって  
大原社研にその都度必要に応じて、議会関係、公的刊行物、政治、経済、社会関係の図書

を提供できるであろうと書いている。実はこの Parliamentary Papers の蒐集では King 側の対応に久留間は苛立ちを隠さず「大部なので今二週間もかゝらねば蒐集が出来ぬと云います(英国人の呑気で懶惰なのに殆んど愛想がつきます)」と高野に書き送った(23)。蒐集に追われる日々と、ドイツ行きを控えた久留間の正直な気持ちであった。

リュウザックは Luzac & Co. で 46, Great Russell Street にあった。1928(昭和 3)年のカタログのタイトルは“ A short list of secondhand books on the history & geography, etc., of the Orient ”である。タイトルの通りロンドン、パリやインド、エジプトなどで出版された仏教、ヒンズー教関係の書籍、中東・アジアの芸術、宗教、神話、文学などの出版物が掲載されている。1904 年発行、狩野元信の画の写真複製本 “ Masterpieces of Motonobu ” (2vols.) は 18 ポンド 3 シリングである。

久留間はマンチェスターやオックスフォードにも出かけた。マンチェスターではサットンという古書店を訪ねている。サットンとは Albert Sutton のことで、店は 43, Bridge Street, Manchester にあった。1929(昭和 4)年のカタログには、B. Sutton, H. Sutton の名前が列記されているので彼等が経営者であろう。1929 年発行のカタログのタイトルは “ Catalogue of interesting literature ”。カタログは辞書体目録風に著者と主題がアルファベット順に配列してある。これを見る限りでは社会科学関係の書籍が目立って多いわけではない。掲載された古書の出版年代は 17 世紀から 20 世紀初頭まで。最古は 1638(寛永 15)年出版の Northampton shire の主題の下に配列された Reynoldes 著の “ Sermon touching the peace and edification of the church, preached at Daventry, June 12, 1637. ” である。久留間はサットンの地下室で「ローソク片手に発掘作業」をしたと回想している(24)。

後年久留間は自分が図書委員に選ばれ、「とくに外国へ行って本をずいぶん集めて来た関係から、外国のいろいろの古本屋からカタログを送ってくる。」(25)それを見て本を発注したと回想している。カタログが残る B. H. Blackwell, John & Edward Bumpus, The Communist Book shop, Grafton & Co. なども久留間が訪れたイギリスの書店であろう。

#### 1-5 図書蒐集リスト

1921(大正 10)年 7 月 19 日ロンドンを出航した香取丸で大原社研に送付した図書のリストには 148 冊がリストアップされている(26)。それについて大阪府立天王寺分館が大原文庫の再分類に使用した日本十進分類法第 6 版の主題名称に従いその一部を紹介する。

労働問題、A worker looks at history. By Mark Starr, 社会病理、Perils of wealth and poverty. by Canon Barnett, 経済学・経済思想、Wealth. by Edwin Cannan, 婦人問題・性問題、Straight talks to women. By Mary Scharlieb, 社会政策、Social insurance unified and other essays. by Joseph L. Cohen, 労働者保護、The children of the unskilled. by E.Llewelyn Lewis. 共産主義、Creative revolution. by Eden & Cedar Paul. 労働組合及び運動、A short history of the modern British working-class movement. by W.W.Craik, 婚姻問題、The disinherited family. by Eleanor F. Rathbone. 労働条件、The wages of men and women. by Mrs. Sidney Webb. 労使協調・温情主義、The whitley system in the Civil Service. by J.H.Macrae Gibson.などである。この他には社会保健、婦人解放・男女平等論・婦人参政権、住宅問題、国語教育、民族学、産婦人科、鉄道運輸関係の図書が書かれている。

また Stevenson の Treasure Island. Edward Bellamy の Equality、J.S.Mill の Utilitarianism. Lenin の The state and the revolution, Kautsky の Dictatorship of the proletariat. More の Utopia, 辞書では Japanese English dictionary, French Japanese dictionary, Baedeker のガイドブック Belgium and Holland なども購入している。

この蒐集リストは、櫛田との約束で久留間が購入を受け持った経済学史、社会思想史、社会運動史関係の図書の一部ということができる。このリストを見て本来なら蒐集範囲ではない宝島やユートピア、ガイドブックがあったことに何か安堵した思いである。何故なら異国の地で来る日も来る日も社会・労働関係の専門図書を探し続けた久留間は神経衰弱気味になっていった(27)。専門書ばかりを集めていたら久留間ならずとも神経衰弱になるうというものである。宝島やユートピアやガイドブック何でも良い自分の好きな本を買うことで束の間の休息を見つけた久留間を想像したからである。

図書の蒐集とは、“人間的な余りにも人間的な”行為ではないか。図書を目の当たりにし蒐集しようとする人間には様々な迷いや思いが交錯する。そして自分に何かを諦めさせるように迷いを断ち切りそれを買う。しかしそれで安心したわけではない。買った傍からまた迷い、反省し、悔やむことになるのである。これは図書を蒐集する人間に共通の偽らざる気持ちであり思いではないか。久留間を神経衰弱に陥れたのは蒐集という魔物であった。

筆者は久留間が蒐集した貴重書や稀購書に興味はない。むしろその辺に転がっていた本、たいして価値はないけど面白そうと思って久留間が買った本に、彼の蒐集への想いを感じ



取りたいからである。しかしそれはないものねだりと言うものであろう。

#### 1-6 蒐集と留学生

久留間は蒐集生活から健康を害した。幹事の高田慎吾が久留間鮫造に宛てた 1921(大正10)年6月7日付けの手紙がある。その中で高田は久留間の健康を案じ、同時に『御手紙に依れば色々内地では得難い珍本が殷々に集りますそうで(1字不明)に結構に存じます。貴方の海外に於ける御努力が今後研究所の研究調査の上にどれ程多大な効果を齎すかを思いますと(1字不明)に感謝に堪えません。』(28)と書き、また書庫を現在増築中で8月には完成する予定だとも書いている。幹事高田の優しい気遣いが感じられる手紙である。久留間はこの手紙を受取った後にロンドンを発ち、櫛田のいるドイツに向かう事になるのである。ただ、久留間の蒐集旅行には、ちょっとした行き違いが生じた。

久留間が命じられたのはあくまでロンドンでの資料蒐集であった。ところが途中で留学生に変更したいという希望を洩らしたらしい。それは櫛田の意見でもあったようだ。留学生への変更を申し出たのは、櫛田・久留間が航海中に何れかの停泊地から手紙で願い出たらしい。それは久留間がロンドンに到着して早々に、幹事高田に宛てた手紙からの推測である。文面の最初に謹賀新年と書いてあり1921年1月30日にロンドンで書かれたものと思われる(29)。その手紙の中で久留間は旅程の変更は櫛田の旅程の変更に伴うもので、櫛田の厚意と忠告であると述べ、希望が適わなくても自分としては不本意とも失望することもないと書いているからである。

この申し出に対し幹事高田は、2人の洋行が決定した経過や所員への説明からして、途中で名義を留学生に変更するのは「面白くない結果があるように思われて仕方ありません。」と書き、久留間の滞欧期間が当初半年であったものが、1年2年それ以上に延びても「本の買い入れと(1字不明)研究所との連絡を計ることに努めてくださる方がよいと思います。」(30)とし、大原孫三郎も久留間の半年間の出張には無理があり、海上の日程は除く方向で考えていたことを伝え、更に「期日が延びるのは仕方がないとして、研究所の関係者には矢張り初めの通りにしておく方がよいと思います。」(31)と研究所を取り仕切る幹事としての気遣いを見せている。この手紙の大阪・高津局の消印は1921年3月26日である。

“1-3 久留間鮫造の図書蒐集”で紹介した“まずかいいれにかかれあとふみ”の電報はこの辺りの事情が背景にあり、余計なことは考えずにまず蒐集の仕事に専念せよと、若き久留間鮫造に対して幹事高田慎吾が檄を飛ばしたのであろうか。

この手紙の宛先は、Upper Park Road, Hampstead, London となっていて、その文字に打消しの線が引かれ、下に Highgate の住所が書かれている。Hampstead の滞在は短期間であったのであろう。

結局久留間は留学生扱いにはならなかったが、櫛田と共に約 2 年間の蒐集生活を送り、無事に帰朝したのは、1922(大正 11)年 8 月 15 日であった。同年 9 月 21 日の『日誌』(32)には次の記事がある。

『午後 6 時より食堂に於いて櫛田、久留間両氏の歓迎会を開く。出席者大原、小河、両評議員他所員 22 名。河上、河田、米田、柿原、(2 字不明)欠席の旨通知来る。  
食後会議室にて櫛田、久留間両氏の報告あり 10 時閉会』

2 人を送り出した大原孫三郎、小河滋三郎は出席したが、河上肇、河田嗣郎、米田庄太郎、柿原政一郎は欠席だった(33)。彼らにとっては気骨の折れる蒐集の旅(34)であったが、2 人を大原社研最初の図書蒐集に派遣した大原孫三郎たち首脳陣の人選は実に見事であったと言ふべきであろうか。

なお書籍購入費であるが、櫛田は 2 万 6678 円 20 銭 1 厘(3179 磅 13 志 11 片)。久留間は 2 万 102 円 7 銭 4 厘(2206 磅 7 志 2 片)であった(35)。

#### 〔久留間鮫造に関するメモ〕

久留間鮫造がイギリスへ到着してから図書蒐集のため猛勉強を始めたが、それは船中で櫛田と蒐集分担の話しになり、「経済学、社会主義、社会運動の文献を主として」集めることになったからである(36)。また当初久留間は、櫛田の助手的存在として欧州に同行し蒐集を手伝うということだったため、特に文献について勉強していなかったこともあるだろう。

久留間はまだ経済学の専門家ではなかった。これから研究生生活に入ろうとする青年であった。回想によれば欧州航路の途中、櫛田にイギリスでの蒐集を半ば強制された形でしぶしぶ引き受けさせられたのである(37)。櫛田が強制したのなら、久留間に半年で帰国されたのでは困るので、久留間を単なる蒐集助手の立場から、留学生扱いにして長期の滞欧生活ができるよう大原社研首脳陣に願い出た。あるいは半年で蒐集するのが無理と考えた櫛田が、首脳陣に日程の変更と久留間の留学生扱いを願い出たとも考えられる。櫛田自身は留学生扱いだった。それについて先に紹介したように幹事高田慎吾は困惑し否定的見解を久留間に送付した。

久留間は蒐集を押し付けられたが、そのことは所長の高野、幹事高田には報告しているはずである。してみれば、高野は久留間に文献蒐集の指示を与えざるを得ない。従って久留間の手紙を紹介したとおり、高野からの指示があり、そのとおり蒐集はしていますと報告した。高野が久留間にどのような資料の蒐集を命じたかはわからないが、具体的な資料名を挙げたわけではなく、学問分野での指示であろうし、かなり広範な分野を指示したのかもしれない。しかし久留間は途中からある程度分野を限定し、日本の丸善でも蒐集ができるものではなく、ロンドンでしか入手できそうもない文献の蒐集を図った。それについて高野は余計なことをするなど叱ったわけではないから、久留間の判断を尊重し、幹事高田はそれを感謝しているのは手紙のとおりである。

久留間が猛然と蒐集したのは労働問題関係文書であったが、これは高野からの指示がなく彼の独断であった。

#### 1-7 初期の資料整理

大原社研は創立時の規定の中で、図書主任1名、司書若干名を置くことを明記していた。大原社研の歴代の図書主任は初代が森川隆夫、2代が内藤赳夫(38)であるが、2人とも研究員に昇格している。

森川は1884(明治17)年生まれ。広島県出身、採用当時35歳。京都帝国大学文科(言語学)を1915(大正4)年に卒業した文学士であった。京大の附属図書館には1915年8月31日から1919(大正8)年3月31日まで勤務した(39)。

森川が大原社研の図書主任として採用されたのは1919年4月である。1919年の大原社研の『日誌』に森川は事務長という肩書きで書かれている。当時の森川は単なる図書主任ではなく事務長も兼ねていた。幹事の高田慎吾、庶務主任の鷹津繁義(鷹津は『日誌』で書記と書かれることもある。)らと研究所の予算事務も担当していた。森川は1920(大正9年)年4月に研究員となる。

森川の入所当時の年俸は、同時期に入所した研究員大林宗嗣の1千860円と同額であった。年俸が1千500円、手当が年360円で合計1千860円である。この額は1919年3月研究員として入所した久留間鮫造の年俸よりも高給である(40)。1千860円という年俸であるが、当時の大阪府立図書館長の年俸は1千600円、司書は576円であったからかなりの高額といってよい(41)。図書主任兼事務長の立場がそうさせたのだろうが厚遇を以って迎えられている。

図書主任森川の最初の仕事場は、大阪市西区江戸堀北1丁目の倉敷紡績内の臨時図書室であった(42)。西区江戸堀北1丁目は、頼山陽生誕の地や関西大学の前身である大阪法律学校があった土地である(43)。ここに倉敷紡績が出張所を開設したのは1918(大正6)年4月15日のことであった(44)。

森川が臨時図書室で見た資料の中には、櫛田民蔵、久留間鮫造がロンドンやベルリンなどで蒐集した資料はまだなかった。しかしこの時点で既に内外の図書が倉敷紡績の臨時図書室集められ、高野岩三郎が図書分類整理の指導をしている(45)。

1922(大正11)年の研究所の『日誌』には、多忙な図書整理や分類作業を伺わせる次のような記事がある。

“9月21日、平岡君に休職中図書整理賃(14日分1日1.50)21.00円支給”

“9月23日、樋口恒一郎君を臨時図書整理員として採用月手当50.00本日より勤務”

この時期は櫛田、久留間が外国で購入した書籍が続々と研究所に運び込まれていた時期であった。そのため1922年9月23日の記事によれば、1階の閲覧室は当時共同研究室として使用されていたが、急遽購入書籍の保管場所とすることになり、労働年鑑編集室を会議室に社会事業年鑑編集室を所長室に、所長室は東隣に移転。あおりを受けて細川嘉六・水谷長三郎、櫛田・久留間の研究室がそれぞれ移動させられた。どうやら研究室は2人1組で使用していたようである(46)。1922年当時閲覧室はまだ一般公開されていず、公開されるのは1924(大正13)年4月のことである。

“10月6日、山岡実四郎君を臨時図書整理員として採用月手当40.00”

“10月13日、小泉鉄氏(書籍分類を委託す)今朝所長同伴来所、本日より分類に着手”

“10月16日、小泉鉄氏に臨時図書分類事務嘱託の件”

“10月24日、山下一雄君を臨時図書整理員として採用”

“11月16日、図書部臨時整理の為1箇年の契約にて井上進一氏を採用す、本日より出勤”

この他に図書カードのタイプ打ち1,202枚を個人に外注している。この間に邦文タイプライター、机などが続々と買い込まれている。1922(大正11)年は図書整理の大繁忙期であった。

#### 1-8 事務会の決定事項

大原社研の事務上の問題は毎月第1木曜日に開催された事務会に於いて決定された。

1930(昭和5年)年5月23日に開催された事務会での資料(47)に添って資料収集事務の流れと事務会の役割について触れておきたい。

この時の事務会の出席者は、所長高野岩三郎、森戸辰男、細川嘉六、久留間、森川、鷹津繁義、越智道順、後藤貞治、笠信太郎、鷹羽であり、内藤は出張中であった(48)。事務会での議題は次のようなものであった。高野の報告は(1)大原夫人葬儀ニ際シ研究所ノ執リタル敬悼方法ノ件(2)「研究所雑誌」発行ニ関スル件(3)内藤君出張ノ件(4)図書、資料室ニテ雇員各一名試験的採用ノ件(5)会計監査ヲ細川氏担当ノ件。その他協議事項3件であった(49)。

また資料取扱い事務については次のように決定された。受け付けた文書、刊行物は事務室受付係で受信簿に記帳した後、資料室、図書室に回付する。受け取った各室は受信簿に受取印を押印し授受の責任を明らかにする。ただし書店が直接資料室、図書室に持ち込んだものは別とする。この決定以前、寄贈図書の記帳、礼状送付は一括して事務室が処理していたが、決定以後は資料室、図書室各室の責任で受け付けから礼状の発送まで行うこととなった。

資産台帳上の決定事項では、「櫛田、森戸両氏独乙より臨時購入洋書価格評価の件」がある。購入当時マルクの暴落で法外に廉価な価格で購入したが、その購入価格をそのまま資産に繰り入れることになると、将来紛失、弁償の際に不都合が生じるのではないかと、よって適正な価格に評価し直し、台帳に記載するのが妥当ではないか。いまだそれが実現していない。当該図書の台帳の金額欄が空白で、計算することができない。至急再評価を行うことが望ましい。という提起があり、高野の意見で図書室と事務室で協議し処理をすることが決まった。

図書受入伝票への価格記入について、Hugo Streisand(50)を初めとする外国書店からの洋書の購入、和書寄贈本の価格評価、予約出版物、メンバーシップ出版物の価格の図書受入伝票への記入を図書室が行うこと等が決定された。

以上の決定事項の最後は次のような厳しい叱声の言葉で結ばれている。

「研究所重要資産ノ最タル整理済ノ図書ガ右ノ如キ原因ノ為ニ資産ニ繰入レラレズシテ宙ニ浮ケルガ如キ有様ニアルハ、ヨシ危惧スルガ如キ問題惹起セズトスルモ資産管理上永クカヽル不健全ナル状態ニ置ク事ハ如何カト思ハル。」

#### 図書室の決定事項

(1) 購入図書 購入図書受付簿を備え

記入事項 受付日付、受付者の捺印、著者名、出版年月日、定価、  
購入先

(2) 寄贈図書 寄贈図書受付簿を備え

記入事項 受付日付、受付者の捺印、寄贈者名、寄贈図書の著者名、書名「出版年月日」及び「定価」。礼状発送の年月日（礼状は図書室より発送す）。礼状の形態（例えばはがき又は封書等）

寄贈交換依頼簿を備え

寄贈図書を選択し図書委員の許可を受け寄贈依頼状を発送す

寄贈図書にして欠本、欠号の補充及び継続を要するものは定期に之を調査して寄贈依頼状を発する

寄贈図書の成績は随時図書委員に報告する

記入事項 発信日付、著者、書名、部数、冊数、出版年月、定価、発行所

(3) 購入寄贈不明の図書 図書臨時受付簿を備え

到着の図書にして購入か寄贈か不明なるものの受付を正確にする  
所属判明次第購入或は寄贈簿に記入す

記入事項 受付日付、受付者の捺印、著者名、書名、出版年月、定価、発送先

図書室報の発刊----

記載事項

1. 研究所へ購入、寄贈の図書
2. 定期刊行物の社会問題に関する記事索引

この時課題に挙がった「図書室報」の発刊であるが「資料室報」のように独立した形で発行はされなかった。それは『大原社会問題研究所雑誌』が1933(昭和8)年11月5日発行の第10巻第3号で終刊となり、1934(昭和9)年7月8日に『月刊大原社会問題研究所雑誌』として復刊された時、巻末に図書室が編集した「社会問題関係主要雑誌記事目録」と図書室・資料室共編の「新着図書資料」も掲載しその責務を果たすこととなった。

前記の「図書室事務取扱上の申し合せ決定事項」によれば、当時の図書室のメンバーは、内藤赳夫、荻野秀一(51)、榎木通夫であり、次のような決定事項が書かれていて、図書委員(研究員)を長とする図書室の寄贈、見計いの様子が把握できる。

(1) 寄贈については、1.寄贈図書(単行本並に定期刊行物)の依頼は、図書委員の許可を得てから行う。2.寄贈依頼の結果を随時図書委員に報告すること。

(2) 見計注文は、1.係員は図書目録類を蒐集し図書を選択発注する。その際、必ず図書委員に認可を得ること。

以上の決定事項とは別に見計いについては以下の資料(52)がある。

シュトライザンド・丸善・登美屋 図書委員認定 重複調査 購入簿記入  
雑カード作成及繰込 受入伝票作成(図書室保存) 各書店請求書(現品ト照  
合ノ上主任サインス) 会計課ニテ支払

見計い図書については次のような添え書きがある。

見計図書ノ注文

見計図書ノ書店ニノミー任セズ適当ト思ハレル図書ヲコチラヨリ積極的ニ注文センガタ  
メニ、係員ハ図書目録類ヲ蒐集シ適当ト思ハレル図書ヲ選択シ、又所員ヨリ依頼セラレ  
タル見計注文図書ヲ整理シ、図書委員ノ認可ヲ得テ注文ス。

見計図書ノ成績調査

見計注文図書ノ原簿ヲ作り、定期ニ成績ヲ調査シ、其未到着ノモノヲ督促スル事。

見計注文図書ハ定期又ハ随時図書委員ニ報告スル事。

法政大学大原社会問題研究所にはHugo Streisandの見計い用図書書リストが残されている。期間は1927(昭和2)年から1935(昭和10)年10月12日までのものである。

見計い用図書リストを見ると、中に返品と赤で書かれた文字があり、図書主任森川の押印がある。1932(昭和7)年森川死去後は後任の内藤が押印している。返却の文字などから見計いは現品を見て選択した可能性がある。1929(昭和4)年にHugo Streisandに送付したと思われる英文タイプで打たれた手紙の下書きがある。それには返品した書籍が請求書に入っていたから次の請求書でその分差し引いて請求するように指示している。また必要な書籍は社会主義、経済学で哲学、文学、宗教は必要がないと書いている。哲学、文学、宗教を蒐集しなかったわけではないが、Hugo Streisandのような社会科学の専門書店からは買うことがなかったのであろう。

丸善(大阪心斎橋)、登美屋(大阪西区阿波堀)の見計いが現物を見た上で購入手続きされたものかは今のところわかっていない(53)。

〔図書室に関するメモ〕

大原社研の図書室の活動等に関しては、資料がほとんどなく調査されることも多くない。

ここで図書室というのは『大原社会問題研究所雑誌』や大原社研内部資料での表現である。そして図書室とは、室の名称ではなく、図書の蒐集から受入れ整理までの業務を担当する部署という意味である。

大原社研の図書室は何時からあったのか。厳密に言えば 1930(昭和 5)年以前は確認できない。

森川隆夫が図書主任として採用されたのが 1919(大正 8)年 4 月。この当時の大原社研はまだ独立の建物を持たず石井記念愛染園<sup>(54)</sup>の中にあった。石井記念愛染園は手狭で臨時図書室は前述したように倉敷紡績にあり、そこで図書の発注業務、分類、整理がされていたのであろう。しかしそれはまだ図書室の業務ではなく森川個人の仕事であった。1919 年から 1924(大正 13)年の図書室の一般開放までの 5 年間は“図書室以前の時代”である。

『大原社会問題研究所栞』<sup>(55)</sup>は 1926(大正 15)年に越智道順が作成した<sup>(56)</sup>。その平面見取り図を見ると、図書事務室の名称がある。そしてこの年に図書委員ができた。図書室委員ではなく“図書委員”である。図書委員は研究員の役割で図書購入・寄贈の最終決定者である。図書委員制度は導入されたが、図書室の業務については『大原社会問題研究所五十年史』<sup>(57)</sup>に説明がなく、明確にはならない。この時分類は研究員の共同作業に決定した。

1926 年以前、研究員たちは自由に図書を発注していたのかもしれない。そうであれば図書委員導入により無断で図書の発注を禁じたということになる。この時分類の共同分担と同時に「会計の内部監査に当たる会計委員を設けること」が決まっている。これにより予算執行面でのチェック機能が加味され、自己検査を厳密にし、従って図書の選定購入も曖昧さを排除し委員制度を導入して、購入の決定権を 1 人に集約し、所員の勝手を制限し図書発注に厳密さを求めたものであろう。

1930(昭和 5)年に至ってようやく図書室の姿が浮かび上がってくる。

まず図書購入先である。これを見計いという形で整えた。ここで初めて図書室が主体となって図書の選定から購入までを統括する体制ができたのである。図書室の職員に図書選定・寄贈依頼の権限が与えられている。無論最終判断は図書委員である研究員にあるが、図書室の職員の図書収集の役割がようやく認められたということであろう。1930 年の図書室、資料室との合同会議でもわかるように、図書の管理的な部分は後回しにされている。



大原社研の発足当時の図書受入簿ともいえるべきものに、「仕分簿」(58)がある。仕分簿には、購入年月日、書名、購入価格が記入されているだけである。仕分簿のような簡単な書式で購入図書等の管理がされて10年以上が経過したのであろう。

1930(昭和5)年の事務会で、当初外国で購入した書籍が資産に組み込まれていないとの指摘を紹介したが、櫛田が外国で購入した書籍の価格を、庶務主任の鷹津繁義が時価で円に換算したと宇佐美誠次郎が紹介している(59)。(櫛田の書籍が大原社研に到着したのは1921(大正10)年から1922(大正11)年ごろのことである。)この時の換算が法外に安価であったため台帳未記入となったのだろうか。その最終調整を鷹津がいた事務室と図書室で協議し決定することとなったのだが、1930年のこの苦言は1936(昭和11)年に現実となり、大阪府に図書約7万冊譲渡の際、貴重な資料も極めて安価な譲渡額となったのであろうか。1922年の財団法人登録時の和洋図書合計冊数は11,519冊、評価額は3万2829円であった。単純に7倍しても20万円は超えることになる。因みに1922年当時の土地の評価額は10万円、建物10万円、書庫5万円、それに図書を合わせて約29万3000円(60)。それを1936(昭和11)年20万円で購入したのだから本当に安い買い物であった訳である。「森戸辰男より久留間鮫造あて」1936年11月25日付けの手紙に、「図書の方は府の購入目的、支払うる金額が判明せず、同時に当方の譲渡部分の明細が出来かね、旁々足踏みの状態です。」とある(61)。この表現を見る限り図書の評価額の積上げと言うよりも、大阪府が図書一括の値段を提示する形での交渉だったようにも思われる。

#### 1-9 大原社研の図書と資料

大原社研は図書資料を図書室と資料室で受け入れた。図書室で受入したものが“図書”と呼ばれた。和洋の単行本、叢書、全集等で大原社研の図書分類表によって分類された。

一方資料室が受け入れたものは“資料”と呼ばれ、官庁、団体等が出版した調査、統計、報告書等の資料であり日本労働年鑑、日本社会事業年鑑編纂のための資料として受入された。

資料はA類からF類の6種類に区分された(62)。

A類 統計年報、地方官公庁統計書類・・・発行主体別に整理

B類 臨時的に発行される調査報告書及其他の資料・・・細分類して整理

C類 定期的刊行の調査、統計、報告書及其他資料・・・発行主体別に整理

D 類 定期的刊行の官公私報及諸機関紙類

E 類 新聞資料・・・新聞切抜分類による整理

F 類 実地調査報告

これらは、購入、交換、寄贈等の方法で蒐集された。『月刊大原社会問題研究所雑誌』の1934(昭和9)年1月から“資料”として掲載されたのはA~D類の資料の内A類・統計類とB類・調査類であった。

寄贈資料は事務部(1929(昭和4)年当時の表現、事務室と同義)が寄贈図書原簿に記入する。次にA類からE類の整理は以下のように行われた。

A類B類の資料整理~資料室は単行本的な資料につき、「本カード」(小分類で整理)と「雑カード」(発行主体別に整理)を作り、必要なものは内容索引を作成する。ここで受入られた資料は、1年乃至数年後に図書部に回付され普通図書に準じて整理される。ビラ、ポスター、リーフレット、写真などは台紙に貼って綴込みして整理する。

C類D類の資料整理~受付簿に記帳し、必要なものは記事索引を作成する。1年後には図書部に回付し製本して整理される。

E類の資料整理~24種の新聞と大阪朝日、大阪毎日、東京日日の地方版から必要記事を「切抜分類」の符号、新聞略名、月日を色鉛筆で記入、切抜1件1枚ごとに台紙に貼り、分類整理して『日本労働年鑑』編纂として利用した後は必要部分を残し目次を作成し整理する。

B類だけは「B類資料小分類」によって分類された、大項目だけを記せば、社会状態、社会運動、施設及対策、社会思想家運動、国際労働問題、政治(国別に分類す)、経済、財政、人口、社会思潮である。この大項目はアルファベットの小文字を用いて細区分された。

例えば、「大阪機械工作所争議の真相」という資料は、B類分類表の .社会運動の a .労働争議 であるから分類は、 .a とされた。

またB類には、雑誌論文の抜刷、別刷や『大阪風水害誌』(大阪市)、『樺太土産』(秋守常太郎)、『子は国の宝』(日本少年保護協会)といった“単行本的”と称される図書も、内容が日本社会事業年鑑等の編纂に必要と看做されたものは資料扱いにされた。

“資料”は年鑑編纂を目的として収集されたので、一般書とおぼしきものでも内容が検討され厳密に“図書”と区別された。“資料”は受入時点から年鑑編纂用であり、一般の関

覧対象ではなかったから、図書室利用者は閲覧することはできなかつたであろう。説明にあるように1年乃至数年で図書室に送付され、再整理されて閲覧に供された。

図書については、大原社研の図書分類表(別表)にあるように当時としてはかなり詳細な分類表である。分類表の詳しい検討は稿を改めるとして、この分類表の作成者は高野岩三郎1人ではなく、櫛田、久留間、細川嘉六、大内兵衛、権田保之助たちとの協同制作ではないだろうか。大原社研の初期の研究者たちは高野を慕う学徒らで構成されていることを考えれば、高野の呼びかけで研究所の分類表作りに参加することは極めて自然なことである。この分類表には、高野が思い描いた「社会主義および社会運動に関する図書、資料」(63)を収蔵する理想の図書館像があり、それを共有する形で櫛田、久留間、細川、大内、権田たちの社会経済問題等に対する射程も反映しているのであろう。また図書整理実務及び図書室の運営については図書主任森川隆夫、司書内藤起夫が所属した青年図書館員聯盟(64)の影響が考えられる。また青年図書館員聯盟の1929(昭和4)年8月第1回図書館講習会に荻野秀一を出席させ、図書室司書育成を図っている。

「大原社会問題研究所図書分類表」( )内の数字は便宜上漢数字とした。

1. 社会問題

(一) 社会問題一般 1 (二) 特殊研究 2 (三) 歴史及記述 3

(四) 労働運動

a. 労働運動一般 4 b. 亜米利加 5 c. 豪洲 6 d. 欧羅巴 7 e. 日本 8

f. 其他 9

(五) 産業組合運動 10 (六) 労働立法 11 (七) 少年労働 12 (八) 婦人問題 13 (九) 失業及職業紹介 14 (十) 和解及仲裁制度 15 (十一) 社会保険 16 (十二) 利潤分配及幸福増進設備 17

(十三) 土地及小作人問題 18 (十四) 中流階級問題 19 (十五) 生計費 20 (十六) 住宅問題

21 (十七) 租税其他ノ財政問題 22 (十八) 雑 23

2. 社会事業 (一) 公民学 24 (二) 一般自治問題 25 (三) 都市問題 26 (四) 農村問題 27 (五)

貧困問題 28 (六) 救済事業 29 (七) 児童保護 30 (八) 婦人救護 31 (九) 犯罪学及矯化制度

32 (一〇) 雑 33

3. 社会主義 (一) 社会主義一般 34 (二) 集産主義 35 (三) ギルド社会主義 36 (四) サンディ

カリズム 37 (五) 共産主義 38 (六) 無政府主義 39 (七) 雑 40

- 4 . 社会衛生 (一) 基礎医学 41 (二) 臨床医学 42 (三) 歴史及伝記類 43 (四) 通俗医学書類  
44 (五) 雑 45
- 5 . 経済学 (一) 経済学一般 46 (二) 特種研究 47 (三) 経済学史 48 (四) 経済史  
及経済事情 49 (五) 原始産業 50 (六) 工業 51 (七) 貨幣銀行 52 (八) 商業 53  
(九) 交通 54 (十) 経営学会計学 55 (十一) 独占及合同 56 (十二) 人口問題 57  
(十三) 殖民 58 (十四) 保険 59 (十五) 財政 60 (十六) 雑 61
- 6 . 社会学 (一) 社会学一般 62 (二) 社会科学史 63 (三) 歴史及記述 64 (四) 純正  
社会学 65 (五) 応用社会学 66 (六) 雑 67
- 7 . 統計学 (一) 統計学一般 68 (二) 人口統計 69 (三) 経済統計 70 (四) 社会統計  
71 (五) 各国統計 72 (六) 都市統計 73 (七) 雑 74
- 8 . 政治学 (一) 政治 75 (二) 法律 76
- 9 . 哲学 (一) 哲学 77 (二) 宗教 78 (三) 教育 79
- 10 . 理学 80
- 11 . 歴史地理 (一) 歴史 81 (二) 地理 82
- 12 . 文学 83
- 13 . 定期刊行物 84
- 14 . 辞書類 85
- 15 . 雑 86

## 注記

### はじめに

(1) 大原文庫の歴史：「社会問題の解決は公平なそして飽くまで根本的な立場からするを要し、決して一部利害関係者の見地からすべきではない。それには問題の基礎に溯り、我国の実際に鑑み、且諸外国の実例に徴して、充分研究調査を遂げなければならぬ。」というのが大原孫三郎の大原社会問題研究所設立の趣旨である。1919(大正8)年2月9日創立。1920(大正9)年5月9日天王寺区伶人町24番地に大原社研の新築成る。同年7月9,10日開所式。所長は当時東京帝国大学教授だった高野岩三郎である。社会問題の科学的研究の機関として活動するが、1937(昭和12年)土地、建物、図書約7万冊を20万円で大阪府に譲渡し、大原社研は1937(昭和12)年、東京都淀橋区柏木(現新宿区)の日本画壇の重鎮山内多門の旧邸に移転したが、1945(昭和20)年5月25日の空襲で焼失、貴重書等を入れた土蔵だけが焼け残る。戦後、法政大学と合併、1950(昭和25)年財団法人法政大学大原社会問題研究

---

所として再出発し、現在は財団法人を解散し法政大学の附属研究所として活動を続けている。初代所長は久留間鮫造である。(『大原社会問題研究所五十年史』法政大学大原社会問題研究所 1970)

なお大阪府立天王寺分館が引き継いだ「大原文庫の蔵書構成は、和漢書 24,126 冊、洋書 37,637 冊、総数 61,763 冊であり、主に社会科学関係の資料が多く、経済学を中心として、政治・法律・労働・教育・社会福祉等に関する図書である。」(加藤和基「大原文庫紹介」『大阪府教育委員会月報 特集大阪府立夕陽丘図書館』No.306 大阪府教育委員会 1975.7)

- (2) 加藤和基(元大阪府立中央図書館)「大原文庫稀購書紹介1」『大阪府立夕陽丘図書館だより ゆうひがおか』No.1 大阪府立夕陽丘図書館 1974.10、「大原文庫稀購書紹介2」『大阪府立夕陽丘図書館だより ゆうひがおか』No.2 大阪府立夕陽丘図書館 1975.1、「大原文庫紹介」『大阪府教育委員会月報 特集大阪府立夕陽丘図書館』No.306 大阪府教育委員会 1975.7、「大原文庫について—その由来と利用—」『大阪府立夕陽丘図書館だより ゆうひがおか』No.11 大阪府立夕陽丘図書館 1977.10、「大原社会問題研究所の足跡」『大阪府立図書館紀要』第4号 大阪府立図書館 1968.3.31

石井敬三(元大阪府立中之島図書館)「大阪府立夕陽丘図書館蔵 大林宗嗣旧蔵書目録 洋書の部」『大阪府立図書館紀要』第25号 大阪府立図書館 1989.3.31、「大原文庫研究の栞」No.1~No.3 石井敬三編発行 1989~1990、「欧州図書収集物語 大原社研・櫛田民蔵・久留間鮫造のことなど」『大阪府立大学附属図書館報 図書館だより』第29号 大阪府立大学附属図書館 1992.3.20、「大原社会問題研究所図書室の図書整理作業」『転換期における図書館の課題と歴史 石井敦先生古稀記念論集』石井敦先生古稀記念論集刊行会編 緑蔭書房 1995.9、「大阪府立夕陽丘図書館蔵 大林宗嗣旧蔵書目録 和書の部」『大阪府立図書館紀要』第26号 大阪府立図書館 1990.3.31、「<研究ノート> 大林宗嗣旧蔵書・書き込みの概要」『大阪府立図書館紀要』第27号 大阪府立図書館 1991.3.31 \*(注)『大阪府立図書館紀要』の25,26,27号は大阪府立中之島図書館と大阪府立夕陽丘図書館の共同編集発行である。

- (3) 中之島図書館百周年事業の一環として2004(平成16)年2月24日に発刊された。非売品。

#### 1-1 資料蒐集の始まり

- (4) 大内兵衛「大原社研と労働年鑑」『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.116 法政大学大原社会問題研究所資料室 1966.1 25頁 大内兵衛：1888(明治21)年~1980(昭和55)年。1920(大正9)年には大原社研の嘱託となる。

- (5) 大内兵衛「大原社研と労働年鑑」『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.116 法政大学大原社会問題研究所資料室 1966.1 “高野先生”は高野岩三郎のこと。高野岩三郎：1871(明治4)年~1949(昭和24)年。大正・昭和期の統計学者、社会運動家、東京帝国大学教授、大原社会問題研究所長。(『新

---

訂・増補人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、2000年)

(6) 『大原社会問題研究所五十年史』法政大学大原社会問題研究所 1970

(7) 櫛田民蔵：明治 1885(明治 18)年 11 月 16 日～1934(昭和 9)年 11 月 16 日。大正・昭和期の経済学者。

(『新訂・増補人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、2000年)

(8) 久留間鮫造：1893(明治 26)年 9 月 24 日～1982(昭和 57)年 10 月 20 日。(『新訂・増補人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、2000年)

1-2 櫛田民蔵

1-2 櫛田民蔵

(9) 宇佐美誠次郎「大原研究所所蔵の『資本論』初版本とクーゲルマン文庫、ハースバハ文庫など」(下)

『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.206 法政大学大原社会問題研究所資料室 1974.8

(10) Elitzbacher 文庫の 956 冊の譲渡価格は 8 千 911 円 58 銭 9 厘。(注(9)の宇佐美文献)。櫛田民蔵の

略歴等について次の資料に詳しい。「故櫛田民蔵氏肖像及略歴」「櫛田民蔵氏著作目録」「研究員櫛田民蔵氏の訃(所報)」、「櫛田民蔵氏追憶会(所報)」、「月刊大原社会問題研究所雑誌」昭和 9 年 12 月号、昭和 10 年 1 月号。「櫛田民蔵顕彰碑建立さる」、「高野岩三郎・櫛田民蔵両先生追憶会」、「法政大学大原社会問題研究所資料室報」No.241, No.245 法政大学大原社会問題研究所資料室 1978.1、1978.6、宇佐美誠次郎「櫛田民蔵蔵書に関連して」『法政大学大原社会問題研究所研究資料月報』No.298 法政大学大原社会問題研究所資料室 1983.7

「櫛田民蔵氏追憶会」からの一節に「会場には黒幕のバック前に白い花輪に包まれて故人の遺影が掲げられ、その前に大原孫三郎氏より贈られた一对の供花が置かれたほかには故人の著作目録、遺著及絶筆の手稿(本誌所載)が中央の卓上を飾るのみで、故人の風格にふさわしく極めて簡素。」とある。

(11) 法政大学大原社会問題研究所が所蔵している。Elitzbacher について宇佐美誠次郎が久留間鮫造の印象を紹介している。「久留間先生の思い出によると、エルツバッハーは顔が黒く、感じのいい人柄であった。ベルリン郊外の立派な家に住んでいたが、レストランで会食したとき、床におとしたチーズをひろってたべていたのが印象に残っている。また、エルツバッハーは背の低い金井延と同級だったので、背の高い久留間さんに、君は本当に日本人か、君のお父さんは日本人か、と聞かれたということである。」(注(9)の宇佐美文献、23頁の〔注70〕)

(12) 林要『おのれ・あの人・この人』法政大学大出版局、1970

(13) リャザーノフ、1870～1938 リャザーノフは筆名。ソヴィエト・ロシアの経済学者、歴史家、マルクス文献学者。(『社会科学大事典』19巻 1971)1921年から31年までマルクス・エンゲルス研究所

---

の所長。(注(9)の宇佐美誠次郎文献、8頁)

(14) 櫛田民蔵・久留間鮫造関係文書。法政大学大原社会問題研究所蔵。書店名は記述のとおり。

#### 1-3 久留間鮫造の図書蒐集

(15) 『コンサイス外国地名事典』第3版、三省堂 1998

(16) 「社会科学五〇年の証言 10 久留間鮫造 第3回 欧州の思い出」『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年9月4日 毎日新聞社

(17) 法政大学大原社会問題研究所蔵「久留間鮫造関係ファイル」

(18)(19) 久留間鮫造の高野岩三郎宛の手紙(大正10年4月22日付)法政大学大原社会問題研究所蔵

(20) 久留間鮫造「学究生活の思い出」『思想』No.350 岩波書店 1953.8

#### 1-4 久留間とイギリスの書店

(21) 大阪府立中央図書館蔵 大原文庫関係未整理資料

(22) 法政大学大原社会問題研究所蔵

(23) 高野岩三郎への手紙、1921(大正10)年4月22日付け、法政大学大原社会問題研究所蔵

(24) 「社会科学五〇年の証言 10 久留間鮫造 第3回 欧州の思い出」『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年9月4日 毎日新聞社

(25) 「社会科学五〇年の証言 9 久留間鮫造 第2回 大原社会問題研究所の草創期」『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年8月23日号

#### 1-5 図書蒐集リスト

(26) 大阪府立中央図書館蔵 大原文庫関係未整理資料

(27) 「社会科学五〇年の証言 10 久留間鮫造 第3回 欧州の思い出」『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年9月4日 毎日新聞社

#### 1-6 蒐集と留学生

(28) 高田慎吾から久留間鮫造への手紙、1921(大正10)年6月7日付け。法政大学大原社会問題研究所蔵

(29) 久留間鮫造から高田慎吾への手紙、1921(大正10)年1月30日付け。法政大学大原社会問題研究所蔵

(30)(31) 高田慎吾から久留間鮫造への手紙、1921(大正10)年3月23日付け 法政大学大原社会問題研究所蔵

(32) 『日誌』法政大学大原社会問題研究所蔵 大阪時代の研究所日誌、『日誌』は大原研究所の業務日誌のようなものである。全26冊。第1冊1919(大正8)年3月17日～10月20日から第26冊1936(昭和11)年7月25日～1937(昭和12)年2月28日までのものを指す。以後『日誌』とはこれを指す。

(33) 小河滋三郎：1864(文久3)年～1925(大正4)年。大原救済事業研究所の委員。大原社研評議員。 河

---

上筆：1879(明治12)年～1946(昭和21)年。河田嗣郎：1883(明治16)年～1942(昭和17)年。明治～昭和期の経済学者。大阪市立商大学長。米田庄太郎：1873(明治6)年～1945(昭和20)年。明治～昭和期の社会学者。同志社大学、京都帝大教授。日本の社会学会にタルド、ジンメルなどを紹介。(『新訂・増補人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、2000年)

(34) 「あなたもつかれたでせうが わしも大分つかれた。此処で一つ切り上げて一緒に旅行でもしませう。」と Highgate の久留間に宛てた櫛田の手紙がある。年代不詳。『櫛田民蔵・日記と書簡』(社会主義協会出版局 1984)はこの手紙を“大正11年推定”としている。

(35) 櫛田民蔵・久留間鮫造関係文書。法政大学大原社会問題研究所蔵

(36) 「社会科学五〇年の証言 9 久留間鮫造 第2回 大原社会問題研究所の草創期」 『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年8月23日号

(37) 「社会科学五〇年の証言 9 久留間鮫造 第2回 大原社会問題研究所の草創期」 『週刊エコノミスト』1973(昭和48)年8月23日号

#### 1-7 初期の資料整理

(38) 内藤赳夫：1896(明治29)年4月9日～1944(昭和19)年4月2日。1910(明治43)年京都基督教青年会英語学校高等科を卒業と同時に京都帝国大学附属図書館に1910(明治43)年5月3日から1919(大正8)年2月27日まで勤務し、1919(大正8)年7月に大原社会問題研究所図書館に採用された。大原研究所に入所してから勉学の機会を与えられ1923(大正12)年に関西大学専門部経済科を卒業、更に1925(大正14)年には大阪外国語学校(現大阪外国語大学)別科独逸語科を終了している。内藤も入会時期は森川隆夫より後になるが青年図書館員聯盟の会員であった。内藤は青年図書館員聯盟で森清の『日本十進分類法』作成に協力した。森は『日本十進分類法』初版のハシガキで、分類表作成に協力してくれた人々の名前をあげて感謝の言葉を残しているが、その中に社会学分野の助力者として内藤赳夫の名前が挙がっている。また内藤の業績として挙げておきたいのは『日本マルクス主義文献』と、そのドイツ語訳『Die Japanische Literatur über Marx, Engels und Marxismus von 1919 bis Ende 1927』、内藤は1927(昭和2)年高野とロシアのマルクス・エンゲルス研究所を訪れロシア語訳を同研究所に寄贈している。萩野秀一と協力して編纂した『エルツパッヘル無政府主義文献』や自著『労資協調論者としての片山潜』がある、いずれも大原社会問題研究所雑誌に発表したものである。大原社研が東京移転の際、森戸辰男らは内藤の再就職先として大阪府に採用を打診していたが実現しなかった。

(「東京移転に関する資料」『研究資料月報』No.304 法政大学大原社会問題研究所 1984.2)



- 
- (39) 『京都大学附属図書館六十年史』京都大学附属図書館 1961。森川の経歴等は法政大学大原社会問題研究所蔵。『人名簿』 森川隆夫：1884(明治17)年8月17日～1932(昭和7)年11月18日。森川は1927(昭和2)年11月25日に発足した青年図書館員聯盟の創設に参画。第1期から第3期の評議委員、第1期、2期の理事員を勤めた。大阪図書館協会の創立調査委員に選ばれ、その後理事職に就いている。(『青年図書館員聯盟十年略史 1927 1937』 青年図書館員聯盟本部 1937、仲田憲弘「近畿図書館倶楽部(近畿図書館協議会)事歴稿」『大阪府立中之島図書館紀要』第17号 1981.3.31)
- (40) 法政大学大原社会問題研究所蔵。『人名簿』。久留間は年俸1千100円、月手当30円で合計1千460円。
- (41) 『大阪府統計書 大正8年』大阪府 1921
- (42) 『大原社会問題研究所五十年史』には住所までは書いていないが、『倉敷紡績百年史』には当時の倉敷紡績の大阪出張所は大阪市西区江戸堀北1丁目とあるため、臨時図書室は西区と断定した。
- (43) 『西区史』第3巻 西区史刊行委員会編 清文堂出版 1979
- (44) 『倉敷紡績百年史』倉敷紡績株式会社 1988
- (45) 『大原社会問題研究所五十年史』法政大学大原社会問題研究所 1970
- (46) 大原社研の建築は、本館は2階建て1階10室2階10室の計20室があった。建築はソルヴェー研究所を模したと紹介される。それはベルギー科学者 Ernest Solvay が建てた研究所であろうと思われる。大原社研の設計者名などは判明していない、ただ書庫の増築を依頼されたのは内藤という技師であったことが『日誌』からわかるのみである。

#### 1-8 事務会の決定事項

- (47) 『事務室事務取扱上ノ申合せ〔昭和5年5月23日事務会ニ於テ決定〕』法政大学大原社会問題研究所蔵
- (48) 細川嘉六：1888(明治21)年～1962(昭和37)年。大原社研入所は1920(大正9年)。治安維持法違反で1933(昭和8)年3月20日検挙、4月20日起訴、犯罪事實は共産党シンパサイザー。(『復刻版特高月報 昭和8年4月』内務省警保局保安課 政経出版社)、1935(昭和10年)復職。 鷹津繁義：1885(明治18)年～1969(昭和44)年。1919年(大正8)年3月1日大原社研入所。1937(昭和12)年大阪府社会事業会館主事。社会福祉法人石井記念愛染園の常務理事でもあった。 越智道順：1893(明治26)年？～1965(昭和40)年。治安維持法違反で1933(昭和8)年3月14日検挙、4月7日起訴、犯罪事實は党シンパサイザー。(『復刻版特高月報 昭和8年4月』内務省警保局保安課 政経出版社)、越智道順は大原社研在職期間中3冊の翻訳書を出版した。1923(大正12)年『産業民主制論』(ウェブ夫妻著) 越智は久留間鮎造、宇野弘蔵、山村喬、山名義鶴たちと共同翻訳者に名を連ねている。『資

---

本主義のヨーロッパと社会主義のロシア』(ブライス著)は、大原社会問題研究所パンフレット No.17 として大原社研から 1924(大正 13)年 12 月 5 日出版された。3 冊目は同人社から 1926(大正 15)年 5 月、大原社研の同僚萩原久興と共同翻訳した『英国は何処行く』である。そして越智が大原社研から去った後に『戦時経済とインフレーション ドイツ・マルクの混乱より安定まで』(H・シャハト 著)が 1935(昭和 10)年、叢文閣から出版されている。大原社研退所後渡米、ロスアンゼルス の邦字新聞「羅府新報」の主筆。『南加州日本人移民史』を纏めた。(『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.253 法政大学大原社会問題研究所資料室 1979.3) 後藤貞治：1896(明治 29)年～1945(昭和 20)年。大原社研入所は 1921(大正 10)年。“大原研究所の名物男”ぶりについては『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.245 1978.6 を参照のこと。笠信太郎：1900(明治 33)～1967(昭和 42)。大原社研入所は 1928(昭和 3)年。1936(昭和 11)年退所。昭和期の新聞人、評論家。朝日新聞社論説主幹。(『新訂・増補人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、2000 年)

(49) 大原孫三郎夫人寿恵子は 1930(昭和 5)年 4 月 25 日逝去。数え年 48 歳。(『大原孫三郎伝』大原孫三郎伝刊行会編 中央公論事業出版製作 1983 非売品)。内藤起夫は全国図書館大会出席を兼ね本邦社会主義文献のため上京中であった。この時事務会は第 1 木曜日から第 2 木曜日に変更となった。

(50) ドイツ、ベルリンの古書店。Hugo Streisandは書店主の名前で、店名でもある。櫛田民蔵、向坂逸郎、有沢広巳、細川嘉六らが訪れて親交を結んだ。Hugo Streisandは資料蒐集する日本人にとっては神様のような古書店主だった。ナチスに迫害を受けたStreisandだったが1932(昭和7)年の販売カタログにはヒトラーの著書『わが闘争』が掲載されている。“Hitler, Adolf : Mein Kampf. Sonderausgabe. München 1932. [E17] Zwei Bände in Lw. Je 2.85”。フーゴー・シュトライザンド「ある古本屋の生涯」川崎八郎訳、向坂逸郎解説『学燈』1952(昭和27)年5月号の中に「私が特に国家学の領域を扱っていた関係から、この頃研究のためにドイツへ留学していた日本人の学者のなかから、非常に興味深い幾人かの客が、私の店にあらわれた。最初に訪れた人の 1 人は、日本の百萬長者オーハラ(大原)の息子が大金で創立した大原社会問題研究所の指導者であった。若き大原は、友人の社会主義者たちと共同研究しているうちに、私のきいたところによると、「資本主義の誤謬と社会主義の福祉」とを確認し、抗議として、この研究所を創立したのであった。」との記述がある。

(51) 荻野秀一は 1908(明治 41)年 1 月生れ、和歌山県出身。1920(大正 9)年 5 月 12 日図書室給仕として月手当 15 円で採用された。(『日誌』1920(大正 9)年、法政大学大原社会問題研究所蔵『人名簿』)。「社研を退かれ和歌山高商の図書課に勤務されている。-中略-その後、1943 年(昭 18)には東京帝国大学東洋文化研究所に移られたが、敗戦の混乱の中、1946 年(昭 21)に退職されている。1947 年(昭 22)

---

に大阪府立図書館に入られ、その後、天王寺分館の司書係長、本館の目録分類係長、調査係長等歴任の後、1968年(昭43)3月31日をもって退職されている。」(石井敬三「荻野秀一氏のこと」『大原文庫研究の栞』No.3 石井敬三編発行1990.4.23)

(52) 法政大学大原社会問題研究所蔵。「見計購入手続」

(53) 丸善の大阪出張所の開設は1893(明治26)年。1899(明治32)年2月支店に昇格。1921(大正10)年11月26日新築開店。大原社研の1919(大正8)年の「仕分簿」の洋書欄に京都丸善の文字がある。丸善京都支店は1907(明治40)年6月に開店した。(『丸善百年史』上・下・資料編 丸善 1980-81)

(54) 石井記念愛染園とは、大原社研の創立者大原孫三郎が人生で最大の感化を受けた人にクリスチャンで社会事業家の石井十次がいた。その石井が大阪に開いた民間の社会事業福祉施設・岡山孤児院大阪分院を母体とする。石井は途半ばの1914(大正3)年に死去、後にその意志を継いだ大原が財団法人石井記念愛染園を開いたのは1918(大正7)年であった。理事は大原孫三郎、大阪朝日新聞社長上野理一、大阪毎日新聞社長山本彦一、済世会大阪府病院長石神亮、法学博士小河滋次郎らであった。鷹津によれば、愛染園は愛染橋夜学校や保育所を経営したほか「新に救済事業研究室を設けて図書を購入しその他諸般の救済事業の科学的研究を為す」ことが決議され、「その計画が着々実を結んで後にはこの救済事業研究室が胚胎となって大原社会問題研究所を生」んだと解説している。(鷹津繁義『石井記念愛染園三十五年小史』社会福祉法人石井記念愛染園 1953 非売品)

(55) 『大原社会問題研究所栞』法政大学大原社会問題研究所蔵、発行年不詳。

(56) 越智が作成したものを大林宗嗣が英訳したと『大原社会問題研究所五十年史』にある。なお大林の英訳の原稿は法政大学大原社会問題研究所に保管されている。

(57) 法政大学大原社会問題研究所編発行 1970

(58) 法政大学大原社会問題研究所に保管されている。

(59) 宇佐美誠次郎「大原研究所所蔵の『資本論』初版とクーゲルマン文庫、ハースバハ文庫など(下)」  
『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.206 法政大学大原社会問題研究所資料室 1974.8

(60) 『大原社会問題研究所五十年史』法政大学大原社会問題研究所編発行 1970

(61) 「東京移転に関する資料」『研究資料月報』No.304 法政大学大原社会問題研究所 1984.2

#### 1-9 大原社研の図書と資料

(62) 「資料室の栞」大原社研資料室 1929 法政大学大原社会問題研究所蔵

(63) 大内兵衛「大原社研と労働年鑑」『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No.116 法政大学大原社会問題研究所資料室 1966.1

---

(64) 青年図書館員聯盟が図書館員の教養の向上、図書館管理法準則の確立など 5 つの綱領を掲げ、“一般民衆”の図書館に対する要求に応じるべく、閉鎖的な図書館を否定し、先進国の図書館の模倣でもなく、図書館と図書館職員を変革し自ら理論的、組織的研究をし、図書館員が連帯して図書館を刷新するために立ち上がったのは昭和 2 年のことであった。(『青年図書館員聯盟十年略史 1927 1937』青年図書館員聯盟本部 1937)。『日誌』の 1923(大正 12)年 9 月 29 日に「図書カード代共他 72.40 間宮払」の記述があり、青年図書館員聯盟の書記で図書館用品を販売した間宮不二雄経営の間宮商店から図書館用品を購入している。

# 翻刻 役者更紗目鏡

佐藤 敏江（中央図書館）

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵（九七一／一六四）黒表紙 二冊（十三×一八.五cm） 台簽の書名「役者更紗眼鏡」、内題「役者更紗目鏡」、序文は二丁、本文は各三二丁、本文末に文政三年（二八二〇）五文舎一笑写とあり、**四明荘** **豊前別中津濱田氏蔵書**の印がある

三代目中村歌右衛門と二代目嵐吉三郎のライバル関係は、一八世紀後半から一九世紀前半の大坂の歌舞伎の黄金期を現出する要因となった。二人の役者とそのファンの存在が、演劇界を始め、多くの出版物や役者グッズ等文化・風俗・経済活動など多方面に影響を与えた。本書はそうした資料の一つで。冒頭に大坂住居大哥舞妓役者衆中平日行状とある様に、当時の大坂在住の大歌舞伎で活躍する役者の平生の生活を中心に、芸評、人物評を役者評判記仕立てで書上げ、一見華やかな役者の世界の内実、素顔が覗けるファン必見の珍しい作品となっている。

凡例

本文は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して返り点、句読点を施した。底本にある旧字体はそのままとしたが、一部活字のない物は通行の字体とした。

底本にある振り仮名はすべてそのままとした。

活字のない特殊な合字・異体字・連字体は通行の字体に改めた。

各丁の終わりに「」を付した。

底本が虫損により、判読困難な場合は圏で、判読が可能な場合は「」で示した。

反復記号「レ」「ニ」「ク」は底本のままで表示した。

本分中の紋・図は、**紋・図**、或は図の説明文を付した。（例）**青海波図**

白抜き文字は、該当部分の下に（白ヌキ）と表示した。（例）上上吉（三文字白ヌキ）

# (1) 役者更紗目鏡

大阪巻

二冊之内」

見たいなく、芳野の桜よりも人の見たがる芝居の楽屋、さわきぬれ事、「む」ほん人道外、  
〔荒〕事、舞台にかへる内の気質、二の替り、新狂言趣向のよしあし夫よりも、聞く嬉しき平日乃  
行状、正月二日に本出しの、例年の評書かと、ちよつと覗けばこりや珍しい更紗目鏡」

○當世は裏の裏行楽屋口から出這入する役者衆中の褒貶會

月花餘情色人卦などの粹書には、所謂妓婦哥伎乃内證はなし、手管の穴を著せしも、いまた俳  
優家の癖を記せし書といへども漸楽屋方言田舎芝居のミ也。夫さへ十返舎一九が膝栗毛乃糟粕  
を掌た顔すれと趣向古し。ここに戯れに著すへ、八文舎の評團に准え初めに役者衆中の目録見  
團圓こし附、位はうがつて数穆乃名目を冠らしむ。是しも眠獅撰などの糟粕よと笑へど笑へ、四  
方乃山々蒼の梅も笑ひを含み、初春の筆初目出度尽し乃歳旦、春興も雅人の耳をよるこはす程  
の趣向もなく、風雅でもなく洒落でなく、しやうことなしの此帖、凝つて八思案にあたわずと、初  
團乃途中庚申の日乃雪乃帰るサ、風團圓ひ出る俣をはなし乃かわりに團附るも、楽屋を見ざる  
人々の常に聞ざる事共をいわざるゝそよけれども、又いわで過んもいかゞとて、年酒から梯子し  
て雪をばしのぐ傘の下、またく、夫から立寄た。酔中のむだ言。 五文舎一笑」

大坂住居大哥舞妓役者衆中平日行状 戯品定

○見立芝居に持扱ふもの左のことし

## ▲惣巻頭

大丈夫 片岡仁左衛門

道頓堀北側

當時座頭乃名は

通り札

## ▲立役之部

勇氣 市川蝦十郎

布袋町

團圓ぶりハリつばな

一枚看板

古風 中山新九郎

太左衛門はし

美(艶)香の仕にせは

大坂名代

當世 嵐三五郎

大西の芝居へおりた

ならく

天然 市川団蔵

小がらでも親の名を

縫足

余風	坂東重太郎	ぬしや丁
	鬢附やの狂言を	似顔画
為功	中山文七	太左衛門はし
	どふしてもやわらかな	ふたい蝋燭
律儀	嵐猪三郎	南たまや丁
	圍質へきつしりとした	西場凶帳
出世	浅尾勇治郎	御前町
	しばらく乃間に	勢り上ケ
奇麗	小川吉太郎	道頓堀北がハ
	やつし役ハよふうつる	鏡臺
若半	中山一蝶	新九郎同居
	とり廻りハしやんとした	上下上ケ
大様	中村歌七	南かさや丁
	芝翫丈に内縁を	引象
追号	「富士松山十郎」	
同	中山小三郎	
同	市川市羆	九郎衛門丁
同	大谷此友	大谷同居
同	嵐璃三郎	新川
同	片岡十蔵	
同	中山新平	
同	嵐寫三郎	當時江戸
同	市川濱蔵	なんち
同	三桝亀五郎	同
同	坂東荒太郎	生玉
同	小川又九郎	長丁
▲実悪敵役之部		
巧者	浅尾工左衛門	ほてい丁
	がく屋でポンくといふ	鍔鉾
強気	大谷友右衛門	ほてい丁

懐口が大きに見ゆる

鼻紙板

目アリ

出情(白ヌキ) 嵐冠十郎

同丁

江戸ふうて大きな

紋板

世話 浅尾國五郎

なんち

頭圍がわりにあちこち

立廻り

師風 浅尾為十郎

當時江戸

ぶたいハ賑ハしぬ

騒キ哥

可笑 嵐團八

きくや丁

ぶたいと地とは

早替り

追号 片岡小六郎

九郎右衛門丁

同 桐山紋治

同

同 坂東國五郎

なんち

同 片岡蝶十郎

ほてい丁

同 桐寫儀左衛門

新川

同 浅尾此兵衛

高津新地

同 小川馬右衛門

同 大谷鳴右衛門

同 嵐岡十郎

すみや丁

▲若女形之部

風雅 嵐小六

道とんほり北側

ひかし山の月花を

遠見

彫(頓カ)智 中村哥六

周防町

はでをこのむ

持衣装

今様 中村松江

三津寺丁

樂園で気性ハ

高二重

端手 藤川花友

とふし江戸

つねの気だてハ

江戸見へ

美景 嵐富三郎

南笠や丁

いつでもきれいな

人形ぶたい



花実 澤村國太郎

玉や丁」

仕内ハしつとりとした

獨吟

閑情 嵐かなふ

南笠や丁

どふやら淋ふなる

本釣鐘

気性 市川門之助

市川同居

年圍りりかうに

廻り道具

深窓 片岡愛之助

片岡同居

お爺様をこわがる

奥屏口

利發 嵐璃光

三津寺丁

人のしなんを見て

シヤギリ

目アリ

一入(白ヌキ) 澤村璃苔

なんち

愛敬 浅尾徳二郎

宗右衛門丁

追号 可眠子

小六同居

同 中山みよし

太左衛門はし

同 中山恣代

三津寺丁

同 浅尾吉三郎

工左衛門同居」

同 浅尾かなめ

勇次郎同居

孝行

片岡恣江

高津しんち

ほっひ

大坂の末々までも

触紙

洒落 尾上多見之助

同 萩野にしき

同 嵐源之助

▲花車道外之部

器用 澤村徳二郎

南たまや丁

追号 中山岩次郎

▲〔頭〕取之部

勤仕 柴崎臺蔵

竹田まへ

篤実 桐の谷権十郎

坂丁

俠氣 坂東國右衛門

南たまや丁

▲狂言作者之部

金澤龍玉

川井良助

金澤芝助

澤嵐納老

並木重蔵

奈河晴助

近衞恒助

奈河卯十郎

並木半蔵

濱衞氏助

奈河一洗

▲惣巻軸

豪傑 中村歌右衛門

南笠屋町

ひしきばいごる

町触太鞍

正風 嵐吉三郎

ほてい丁

仕打も氣質もすぐる

花道

千穰萬歳楽

ちよつと御断申上升濱芝居出勤なから此處で評いたし升る

ほうひ

孝行 百村紋九郎

高津しんち

此お人西高津新地九丁目大野屋善右衛門借家高津屋多七同居去卯

三十六才

祖由 妙清

去卯百二才

手當圓として米十俵被 下置候此よし御ふれ有 之候

開口

頭取

いつも様方お好乃道て早々乃御来駕、評判所の大慶いか斗りか難 有仕合。併今日の

評義は例年八文舎自笑とのゝ致さ圓升る三ヶ津惣役者藝品定と六圓替り、大坂住居の哥舞妓役

者衆中、平日乃氣質ニ風雅も有レハ血氣もあり。又見かけニ似合ぬ利屈嗅きもあれば、護戸の牛

王なもある。其氣にころの評判てムリ升から、さ様三思召被<sup>レ</sup>下升ふ。〔コリヤ〕 コリヤ珍しむ評判て面白からふ。〔芝イ好〕 夫ならは巻頭のせり合、ヒイキくの力味も出来マイ。〔頭取〕 サア夫故立役、敵やく、若女形と部を分まして、大低役者衆中の烈に評致升ふ。〔皆々〕 惣巻頭ハ誰じやく。<sup>レ</sup>

### ▲惣巻頭

大丈夫 〔圖〕 片岡仁左衛門

〔ヒイキ〕 ヤレ我童さま、とふしても三ヶ津で役者の親玉座頭とハ折紙付キじや。早ふ評か聞たいく。

〔頭取〕 當時大哥舞妓にて座頭と人の赦せし大建物ハ此お人、浅尾国五郎と申せし敵やくより段々旧功をつミ、片岡仁左衛門といふ名ハ「役」者道にてハ急度した代々の「銘」家。〔芝イ好〕 ヲツ

ト其系凶家すじハ、頭「取」がひろふせいでもよふしつて居る。何角ハさておき當時の我童丈の氣質乃評はどふじやナ。〔頭取〕 なるほと系凶ハ勿論藝道の評ハ、本家人文舎の品定ニ差かまひ升れハ、

則樂屋の評にかゝり升ふ。〔女中連〕 わたしやはよふりくわん様の評義か聞たいわいなナ。〔頭取〕

東西く、各々さまがたの聞たがらるゝ「花」かたを待かねさせ<sup>マス</sup>舂ルが評判所の固密と申もてムリ升る。〔女中連〕 エゝ氣のわるゐしんきな仕方しやないかいな。〔頭取〕 扱まついづれの役者衆中で

も内乃いやミハ大低同しおもむきにて、建者衆乃内のかまへ、寢所ハ何處ても中ニ階がお定り、繻子物乃類ひ乃衣装の古で拵た小夜着、蒲團乃うへに、さなから大名高位乃心持にて、また一睡乃夢も覚やらぬうち、芝居にハ戎太鞍も打切、三番嫂もすミ、エイヤヲ「おうと忒番目がモウ詰り升ると中働きが知らせに返ると、内義か下女か其よしをいひつぐと、そろくと起上れハ、びろうどうにて是も衣装乃古で拵た丹前姿、細帯乃俣にて、手水乃湯を汲せり。はんぞう、鵜飼茶碗、ゆつぎにを（もカ）其家々に紋所いかめしく舌かき磨き、楊枝一ツく、お傍つかへの秘といへばしほらしけれど、摺圍らしの下女がいやミ歌、又は當時乃流行哥などを口癖乃やうに諷ひながら、いとのおさく」と立廻り手水も済と、其むかし嵐三右衛門時代には諸見物乃悦んだ丹前六法乃所作ならて、内着乃丹前姿にて六法よりも四方八方乃神仏を拝ミ廻ス。是さへ役者乃評儀と同じ事にて時々乃きゝ物あり。先當代にてハ法善寺乃金びら、自安寺乃妙見、高津乃宮の高倉稻荷大國神、ゆうが大権現ハ幸町乃方を遙拝し、持仏でハ其宗旨く、の念仏題目多くハ法花宗の坐藏がち也。此拜礼か済だと朝御膳、木具乃うへに錦手乃茶碗、定紋乃付た朱塗の箸箱ハ、お定りの名護屋ミやげのふち金乃黒塗乃脇とり盆に、新渡り乃躰もの②順慶町の座禅豆屋ほど並へたてく、近習が廣ぶた、藁の物持て出るといふ身構にて給仕もすむと、樂屋入のきもの、羽折かう

とう端手ハ銘々の気ニなれハ、其所々で評いたし升ふ。

**粹かり** カノ月花餘情に陽臺乃妓婦送り

退クならず、駕に氣すと記セシこと大建もの役者ハ、樂家の往来を駕籠でせらるゝが、宮芝居乃チンコ役者、ヒフカ引廻しか、長合羽か何じややら分らぬ物着て行跡から、「履」物提て風呂敷包背負た母親か付て行ほどしみたれた物ハないわい。

**頭取** 東西く、今日ハ大哥舞妓乃評義で

ムリ升れハ、中芝居、ミやしばゐ、あやつり芝居、座しき芝居、旅芝居などの品定ハ、又々近日相催し升るから、今日ハけつして御無用でムリ升。

**ミなく** サア松嶋屋乃評いどふだく。**頭取**

我童丈ハ日頃大聖觀喜天を信仰ふかく、家内には聖天さま乃一間あつ圍穢れ不淨の輩入へからづと、禁制乃札を出し莊嚴、まわりには金銀七宝をちりばめ、誠に金銀にあかした其結講サ。

**ヲダテ** 御拝礼が済ましたら靈宝ハ左りへ。**芝い好** エ、評判乃懸りから茶にせまる。時々頭取へ

一不審もつて参らふ。聖天さまを信仰すると女子の傍へも寄らぬといふに、(3)我童丈ハ水上を百人する願か有とやら聞たが。**立花組** 岡嶋屋ハものかたふてそんな事ハ多らい嫌ひじや。

**鬻組** 其替り毎晩乃大酒に夜明しをせらるゝゆへ、自然と芝居の始りが遅ふなる。こちらの玉ハ其段かえらい物じや。第一狂言乃けいこが早ふて、初日が早ふて、朝乃初りが早ふて、幕が早ふて。

**わる口** ヲツト待たり。其替り氣がはよふて、時々狂言方や後見にこぶしの一ツも當らるゝハ困たものじや。**立花組** イヤ又岡嶋屋に其様なことハとんない。**頭取** 其争ひハおまちなされませ。

璃寛丈ハ大立ものゝおくりやう、芝翫丈にハ少々若輩ないやミも交るやうに見え升れど、元来ぶたひを大事と車輪で勤めらるゝ故、自然と氣が早ふ成升。**儒者** いかさまナア。是か所謂智者の一矢と申のでかなムらふ。**片岡ヒイキ** コレく、鬻や立はな乃評ハあとへまわし、圍ア巻頭の我童

丈の細評か聞たい。**頭取** 杵嶋屋ハ最早六十四五才なれと、元来氣質に端手なる所あつて、めいらぬ所がかふきの大建物、夫故大丈夫といふ位を付ました。**南より** (4)去年天王寺乃開帳にハ、

杵嶋屋子供中といふ上ケもの段々とはづミ出した。是等も皆我童丈か陽氣ナからじや。

**えびヒイキ** イヤ蝶々のうかれハ播磨屋が多らかつた。**市紅ヒイキ** イヤく、三河屋乃天王寺蕪の趣向が當つた。**ハル口** ヲ、大根でなふてよかつた。**南** 杵江丈、哥六丈、其外女形の世話人が

奇麗ニ有た。**頭取** 其節ハ大阪中か大うかれ、殊に樂屋内からの上ケものにハ町々からの見物群集ゆへ、百倍乃陽氣か出来るが芝居の花というもの。併シ若大夫から出た馬の上ケ物、是かおとなしうて能ムリ升たれども、陽氣は役者の愛といふもの、扱また我童丈が全躰乃氣質ハ大丈夫

といふ侍めいた氣質有て、折紙付の銘の物こしらへよりハわざ物を数腰所持致さるゝとの事、其外宣徳乃火鉢にともし燭臺、或ハ金屏風、名画のかけものゝ類ひハ、北辺の曆々乃大家も及ハす。勿

論ぶたいの衣装ハ、毎年の土用ぼしに、よしの立圍の花紅葉を一同に見する心地がせられ升。

**樂やシリ** 分限者といハ大建物乃座がしら故、大王と呼升れど扱々若々しい事しや。**名古やレン**

しかし手前乃国から帰るゝ節に、入歯はつして只乃親仁と見せられた所へ、さしもの道中働ク雲すけも我童丈とハ知らなんだ。〔南より〕片岡せいはい乃〔青海波〕揃を着た男さへ付て居ねへ、めつたにそこらハさすもの「じやない」。〔頭取〕元来神仏を尊ミ、京都鳥辺山乃妙見へ石とろうろ、和州信貴乃毘沙門さまへの音進もの、近々四天王寺乃西門乃焼香爐、施主花徳七代片岡仁左衛門(5)妻今女と鑄付しへ、ちとおこかましけれども、香爐ハ立派ナ事、其外處々乃神社仏前へ奉納は数しれず。〔わる口〕しかし年中の大吉日と大悪日の圍んば、ほんに龜屋左京もあきれかえる。

其うへ役者乃内に死るといふ事をいわさぬとハ、きつい護片乃牛王ナことじやないか。〔バイテング〕

イヤく(6)江戸乃市川海老蔵は、ぶたいで殺さるゝ仕組さへ嫌ひにて、柏筵が大坂で成神乃狂言にも、殺さるゝ所ハ自身勤めなんだといふ事さへある。爺さんが首落されたら嬢が飯焚ふかといふた古イ咄し、このやふな事ばかりハなる。役者乃「内」でも死る事ハきらふはずじや、寺方の門にさへ立春大吉なと、目出たくつくしで祝ふじやないか。〔頭取〕成ほど仰の通り。とかく祝ふに恐ノ相ハない。夫ゆへ忝嶋屋乃繁昌といひ、殊ニ御子息嶋忝丈行末ハ大建者と見へすいてある。誠や梅檀の二葉。〔南左〕又そのうへに目出たいハ、堺屋力忝同居(7)かぶき役者片岡杏江、「所ハ西高津

新地三町目小嶋屋専助かしや、此人孝心によつてほうびとして鳥目三貫文 御上より被」下るとハ、其身の誉といひ、師匠乃大慶でハないか。〔老人〕(8)去冬ハ百村紋九郎ほうびを戴かれ、役者衆に孝行ものと家持がたんと出来るとハ有かたい事じや。〔皆く〕この跡ハ誰の評じや早ふ聞たい

く。〔頭取〕これ圍りハ立役衆中の内證乃咄しにかゝり升ふ。

### ▲立役之部

勇氣 團 市川鰻十郎

〔新丁ヒイキ〕ヤレ待て居ました。播万屋の親方。〔頭取〕市川系ハ申さすとも、各様方によく御存、

元来新町の廓中にて出生いたされ、幼少より役者道が好故に、終にハ故市川市紅丈の門弟と成り。〔芝いスキ〕いなり座摩の子ども芝居て修行の功か積で有ゆへ、中々素人の子とハ見へぬぞ。

〔八まき箱中〕ソリヤ目徳でも同じ事で、伏見堀羽子板橋で素人の子でも、當地若大夫の芝居では花かた、谷村も三津五郎も閉口さして居るハい。〔新丁〕ソリヤ好こそものゝ上手なれば、其うへ親

達が身躰有だけ物を入、張こまれたゆへ、とぶく大かぶきの大建ものに成られた。元来たくましい気性ゆへ「男立も致され、またいやな事はいやじやといひ切て仕まふさつぱりとした行」ミ、夫ゆへ勇氣と言位を付たのじやナア。〔市紅ヒイキ〕サア其勇氣が有ゆへ、師匠の息子今の團蔵丈とハ

時々喧嘩か出来、前かたハ市ノ川と市川の中へかた仮名のノの字を入れて、紋も〔図〕三ツ舛に一文字を引た事もあつた。〔江戸左〕いまの市川はお江戸のこつばう親玉團十郎から譲り受、鰻十郎と

改名して三舛の舛の字ももらひ、俳名新升と改めた時、市河家の柿の素袍大小などを譲りうけ、今の市紅と八師弟の系八切て有る。南より それも昨年故人團藏十三回忌につき、市紅が三代目の團藏と改名の節、角の芝居の棟梁角兵衛とのゝあいさつで、鰻十郎丈との中も直り一座しられた。楽やてんぐ しかしひらかなの役をめで、言分をしたとやら叩き合たとやら。ヒイキ サアそこが勇氣といふものじや。ソリヤ喧嘩にかけたら市紅ハたまりごたハ有マイ。頭取 さ様なる中違との出来ますにも、まんさら其謂れなきにもあらずでムリ升。(9)師匠乃團藏丈病気のミギリ、今の市紅丈ハ江戸表に居られ升たゆへ、葬式諸事残らず新升丈が致され、其うへに千日の竹林寺にりつばな石塔」を建られ法名釈了西と彫付ケ師恩を報じられた。物しり しかし辞世の哥に

けふもゆめ 寝ても起ても夢のゆめ 夢にゆめ見る夢の世の中

と能筆て書てあれど、夢といふ字が昔に成て有ハ多らい昔ナア。市紅ヒイキ 市紅丈か建られた

遊行寺の石碑にハそんな昔ハないわい。南々 さ様な書損位を頓着せぬ氣質故、余りいやミのゆ

すりもなく、適々自画の鰻の墨画ニ讚した扇が関の山にて、毎朝焼とうふ屋を喰て運を強ふし、

とふく座がしら株に成られた。嶋の内花車 息子とのゝ助藏さんもいつぞやから市藏と改名し

て、此頃見れハ早元服がよふ似合、姉さんの小富さんも大清から出て、是も鉄嬢つけも濟で目出たい盡しじやハイナア。

#### 古風 中山新九郎

頭取 喜樂丈ハ中山新七と申せしむかしより、狂言乃仕打ハ内(ママ)論、地、行状も古風にて、俳優家の名家中山家元和泉屋の家屋敷から美艶香の仕にせ迄譲り受られた。役者道の大慶と「いひ、仕合な義でハムリ升ぬか。近辺より 大晦日にハ、美艶香ばかりが百貫乃余もうれるとハけつ

こうな事じや。頭取 子息一蝶丈も當時かぶぎの中立もの、追々昇進てムリ舛ふ。

#### 當世 嵐三五郎

京ヒイキ ヤレ京屋の親玉まつております。わる口 なんほまつてムツてもモウ今でハ濱芝居の役者

の中へ這入り、たとへ座かしら被<sup>レ</sup>成ても威勢が薄ふ成たやうに見へるわい。濱の見物 あわの若おし

沢山さふ三、目とくや百太郎 鬻助の勢ひニハ今のかぶき役者が叶ふ物かい。友右衛門大せい 引

すり出してなくれく。頭取 とふざいく、さ様にあらしくしき事を仰られ升と、どふしても濱

芝居の見物ハ立テばかりを嬉しがつて、評判ところの行義をしらぬかと思われさつしやるも気乃どく、マアとつくりと氣を慎めて頭取の評を御聞被<sup>レ</sup>成ませ。見巧者 イヤモ奥聞ふより口聞

と、来芝丈に當世といふ位を付られたハ、とかく當世ハ名を取ふよりとくをとれの世界じや。大  
まいの前金取て、正月の給金もかぶきへ出勤並ニとり、また其上に二月の手つけ迄もたつふりとと  
られたとのうわき、濱芝居の事なら定而蔵衣装にて有ふし、夫なれハ裸でものおとしたためしがな  
いと言物じや。 **ハルロ** イヤ又来芝いつでも同じ衣装、かぶきをつとめても衣装を切て出たるハ  
見た事がない。 **京ヒイキ** サアそれも親来芝の衣装が沢山に有ゆへの事じや。 **ヲダテ** ソレガやは  
り京こんじようき、来芝が濱へおりたくと惣嫁でも買ふたじや有まいし、角乃芝居の釣看板見  
たがよい。米ふんで居た芝翫でさへ下へおりたじやないか。 **靄組** 何ぬかすじや。あれハ細工人の  
わざしや。そこでぬからぬ **靄凶** の親玉、じきに米をさし上ケて居る所ニ人形ぶりをかえた處が、  
筑前米が違ものニなつたトゆふて、堂嶋乃仕内かゝりの人々がよろこんだ。なんと気どりハ多らい  
か。アゝつがも子エ。 **頭取** ヲツト来芝丈は嵐松之助と申せし若年の頃、しばらく役者止めて小  
間もの屋にもなりたり。又貸本屋も致されたとの事、夫故外の役者衆中と違ひ世事にかしこく  
樂屋でも役者同士のすれもつれのあいさつ、又ハ勘定場の渡り引の應對納らぬ役も納めたり。頭  
取役やら手代やら、作者の替りにまではしり歩て、ほんにやれくく、あし豆なお人。 **おたて** ソ  
りや「足まめな筈じや。(10)一本足乃景事で當つたもの。 **南** また人のしらぬ足もまめなやら、  
南枝香乃後家御と何やら。 **頭取** イヤモさ様な事迄評いたし升ふなら際限ハムり升ぬ。とかく  
来芝丈は振付が御上手ゆへ、身の取廻りも利口に立廻り、夫ゆへの(11)大西出勤。是からハ濱芝居  
も行儀正敷相成升ればやはり大慶、殊ニ當春へけいせい品評林の狂言も評判よく、大當りにてお  
手からく。

### 天然 團 市河團藏

**ヒイキ** ヤレまつて居たく。三河屋の若旦那、早ふ評を聞しておくれ。 **芝い好** 市紅丈に天然と  
いふ位を付たハどふした事じや。 **頭取** サレバ天然自然と申事か有て、故市紅丈の御子息にて、  
團三郎と申た子役の砌ハ末頼母しき狂言の仕内でムり升たれど、成長乃後とふか暫評も薄く、  
若大夫へ出勤致された事も有たれと、サア爰か天然自然と申ものにて、名人の胤といひ、子役の  
時の小賢しき氣質頭れ、とふく立ものと成られ升た。 **南** 大立ものゝ名家故内の行義も正  
しく、いつとても羽折きて座ふとんの上に座し、青貝入の机の上に書物を置ならへ、孔雀の尾乃  
大ゆすり、平日碁かお好にて盤上のお樂しミ。 **朝顔好** (12)あさかほもおすきて能穆も所持致さ  
るゝとの事、喜樂丈や百花丈も朝顔ハつくられても、俳優家では奥山丈に續たら市紅丈じや。  
**俳** 朝顔を愛せらるゝから、ふう雅ナ所も有やうなれど、去年亡父十三回忌乃摺もの、自らハ  
市川團藏と改名の事ゆへ兎も角も、追加乃人々ハ諸人の知た俳名乃ある役者衆中なるに、片岡

仁左衛門じやの、中村哥右衛門などゝ記されたハ何の為の俳名じや、扇面などに自筆の讚を望まれ、又ハケ様ナ摺ものゝ節俳名を用ひべきに、表つきをいだされしハ、扱々不風雅でムル。**頭取** イヤモ當世は俳名を表つけにした役者衆中が多ク出来、そこらとんじやくハせぬ所がけつく風雅なよふに成升た。何はしかれ小がらでも大立もの乃氣質頭れお手からく。

余風 國 坂東重太郎

**濱見物** ヤレ坂東待て居た。こちのく。**かふき見物** イヤ重太郎をこち乃くと、濱芝居の役者じ

やと思ふて居るか。其むかしハ大哥舞妓の座本も「つとめられ、第一かぶき乃名家岩子丈乃御子息にて、父御乃敵やくハ被」成す、若衆がたよりやつし役と成、中頃時めきし中山文七丈鬢附やくと諸見物乃悦んだ藝ふうヲのミ込ミ、また當世乃きゝもの岡嶋屋丈の狂言ならムれく、持て来いじや。**頭取** サア夫ゆへ余風と申位を付ました。ぶたいハ女中の悦ぶ花ある狂言なれども、地乃趣ハかうとうにて、楽屋入の衣装もじやが、嶋の對イ返し、小紋の對といふやうな着つけはおり、舞臺乃狂言よりは上品ニ見へ升る。

為功 國 中山文七

**頭取** 百花丈は兵太郎と申た時方やつし役がお家乃藝にて、俳優乃名家乃名苗氏を受継、中頃ハ江戸表乃大立もの瀬川路考丈乃相手と成られしかと、當時にては小さまと殺され婆々役は外ニ類ハムリ升ぬか、やつぱり持まへのやつしハ又々格別な所がムリ升故、こなしといふ位を付ました。**有難や** 百花丈ハこち乃お宗旨と同じ事て殊ニ大の有がたや、先年御門跡さまの御下りのせつも御礼金を沢山に上られ、扱もく殊勝ナ事。「そふゆふころゆへ、黒谷乃浄光どのゝさしずつも、和泉屋に所持の御前さま、けつこうな仏壇をゆずり受られ、扱々有がたひことじや。

**ハル口** その有がたやに似合ぬ大の殺生好き、はぜ釣りムれ、網ムれ、沖釣にも度々行るゝ故、日和の善悪を見る事は、大かいな船頭も及ハぬく。有難や乃殺生ハ、是かほんまに魚ハ喰れて成佛するといふ所か知らぬ。**物しり** 御出生はおはり名古屋乃矢場町紅屋とうけ給りました。

律儀 國 嵐猪三郎

**橋組** 兄さまの評から聞たい。待ていたく。**南** 環子丈の律義ハ誰てもよふ知つて居る。**頭取** それ故律義といふ位を付ました。此お人若輩乃砌ハ近江芝居にて修行致され、初代尾上新七丈養子と成られし事も有たとの事。常に不動明王と楠正成、天山老人が信仰にて、左専堂の不動ハ月参り致され、田上ノ不動、其外近在の不動廻り、又ハ楠乃旧跡を尋んと河内の國に遊び、



天山老人の弟子ごふんとなりて名を地山と呼び、太平記ハ勿論、義心傳、先代萩の講釈が得手にて、ときく座敷かう尺をして、人の耳を悦ハせられ升。」**南** イヤ又講尺斗りじやない、上るり乃會を催し、連中ハ英子丈 璃光丈などにて、勿論上るりハ中大夫どのとハ兄弟の事也。

**上ルリスキ** 上るりよりハ三四郎の方がよいと、三味せんでハ甚大くと声がり升。**頭取** 其うへ

上るりの故実あやつりの事に委しく、是等の咄しをせらるゝがお上手。**ハル口** 外の事を藝と替

たらよからふ。**頭取** コレハどふした事でムリ升ス。此所の評判に狂言乃よしあしハ御用捨でムリ

升ス。**南** 述懐さんといふわけ意見ハとふした事じやしらぬが、猩々といふ異名の訳ハおかし

じやないか。**女中連** りくわんさんと違ひ其様ニさゝハ上らぬに、猩々とハどふした事じや。

**頭取** **図** ソリヤ弟付じやといふ事じや。ハハハハハ。

奇麗 **図** 小川吉太郎

**ヒイキ** 英子さまく早ふ評が聞たいく。**頭取** 英子丈は芝翫丈の伯父御東齋との、初めハ源蔵

と申せし人乃養子にて、生得やつし方の器量故、小川吉太郎といふ名跡をつがれ申た。それゆへ奇麗と申位にて、御子息栄次郎丈も、當春座万の社内口の芝居にて「他門ませずの中村一統、玉の助、駒之助両人の戻り駕に、栄二郎丈禿の役、すつぼりかづらにておつとめ可愛らしうムリ升タ。**南** 狂哥も出来る上ルりもやらるゝ、小川丈ハ御きやうはだ。**わる口** でも上るりハ声

がかひなふて聞にくい。**ヒイキ** 暮もおすき、其うへに天山老人乃講尺がきついお好にて、近辺に

席が有ていつもおこし。**講尺スキ** ソリヤ嵐猪三にすゝめられ、百花丈もけだいなふ聞に行るゝ。

**頭取** なにハしかれ、やつしやくのきつすい、追々御出世でござり升。

若半 **図** 中山一蝶

**仲い連** 一蝶さん待かねて居るわいなア。**坂丁連** 岡嶋屋うつしに座敷の遊びをせらるゝ。**ヒイキ**

うかれ好で座敷が面白事じや。**頭取** 来太郎と申た節より、きつと若手乃花かたと見え追々

に御出世でムリ申ふ。**ハル口** しかししばらく若大夫ハ出勤にて、和泉屋乃名家ハ濱芝居の太鼓

を打込だハ、マアおいらハ不承知だ。**ヒイキ** なにぬかすやら、それもしゆぎやう乃うちじや。今

のまに大立者、岡嶋屋くといわして見せるわい。」

大様 **図** 中村歌七

**鶴図ヒイキ** 哥七さまくこちのく。**頭取** 哥七丈は橋之助と申た頃方大手なる狂言故、大様

とつけました。**南** かつほくに似て(13)大の角低すきにて、毎年のすもふ大かた十日は欠されぬ。

〔角力好〕 奥山も猪三郎もえらひ好きじや。〔頭取〕 哥七丈ハ、先年御前丁にて江戸店を立派に出され、大キ成鏡臺に、芝翫丈の石橋の似顔店出しのせつハ、買人が群集いたしました。〔ヒイキ〕 哥七丈ハ大から故、ちよつとおもひ付ことが大きにて、見事な看板じや有た。〔近所〕 イヤ看板よりいびきの音が大きな内ニ寝てじや事ハ、近處によふ知れる。今ハ八幡すじかゝやのとなりへ変宅にて、いびきの音をたすかつた。

温和 國 三桝他人

〔頭取〕 他人丈ハ清兵衛丈の御子息にて、元来すなを成氣質故、見物の評ハ勿論、楽屋うちにても至極うけよく、夫ゆえ温和といふ位を付ました。〔芝い好〕 當春ハどふか江戸下りと聞ましたが、やはり京都にて二の替りも「御出勤」。〔京〕 他人丈ハ大坂より京のヒイキが多ひ。〔江戸〕 背もすらりと高くよいかつかう、江戸へ下られたら、近頃乃沢村宗十郎によく似て有から評判かよからうわい。

追号 富士枕山十郎

同 中山小三郎

同 市川市羆

同 大谷此友

同 嵐璃三郎

同 片岡十蔵

同 中山新平

同 嵐嶋三郎

同 市川濱蔵

同 三桝龜五郎

同 坂東荒五郎

同 小川又九郎

〔頭取〕 山十郎丈ハ折々の出勤、どふぞ打續出勤あらば其節細評いたし位付升ふ。小三郎丈も近年ハ打續ての出勤なく、どふぞ口乃内が直してあけたく、市羆丈の氣質ハおとなしく、此友丈は江戸表へ暫お下りで有たが、帰坂の後ハおとなしくなられ、璃三郎丈ハ新川く呼れてふるつわもの、十蔵丈ハ江戸表のふりつけの名人市山七蔵どの「子息」故、ふり附か御巧者、新平丈ハ九州地などの旅てハ、中山来助と呼むて大建もの、嶋三郎丈ハ其昔中山久吉といふた時ハ、子供芝居てハ

やつし役乃立もので有たれと、一兩年ハ東國へお越て住所もしかと存ぜず。濱蔵丈ハなんば新地法善寺の裏門にて中嶋屋と言呼屋、先年箕面乃弁天の富が當りし方追々繁昌、聖天さまの信心厚く日參致さるゝは奇どくナ事。

**生玉より**

南乃坊の聖天さまへ金壺両寄進とハきどくな事。

**頭取** 龜五郎丈ハすまふ場乃近辺て武蔵野御飯といふ料理屋、荒太(マ)郎丈ハ生玉馬場さきからとハ若けれども御苦労な事、又九郎丈ハ錦子丈乃弟子にて、笠や又九郎といゝしが、いつの程にか小川又九郎と改名致され。

**芝い好**

ヲット待たり。笠や又九郎といふハ名人の名苗氏じやに、

小川としられてハ唯の親仁じや。

**はま見物**

とふしてもほうだらといふながよふしれてよいわいな。

**頭取** いづれも御出情のせつ位を付ませう。

### ▲実悪敵役之部

巧者 國 浅尾工左衛門

**南** ヤレ金田屋の親仁さま。

**三寶組**

アこれく鬼丸さまを親仁くといふてじやけれど、我

童さんよりハ式ツ若ぬわいなア。

**頭取**

工左衛門丈ニ巧者の位を付たハ、藝道乃巧乃字ハ申迄も

なく、元来器用なる産れ付にて、小細工事などを巧者に致され升る故の位でムリ升。第一上根にて筆まめに書拔のせりふを直し、五音相通、アイウエヲカキケコノ詞つかひなどの吟味を致され、其うへに、芝居乃禁句入らぬわの、當らぬ、はやらぬ、つけるのといふ詞を嫌ひ、夫故入歯を大せつに致され升る。

**楽ヤシリ**

鬼丸丈の楽屋ハ自身が手まめに松葉紙にてはり廻し、とんとゆ

すイ事は嫌ひにて、發句の哥のなどいふよふな事を致された事ハなく、只いつ迎もまりし天乃御利生と、法花勸請のいなりさまの世話せらるゝ斗りじや。

**南**

内室のおまつさまハ、清兵衛さ

んの内のがきつゝ中よし、芝居の初日はいつでも欠さず見物じや。

**芝い好**

御子息吉三郎丈も

近頃まで江戸はら當てして門トに遊んでゝ有たのニ、去秋ハ額ニむらさきぼうし置て裾もつて、ちやんと「よひ女形ニ成られた。

**ヒイキ**

元来器用な生れつきで、琴、三味線、上るり、三弦、つゞみ、

太鞍でも達者ナ事じや。

**頭取**

舞は勿論乃ことにて、三番嫂にて當られ升た。鬼丸丈は、顔に

似合ぬ大の子可愛がりにて、弟子忒人も息才延命ナやうにとて、無事之助 丈夫郎と附られた。

**芝翫連**

其名の附親ハ芝翫丈じや。ほんに珍らしい名じやないか。

強氣 國 大谷友右衛門

**頭取** 金轡丈ハ実悪一道より脇道へゆかぬ氣質故、強氣といふ位をつけました。

**芝い好**

いつでも

狂言が車輪ゆへ、ビリくといふ異名。

**南**

岡しまや松嶋屋に續ての俳優中の金持じやとの事、

いか様そふかして土用干の衣装斗りてさへおびたゝる事。

**刀屋**

イヤ又妙ナ拵への腰の物を数多

所持してムリ升。**聞たかり** 妙ナこし乃物とハとふした物じや。**刀屋** さればでムリ升。大谷氏の好にて鏝ハ勿論、ふちかしら、目貫、小づかに色々、或ハあミだ如来、千手観音、不動明王などの像を彫つけ、南無大師遍照金剛じやの、南無不可思議じやのといふ文字を彫付、勿論細工は「妙手」にかけ、金にあかした脇さしの所持ハ、杵嶋屋にも負ぬ位でムリ升。**南々** なんちの紫友香并**九十紋**香乃店も場所がら故繁昌と見へ升ル。

曰アリ

出情(白ヌキ) **閼** 嵐冠十郎

**ほり江** 慶舎さまく近江さの、評から聞しておくれ。**頭取** 東西く、先程来芝丈評の節、南

枝香とやら何とやら、余所事の評も交りました故、其儀ハ決て御断申上升た。**南々** 慶舎さん

ハ杵嶋屋をいわすかたらずに真似して居てじややら、信貴山参りしたり、年中の大吉日大悪日乃吟味か六か敷事じや。**頭取** 慶舎丈は岡嶋屋の高弟でハムリ升レと、元来江戸表にて修行い

たされた身分故、江戸の気風が離れすふたいの衣装ハ勿論、平日の着もの羽折とても、大名旗本侍衆のごとく大きな紋をつけられ升。**楽やシリ** ソリヤ其はずじや、具足屋の内室ハ江戸て武

家の奥勤した女中とやらにて、縫針がえらいとの事。**近所々** 縫針もえらいが怪気する事もえ

らひ。**南々** 女夫ながら江戸気故、楽屋ハ権助が来たとしてこわがるものじや「ない」**楽やシリ** わ

やな江戸ツ子まかいハ慶舎に逢たら一たまりもない。**頭取** 慶舎丈ハ元来世話やきずきにて人の

難義も見捨ぬ気性、勿論師弟の礼を重んじ、朔日、十五日、廿八日の式日、初日寄初當り振舞などにハ、人一番に袴を付て親方くとと璃寛丈を尊ミ。**おたて** イヤ夫よりハ黒びろうどのヒフ着

て走り歩行、璃寛連、橘組、ほり江教経連中へのおつとめハ、藝者でも及ぬく。**芝い好** ふたいの

狂言方ハ地の咄しがきつゝる上手、其中に江戸表の大名旗元衆の家々乃格式などの故実をいわして聞ふなら、岡しま屋の長せりふ方面白い事じや。**見巧者** 時ニ頭取、慶舎丈の位に出情とつけ

たハ舞臺の狂言の車輪ナ所は勿論の事、連中方への折見合出情致さるゝといふころで有フが、日アリと記して情の字を蔭にして有のハ、余り世話やき事が過て、けつくいらくするやふに見へると

いふ事て有ふ。**頭取** 成ほど見巧者乃御連中とて其通りに違ひなし、しかし慶舎丈のごとく尻

軽にかけ廻り、ヒイキ連中を大勢にはならぬ事。**狂言方** 礼状を書いて呉の「見舞状かやりたいの

と頼まれるには困り升。**艸紙や** 其様に状を出さるゝ故、冠十郎丈も大坂の能筆の内に入られ

て有一枚摺がいつぞや出ました。**北より** とふか近頃ハ岡しま屋と一座せられぬゆへ、璃寛の機

嫌をそのふたなどいふ評も有ぞ。**頭取** なる程素人方にてハ、慶舎丈岡嶋や乃番故乃やうに

も思ふてムル方も多ひ故、久しう一座がムリ升ぬと機嫌でも損ねたといふ評の有も尤、しかし座

組八時の模様故、とかく師弟の礼義厚、出情の字を黒二被、成るやうが肝要く。

世話 綯 浅尾國五郎

**ヒイキ** ヤレ近国さまく。 **頭取** ぶたいにわからぬ平日の行込ミ、近頃は頭取替りに我家内のお

世話やき、そこで世話といふ位を付けました。重宝ナお人でムリ升。

師風 綯 浅尾為十郎

**頭取** 奥山丈ハ江戸表へ下られ、彼地にて師匠乃高名為十郎と改名有て、狂言の仕打ハ、故人為

十郎丈乃師風ある故、即位を師風と付ました。 **大坂ヒイキ** 去年の暮には芝翫丈と同道にて帰

坂と待て居たのに江戸ニおめて、マアしはらく顔が見られぬか。 **芝い好** 為十郎丈も早ふ戻りたい

といふていられるとの事じや。 **頭取** あさかほと角力好の事は、前て評もムリ升た故、猶細評ハ

帰坂乃節ゆるく致升ふ。

可笑 綯 嵐團八

**ヒイキ** ヤレ岡むら屋待て居たく。 **頭取** 團八丈におかしミといふ位ヲつけましたハ、ふたるのも

やう。 **南々** 地でハふたるほどのおかしミハないぞ。 **冠十郎ヒイキ** 地は慶舎の方やつと面白ひ。

**頭取** ソリヤ其はずじやムりましよ。役者衆が地もぶたいも同じ様に三枚目の敵役じやとて、内

で金を盗で花生へ隠しても置ず、さわぎ役も内でハ不理屈ナ事いふて、女房や中働きをこまらせ、

実悪じやとて、憎でらしる物でもないゆへ、團八丈が家内を笑してハ居られ升ぬ。 **楽やシリ** わら

わす所か酒のむと、チトねち上戸ゆへみなこまるとの事じや。 **頭取** 何はともあれぶたいに愛有

りて、見物乃悦ひ升ゆへ可笑とつけました。」

追号 綯 片岡小六郎

**頭取** 小六郎丈は秋又の御子息にて、初は芝翫丈乃弟子なれと、當時は片岡氏の縁有て小六郎

と改名致され。 **ヒイキ** 芝翫と片岡の替り役なら生うつし、仕内を似せらるゝ所は奇妙じや。

**南々** 何と成と位か付てほしい。

追号 桐山紋治

同 坂東國五郎

同 片岡蝶十郎

同 桐寫儀左衛門

同 浅尾此兵衛

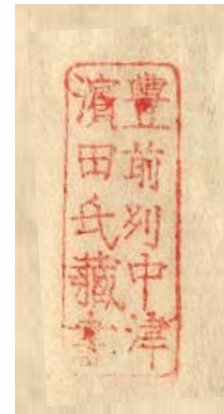
小川馬右衛門

嵐岡十郎

〔頭取〕 紋次丈ハ、其以前ハ藝者にて有しゆへ、ふたいに粹過た所もあれど、近頃ハ俳優はいかいも致され面白ひお人、国五郎丈ハねりも、素人芝居などに顔する事が上手との事、蝶十郎丈は末頼母敷よい氣質、儀左衛門丈も其昔瀧右衛門といふた時分ハ、チト人をこまらせたお人で有たか、今てハわたのよふに成られ、此兵衛丈はふたいへ出ると目をふさゐで、両手をにぎりつめる癖が「出て、歩行ふうハ師匠鬼丸丈を似せられ、元来旅乃座がしらの氣質離れず。〔南々〕 新川で宝来屋といふ茶屋商賣が繁昌じや。馬右衛門丈は座广の前乃養詮丹の先生に似て有ぞ。〔頭取〕 岡十郎丈ハ部屋がしら才藏丈乃息子にて、京へ芝居引こし乃節は、此お人か頭取やく御くろふく、何れも追々位を付ませう。〔皆々〕 是からが若女かたの評を早ふ聞たいく。

役者更紗目鏡 上巻畢

彼者更紗目鏡 大塚巻  
 えんじく  
 芳野の模いも  
 人のこゝろが  
 さへ居入ホ敷  
 巧いねまき事  
 りんくほの  
 半  
 赤三春  
 かハ家  
 内ノ氣質



<蔵書印>

船も舟でなく舟初の合もあが  
 うさへはらうがたまはれ馬米  
 位とあゆまうは所入のさる  
 唐ハ又のさるさるつりくけ  
 ちさ内はれし由一行はり  
 江ののあむ村のさるさる  
 海にれはれはれはれはれはれ  
 せとせとせとせとせとせと  
 八人合のし押るさるは  
 近き下ぬさるさるは

▲物巻巻軸  
 豪傑 中村飯齋  
 中村飯齋

彼者更紗目鏡 大塚巻  
 えんじく  
 芳野の模いも  
 人のこゝろが  
 さへ居入ホ敷  
 巧いねまき事  
 りんくほの  
 半  
 赤三春  
 かハ家  
 内ノ氣質





若女形之部

風雅 函 嵐小六

**ヒイキ** ヤレ吉田屋の玉さまく。**頭取** 当時暦々の若女かた衆もムリ升れど、代々乃名家といひ、殊二小六丈は岩次郎と申せしはつ舞臺より大立もの乃器量備わり、女かたを情を守り、行義といひきやりうといひ申は此お人、其上、(14)去秋故人と相成られましたる京都ひかし山の俳士、土卯先生の門人にて、ふう雅の道を好ミ、常に閑情を楽しミと致され升る。**南** 去春までハ九郎右衛門町乃貸座敷に居られ升たが、夏の頃よりこちら側、河作の東へ変宅にて、専妙膏といふ膏やくの根悍、唐画の異ふうナのうれんも風流から出た物好き。**頭取** 成ほど雅を好まるゝ故、居間のかけもの柱がけには、其時々の發句の短冊をかけて樂しミ、近頃ハ大分達者に成られ、ぶたいもつゝゐての御出勤。**見物** しかし手も自由に成らぬうへに、纏足をしらるゝほどふか見て居てあぶないわい。**上丁** こちらのぬしやどのへ毎日通われ、神佛の加護より「入かたの駕籠にて、按腹の療治のきゝ目が見え、追々に全快て有ふ。**南** 去春伯父庄六殿の死去の砌、小ばしの墓所へ乃葬送りに、正八ツ時の釈迦兒ひとハ珍らしい。往来の諸人か不思議を立ました。**しやれもの** 去年の春から、乗物より(15)かご細工の釈迦になひが大はやりじや有た。ハハハハ、御

頓智 函 中村歌六

**ヒイキ** 周防町の太夫に頓智といふ位ハどふじや。**頭取** サレハ哥六丈ハぶたいの取廻りが達者故、頓智といふ位を付ましたが、舞臺ハ平日とてもヒフを着て樂屋入など、たつしやなひふじやといふ人がムり升。**丸口** 達者なひふかしらぬが、やはり女かたは女かたの姿にてしほらしふしたがよるよふにおもわれる。平日ちと気づいとの噂。**鶴菱** 本家の親玉乃おもわくにしたがふが能かところハおまふて居る。しかし今出の花かたじや。**頭取** ソリヤ其はずじや、中の鳴の舟越氏がヒイキゆえ、干牛丸の仕送り、周坊町にも看板か出してある。どふテも干牛丸の精力故か、御子息も沢山に出来孫のふるを、今宮の隠居ハ嘸お悦びでムり升ふ。」

今様 函 中村松江

**頭取** 松江丈ハ市川熊太郎と言、いなりの芝居へ出勤の頃より當世の人氣にかなひ、今大立もの乃氣質故、樂屋乃行状けいこの砌りより、長きせるにて煙草盆を扣へ、ひろうどうの大座ぶとんに座し、気性高く狂言も少し嗜なまるゝよし、それ故今様といふ位にいたし升た。**皆** コリヤ頭とりの御はたらき、いひぶんハないぞく。**ヒイキ** 愛が有てひんがよふて、巴丈ふうがどこやらに

見へるぞくすきく。

端手 閩 藤川花友

〔頭取〕花友丈は道とん堀にて出生ながら、鰻十郎丈と同道にて江戸表へ下られ、先年帰坂致されても、やはり江戸の気風離れず、始終杜若丈の行「ミ」を地として、御酒も大ぶんゆき升故、はでといふ位を付ました。〔南〆〕内室は江戸萩の伊三郎丈の娘ゆへ、江戸訛りも少しませり升。

〔ハル口〕藝中言葉きれの戻々に、スフクといふけたいな声が交るのがおいらハ耳二立。また茶屋から茶屋への梯子さげ、あれもやつぱり杜若丈を「して居らるゝか。〔頭取〕サア其端手が有故、ぶたいも地もきれいに申分なし。やがて江戸表へ帰られたら大立ものでムリ升ふ。〔皆く〕六條の御堂が聞てあきれる。ハハハハハ。

美景 閩 あらし富三郎

〔南〆〕さけも可なつて端手の有のハ、花友丈より富丈の方じや。なぜに富三丈を上席にせぬのじや。〔頭取〕此評前ニ、上座の下座のといふ甲乙ハムりませぬ次第不同、花友丈ハ杜若丈の端手を専一とし、また嵐富丈ハ少しお酒を上ツテも可愛らしうを専らと致され升る故、美景といふ位を附ケましたハ、持まへの御器量のうつくしき、美景でハ御ざりませぬか。〔狎坊〕狎抱て座ぶとんのうへにすわり、長きせるで南草のんでじや處ハ、とんと北辺の妾宅さんを見るやうなわいなア。〔ヒイキ〕杏江丈のゆすりハ可愛らしうてよいぞ。

花實 閩 澤村國太郎

〔濱見物〕ヤレ大場待て居た。〔芝い好〕いづぞやハ無分別で立役に成りかけ、蹴抜の塔から飛んで怪家まで被。成たが、元来ぶたいハ申及バす、地の行義がらが女形の情をはづさぬ可愛らしい所ハ外ニないぞ。〔頭取〕「夫故花実と申位をつけ升たも狂言の仕内、平日の行状花実相對の申分なき人故、俳優道にての名家、沢村国太郎といふ結構な名苗氏譲り受られしハ、其身の大慶と申もの。〔ヒイキ〕夫も日頃信仰の弁才天の御利生で有らふ。〔西〆〕去々年大西の仕内被。成た梅枝さんハ、此太夫がきつひいいき、追々の御出世故、嘸およろこびで有ふ。〔楽やシリ〕イヤ又狂言の上手な斗じやない。立も自身に付ケふり附が御功者、琴、三味せん、鞆弓の三曲ならムれく。〔頭取〕常精を禁酒して、弁天を祈り藝道を励るゝ故、頓与大立ものと昇進ハまたム内でムリ升。

閑情 閩 嵐加なふ

芝い好 小六丈の門弟から今離寛丈乃苗氏をもらひ、名を加納と致されしハ、とふり分らぬ為じや。  
頭取 小六丈乃嵐も、岡しま屋の嵐も元祖は嵐三右衛門、勘太郎兄弟の分れにて、さして替りはムリ升ぬ。しかし今離寛丈の嵐を名乗り、紋所ハ可といふ字ヲ三ツ吉まがひにして用ひられ升るハ、両方捨ぬころてかなムリ升ふ。  
ハルロ なんぼう名苗かえても「声かかひなふて、加納でハなふて、かいなふじや。  
エイキ 声がなふても狂言に申分ハないわい。  
頭取 東西く、今日ハ狂言の評ハ御無用。此お人ハチト花が薄イと申ハ、全躰うむしやうなころにて、其上近ころハ、當時の流行もの家相方位など松浦先生そのけにて、かよふの事ニつてムる故、自然とぶたいか淋しふなる事もムリ升ふなれど、藝品定ハ八文舎へ譲り、さらば次の評にかゝり升ふ。

気性 國 市川門之助

エイキ 可愛らしひ門之助なら何ぞ優しい位でも有そふな物を、気性とハどふやら女形でハなふて、立役めいた位じやないか。  
頭取 成程気性といふてハ強ふ聞へ升るが、全躰門之介丈の氣質、町方の娘といふて見よふなら、金ひらとう八兵衛とやらいふ仕打、夫故お千代の姉の役など、妹でハしてムれども、眉落したふけ處もしかねぬ氣質、天王寺の上り物の節も蝶々乃うかれなどすなち被 成方ゆへ狂言も達者、そこで気性と付ました、  
エイキ イヤ又琴 三味せんに懸たら、国太郎でも嵐富でも叶やせぬ。  
おだて 酒の方かやつとゑらいかく。」

深窓 國 片岡愛之助

頭取 忝しま屋の御子息愛之介丈は外々の女かた衆中と違、二階住居の部屋住の身なれば、別に評もムリ升ぬ。随分おとなしゐそだてがら、大立ものゝお子息で御ざり升。

利發 國 嵐璃光

頭取 中頃ハ中村糸太郎と呼し事もムリ升たれど、當時ハ璃寛丈乃嵐を名乗り。  
楽やシリ 自身の狂言ハ達者なれども、人の狂言をとふのころのといわるハ悪ひことじや。  
おだて どふりで璃光が藝に出ると奇妙々声がかゝらぬ。ハ、ハ、ハ、ハ。  
頭取 これハおなぶり御無用く。  
エイキ 何ぬかすのじや。何のかのと言もぶたいが見えるからじや。其替り琴は申及ず、哥、三みせんから上るり、三弦、發句も少々ハ東山の土卯の弟子で出来るぞや。

目アリ

一人(白ヌキ) 國 澤村璃苔

〔なたヒイキ〕 璃苔さん待て居た。こちの方の加納さまが、早ふ評が聞きたいといふてじや。〔リセン〕 一

入といふ位の入の字を蔭にした訳、曰有とハどふした事じや。〔頭取〕 此お子、はしめハ芝翫丈の門

人にて中村哥木と「いふて、芝翫丈が江戸中下りの節、北国の旅芝居に勤て居られし事、芝翫く  
り毛ニ書記しゝり升。其後嵐氏の引かけにて、其苔丈の苗氏をもらひ。〔六ル口〕 まんまと首尾よ

くへたニ成られ升タ。〔頭取〕 東西く、璃寛の璃と其苔の苔を合して璃苔ト呼び、中の芝居の座本

もしばらく勤られ、追々出情と思ひの外、どふやらしんが留つた様子、そこで一入の字をかげニ

致したハ、女形の情を守り裾からけでしてやりに被。成たら、御器量ハよし、一入可愛らしめも

出来升。またゆたん被。成たら多キなうら腹曰と申ハ爰の所故、随分藝道をお勵ニ被。成ませ。

愛嬌 浅尾徳二郎

〔頭取〕 とく三郎丈ハ初ぶたいの間もなふ中の芝居の座本と成、今に相替らず御勤。〔ヒイキ〕 とふ

やら先の藤川友吉丈ニ似た處が有て可愛らしい。〔頭取〕 夫故愛嬌と申位を付ました。〔南〆〕

象頭山金毘羅様乃撫皮の御世話神慮にも叶ひて、追々御出情て有ふ。

追号 可美無子

同 中山みよし

同 中村恁代

同 浅尾吉二郎

同 浅尾かなめ

〔頭取〕 右五人の衆中の位ハ追々升ふ。まつ眠子丈ハ、八十次郎と申せしときよりハけしからぬ  
御成人にて、めきくとお背が細ふ長う成ました。みよし丈ハ来芝丈の引廻しにて、追々の御出情。

恁代丈ハ親御の勢りきで、今年ハ角の座本のおつとめ、追々御出情でゝり升ふ、吉三郎丈、かなめ  
丈ハ浅尾氏の所てひようばんいたし升ふ。

洒落 尾上多見之助

同 荻野にしき

同 嵐源之助

〔頭取〕 中女かたの衆中に、洒落と言位を付ました。此お三人ニ限らす惣たひ中女形といふものハ、  
稽古もそこくにして、法善寺の土弓引に行、ほうびのうちわ取て悦こんだり、いろくと洒落た  
事して遊ぶもの。殊ニ多見之介丈は見立事や口合の上手。〔南〆〕 蝶々の時うさぎのしやれも急

らかった。

▲ 花車 道外之部

器用 澤村徳三郎

勤仕 柴崎臺蔵

篤実 桐の谷権十郎

俠気 坂東國右衛門

〔頭取〕 臺蔵丈八年久しきかぶき乃頭取、夫故勤仕といふ位を付ましたハ、朝未明から打出し迄の日勤は申に及わず、惣連中かたへの念を届ケ、此お人竹田の芝居でなら伊といひ、前茶屋の商内の仕内も至極でいねい、となた様がおこし被 成ても頓与籠抹ハムリ升ぬゆへ、近在からも芝居の見物ハ、處の庄屋殿から指図して、なら伊へくと来り。追々「繁昌でムリ升。桐の谷丈もかぶきてハ古イ頭取、夫故篤実と申位を付ました。坂町にて小間物や店ハ文の塵紙からいろくのあき内、これも追々行込あつて諸事の應對、さばき事をよく致され、生得鳥類、畜類の生ものを飼事に妙を得られ、八まんずしの狎屋といふては、誰しらぬ者もムリ升ぬ。

▲ 惣巻軸

豪傑 〔函〕 中村歌右衛門

〔皆く〕 ヤレ待て居たく。〔靨組〕 靨「組か首長ふして居るといふも久しひものじや。〔北より〕 そり

や其筈じや、當時乃親玉じや故、ソレ京都加茂季鷹先生より〔鶴菱紋〕 丈へ送られたとて、扇面の狂言ニ

首ながし 口ばしなかし 足ながし よわひもながく よく揃ひ靨

といふ哥を能筆にて書給ふ。芝翫丈か諸藝によく達したとの事故とやらの御ほめなされての悦ひ哥じやとさ。〔京々〕 イヤまだ其上に、去御殿にて今世間で流行するハ何と御問遊され候處、御内の御側遣イの御女中々、芝翫と申哥舞伎役者がはやり升と申された折ふし、雲錦亭季鷹先生筆 御前へまかられたとき、御上さまななんぞほめてやれとの事、夫で〔17〕加茂先生乃狂哥に、

天台の止観しくわんハ四明しめい 當代の芝翫ハ芝居 かざやかしけり

といふ事も聞て居る。〔頭取〕 芝翫丈は天明八申のとし、若太夫の芝居、子供狂言へはしめて出られ、廿四孝の横蔵と、伊セもの語の有「つね二役を出かされ、其ころ子供狂言乃藝品定うない子といふ評義記に、位ハ大上上吉(四文字白ヌキ)としるし大建ものゝ氣ざし、其節か漸々十一才の時。

〔ヒイキ〕 其のち見立すまふにも、東の方乃大関にて位ハ極上上吉、西の方ハ中山一徳位ハ極(白ヌキ)

の上上吉で有た。 **頭取** 夫より座万いなりの宮地を修行有て、大哥舞妓正勤の初め、江戸下りの狂言目録ハ濱杏哥國の著述、芝翫佛のする也。委しくハ殊ニ今日ハ藝評を致さぬ席故、内證ばなしひいき氣質の評ニ懸り升ふ。 **書林** (18)初めの江戸下りの節、堺町乃舞臺にて、千本ざくらニノ切知盛の役、見物と口論出来て額に疵を受られ、其節の即興ニ、

むらさきを かほにもろふや 上江戸の花

といふ発句を致され、夫々江戸中の最肩つよく成たといふ事、これも哥國乃作の、故郷へはれの錦画姿といふ小本二冊の内に書て有が、其後二度目の江戸下りハ、芝翫栗毛とて、哥右衛門自作の少冊、又ハ芝翫帖、芝翫国一覽、芝翫ヒイキ花実知などといふて、色々様々の本乃出る役者ハ、古今にその例かゝり升ぬ。 **狂哥連** 市丸乃社中曉の鐘成が出した芝翫節用百戲通ハ、余程骨か折て有て面白い。 **本スキ** 成程小細工によふ出来てハあれど、アリヤ先に芝居節用集といふものと、江戸から出たきんもう凶彙之臺図會の作の附會、案文もよつほと手傳ふて有わい。 **□□や**

其今度の百人一首ハ不評て有た。 **借本や** 其替り芝翫ミやげ滑稽雲之助咄ハ評がよい。 **頭取** いかさま各々様方の仰の通り、芝翫丈の之著作せし戲書の出版有事ハ、昔から例がゝり升ぬ。尤名人乃衆中目出度ふたい納め致され升か、またハ死去乃後其人々の名誉ヲ著せし書にハ、江戸の事ハしはらく置、京大坂にては、中山由男一代記、慶子画譜、梅幸集、眠獅撰 玉の光、来芝一代記 桐の嶋台、市川の流嵐小六過去物語、嵐雛介死出の山風などて、其身一代の事を一度か二度に著した本ハ出れとも、夫さへ名人と呼ばれし人、昔ハしらず近来の祇園町尾上芙蓉、浅尾為十郎、山下金作、「三保木花桐ハとも角も、あれ程ヒイキ強かりし近頃の中山文七 鬢附や

く」とて、今にひんとこのやつしの藝ふうを残した人さへ、其藝評一代記さへ出ずと仕舞たに、當代の人氣が本ニ移つたのか、何にもせよ珍しゐ事でゝり升。 **芝イ好** ヤソリヤ書物斗じやない。替り毎に錦繪の似顔ハいふに及はず、其時々ヒイキ連から出るりつばな摺物に讚した發句狂哥。 **橘組** ソリヤ芝翫斗りじやない。岡嶋屋でも同し事じや。 **江戸** ヲそふじやく。また一度も江戸へ下らぬ璃寛をヒイキするやうなれど、東都の戲作者、(19)曲亭馬琴乃作の三勝半七南柯夢もかぶき三仕組、璃寛丈か半七と丹波市ニなられた時と、其後椿説弓張月にて鎮西八郎を勤られた其時と、両度迄曲亭主人か誉詞のりつばな摺ものさへ、はるく江戸から送たじやないか。

**鶴図ヒイキ** (20)イヤすりもの斗りじやなぬ。時々の狂言に寄た芝翫織ハ嶋の内の油丁絆和が玉じや。紙入地、たばこ入、鏡袋地なら好したいじや。 **ごふくや** 芝くわん茶、芝翫柿も流行たが、今年はまだ「芝翫嶋かえらふはやるテ。 **キセルヤ** しくわん嶋張のきせるなら沢山ニ仕入ました。 **小間物や** 芝翫嶋櫛から尺長なら色々ムり升ス。 **ヒイキ** 其外芝翫のし巴、芝翫半ざり、芝くわん駒がた手汐、芝翫ろうそく、芝翫御飯なら千日前から所替して、今ハなんば新地四季のこちら。

橘組 ソリヤリくわん御飯もあるわい。ツルウ 菓子にとりてハつるの子、麩菱、芝翫糖、銘酒につる菱、麩の聲、又ハ芝翫丈の舞扇、(21)日の丸の鉄扇なら平の町壱丁目末廣師麩卯と御尋被<sup>レ</sup>下、多少ニ限らず御用被<sup>レ</sup>仰付<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下升ふ。ハルロ エ、横着ものめが、いつやらハ芝翫といひ分しとじやないかい。本ヤ 其義ハ納や町の親旦那かあいさつにて相済ました。右商内物の所書などハ芝翫ヒイキ年代記大成ニ委敷記シムリ升から、御む御覽被<sup>レ</sup>下升ふ。町<sup>ふ</sup> 有為轉變の世乃ならひとて、ヒイキ花実知時代の衆中にも故人に成れた。本ヤ サアそれ故此度改正致しました。ひいきの親玉西喜も過られ升たれと、出冊があれば入舟とやら上町の米や乃旦那、西喜ニ劣らぬひいきや<sup>レ</sup>けにムリ升。上<sup>工</sup> 去ル處にまたくえらひヒイキがある。去年乃春もかご細工から天王寺乃開帳と出かけられたと、道て誠ニいろのよひ芝翫茶色の蝶々を見付、手とりにして持て戻、けつかうな金網中へ入て、餌ヲ飼ふものを壺人付置、余所から見せて呉と招請すると、本願寺の御書さま見るよふな四五人警固して見せに行。なんと此やふナ金太郎ノ璃寛ヒイキには有まい。頭取 東西く、又々麩橋のヒイキ論になり升た。一向果しもムりませぬ。これ<sup>ら</sup>ハ芝翫丈の細評にかゝり升ふ。見巧者 豪傑トいふ位は申分のないよい号ハ、しくわん丈の藝風ハ小六と市紅を腹に持て、塩町政太夫にてせりふのいひ廻しを工夫、遣し文三乃あやつりをよふ飲込んでせらる<sup>る</sup>故、人形もよくつかひ、上るりも悟られ。南<sup>々</sup> 上るり三味せんでも、歌三味せんでも、琴でもゆけば、鞍弓ハどふか知らぬが、揚弓ハえらいと早嶋の親仁さんもおつしやつてじや。俳人 狂哥は東武の(22)蜀山人寝惚先生の弟子と成て、登保斗とやらいふ表とくじやけな。俳諧も大ぶんに出来、手跡も又悟からず「諸方から扇面、短冊などに、自筆乃發句、狂哥を所望せられ、毎日くしようにも氣根によふ書てやられ升。わる口 しかし葉見せ乃年玉に、画讚乃扇子を添られるハチト安賣過るじやないか。南<sup>々</sup> 芝翫丈ハ安賣の御家故、狂言も初日から場数をたつふりと見せらる<sup>る</sup>。諸式直下の時節な 御上乃御意に叶ふといふ物じや。ヒイキ 英一蝶乃画風をならわせ、画も大分書とハ扱々器用なお人。俳人 英乃画風ハはせを翁さへ学はれたとあるから、芝翫丈も風流く。ヒイキ 風流と言イ、當世乃人氣をよくのミ込事もえらいものじやぞ。北<sup>々</sup> ゑらひかしらぬが、今度江戸下り芝居ちうニ、去ル北辺の大家の御子息が、ちとした訳で、かけ落とやら出走とやらなされた處か、余ほどの路用金を持ってゝ有た所が、江戸道中にて残らず遣イはたし、やうく壺両もつて東武へ着致され、四五日も逗留の中路用もなくして仕舞、殊ニ彼地ハ無縁ニて誰にかるものもなく、いろくとしんはいの處、折ふし芝翫丈江戸にて芝居中故、御子息もよくく<sup>く</sup>の事やら、風与ころ附「あほう成事ながら、大坂にて一度對面したれども、當時の氣質男氣を便りにあわれなるかな。むだ口 石どう丸爺を尋て高野へのほる。頭取 東西く<sup>く</sup>。北<sup>々</sup> 直々に御子息が芝翫丈の旅宅へ参られ、案内して取次のものへ内用のおもむきを

頼れた處が、芝翫子一向不<sup>レ</sup>逢に、取次にて段々の断いわれたとやら、夫で無<sup>レ</sup>據御きのどくな  
がら、道中二日路程ろぎんなしに出られたとサ。ソコで浪花の家内ハ大さうどう、獨りむすこ乃  
家出故、手代、別家中、上下とも手わけしてさがしニ出た。東武方へ尋に出た人が、よふく江戶  
入口にて御子息三逢、其まゝ返し籠にて大坂へ帰着致されましたとの噂じや。<sup>むだ口</sup> それしき  
の事にながくとたいくつしたわい。早ふ芝翫の評をしたがよい。<sup>北</sup> 夫三付此度芝翫丈帰坂の  
節顔見せに、まへに申御子息より、江戸表にて無心を言ふたとき段々の断尤の事、定めて其身を  
ひげしての断とおもふたとて、當大坂へ御帰りの後顔見せ積ものせんと、名古屋御領分鳴海瀉に  
て恨之介地のちりめん、白上りの千羽鶴の絞り「引替しわた入三十と富士見原の織屋にて、何  
やらおもわくの大巾のぼりを織せ、つ見ものせうと申された所が、別家中其外く々さし留られ  
たげな。<sup>皆</sup> 其積物はどふしたのじや。おしい物じやナア。<sup>北</sup> そのしゆゑものを御子息  
焼捨たとやら、なくしたとやらいふ噂で有た。當時人氣をよくとる芝翫丈なれども、大躰無心  
ゆふ人柄でもしれそふなものじや。どふやらちとおかしふおもわれるテ。<sup>頭取</sup> そこが何ぞの間  
違でハムり升ふ。どふて江戸芝居中には大立ものじや故、無心に来る人も多ふムり升ふ。夫に  
一々相手になり、無心を聞ふならたまる事ハムり升せぬ。逢ぬといふ爰の事、取次衆がふてう法  
でムり升。<sup>皆</sup> これハ尤じや。しかし御子息さまハ御なんぎで有たで有ふ。サアく早ふ跡評く。  
<sup>ヒイキ</sup> なんでも子エ事でひまか入た。こちらの親玉ハ狂言の作も出来、ふり付も巧者なり。何から  
何迄頓与抜目のないぞ。<sup>南</sup> 狂言斗りじやない。近頃ハ足迄が達者になられ、今度の帰国ハ難  
波新地乃文里さんと同道にて、駕籠にも乗らず帰られたとの事。<sup>芝</sup> 道中でハ市兵衛  
と「変名して、柳ごうりかたげて下男と成り、江戸出立の砌りより、顔にハ紅粉から塗て色を黒  
ふ見せ、素人になりて戻られたとの事。<sup>江戸者</sup> 江戸登りや名古屋戻りの役者が、からだに彫  
物書たりする事も、後にハ手を見らるゝで有ふ。<sup>芝</sup> いつも通し駕籠乃芝翫丈か其様に歩行  
て戻られた故、双蝶々に米屋場の立廻りきつう足の悪イ様子で有た。今度の乗込ミも、先年のや  
うにばづむで有ふと楽しんで居たに、乗込かなふて残り多イ。<sup>ヒイキ</sup> イヤ又先年の乗込にハ手打  
連中ハ勿論、道とん堀のいえ中藝者店いろくの趣向ヲはづまし、其うへ守り連中じやの<sup>駒</sup>連中  
のと群れくから我へとちよつた事故、あのよふな乗込ハ道頓堀初つてからない事じや。<sup>老人</sup>  
イヤそふもいえぬ。尾上菊五郎が江戸から登つたときの乗込、けしからぬ事で有たが、此親仁か  
口で斗りいふてハ、今の若イ衆ハ、エ、何ゆふやら、よい口ナ事と誠にやせまい。どれくといひく、  
懐中右梅幸集一冊取出し、皆の衆これ見やしやれト本を開。

●安永三年、大阪へ三十三式年ぶり、十月廿六日の乗込の勢ひ花々敷、川舟乃鋸りも艤おび  
たしく、牽頭并二所の若ひ者」も別舟にて出迎ひ、向ひ出る舟ハ前以て言ひ合せ、船幕乃染立艦



にハ吹貫幟などかざり立て、はやしものして賑ひしに、船陸とも人群集、いふも更也。此後大坂乗込の迎ひ船は凡幕幟なども用ひて、是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし。○

ナント其ころも多らかつたと見やうかな。**若手** エ、とかく年よりといふものハ。イヤまへの吉右衛

門ハ一生尻からけた事がないの、やつしなら彦四郎の事じやなど、四五十年も昔の事をいふ。今言たとして間に合ぬ。**ヒイキ** 乗込ミハ梅幸かえらかつたにもせよ、芝翫丈か太左衛門橋すじ八ま

ん筋の角屋敷を買ふて立派な普請も成就して、文化十四年正月八日に店開き、人参百奇圓并加賀の銘産御所落、買人ハ誠ニ門前に市をなしたわいな。**南** 文化十年の秋心齋ばしすじ

①太屋のむかへ芝翫香のびん付屋の店出しもえらかつた。**頭取** 役者衆中軒を並ぶる嶋の内とは申せ共、町方の内儀達、娘、下女に至迄、かゝ屋と岡嶋屋の内をわさく見に廻られ升。」

**モサ引** 三井の呉服だな、虎屋のまんぢう、南御堂に新町のあげや、砂場の和泉屋、あみだ池見物する田舎道者も、かゝ屋と岡しま屋の内を覗いていなね、国元へ土産にならぬとの事。**わる組**

かゝやの店見たら、国へのみやげにも成ふか、岡しまやの新屋敷の見沢店見るやうに、堺格子乃入た古風ナ表付、役者の内とハと見へぬ。**南** 芝翫丈ハ何ても人に見せる事がきつい好ゆへ、

惣稽古でも、初午芝翫でも、町方から我へト見に来るやうにしたハ、此お人から初めたやうなものじや。其うへぶたいの狂言でも声の懸るを悦び、おとなしい見物斗乃日ハと聲か懸らぬと淋

し□られ升。**立花組** (23) りくわん丈の芝居は女子の見物か多ひによつて音なく、芝翫の見物ハ男が多ゆへ場かやかましいわい。**古美者** 元祖風小六ハ、初日に見物の誉た所ハ抜き、又二日目に誉

ル所ハぬきして、幕を引てから嶋伊面白かつたと感ずるやうに致されしハ、これ見ざめのせぬ工夫、又上るり大夫有幡大和は、度々見物の誉る日あれば、床よりおりて腹を立、不作法ナ見物じ

やといわれたけなど、此様ナ事いふと、又お若イニ嫌われるで有ふ。**頭取** 芝翫丈の細評ハまださまく珍説もムり升れど、長居ハ却て御退屈、京扇屋の玉之介丈、江戸表よりつれ帰られし駒

之介丈、いつれ劣らぬ大建者の茅生、芝翫丈ハよいお息を持ってムり升。**玉ヒイキ** こちの玉さんハ、きりやうと言、藝といひ、殊ニすぐれて所作景事のやわらかさ。**駒ヒイキ** ソリヤ同じ事、景

事所作ハしる通り地藝にはしき事、殊ニ親玉によく似た氣質、地藝の息込イキせんだんハ二葉よりかんばしと、いかな大舞臺をも苦にせぬ氣質、さきへくと進イいきほひが見へて有ぞく。**玉ヒイキ**

ヤレこちのく。もふ芝翫丈璃寛丈の跡に並ぶ役者衆もあるまいとあんじて見たかひ有て、俳優乃家ハまつく繁昌、やがて親玉ニ劣らず名をも世界ニあぐるて有ふ。**玉連** さしづめこちの玉さん

が親玉の跡つきく。**駒連** イヤく大たんの気性ハさしづめ駒さんと極ツタく。**頭取** ア、申々これ又どふした事でムり升。御子息達乃評判ハヒイキ連中の氣質ハ「近日評を催し升ふ。**橋組**

早ふ岡じま屋の評を初めさつしやれく。

正風 園 (24) 嵐吉三郎

**借者** いかしま璃寛子に正風の号を冠らしめた八理の當惑、夫二付吉といふ文字の有かたき事を演舌仕らふ。吉の字は字数三方二千餘字とて、京乃三十三間堂乃佛の数より多ひ、中にて吉の字を最上の文字といひ、易道にても元吉と置きておもき事也、人倫の品々様々有といへとも、士といふもの上中下へ通達して、人倫の本道を得たるもの。 **待** 成程待たるもの、口より出す一言に、よからぬ事ハ一ツもない、それ故士の口と書て吉といふ文字に被<sup>レ</sup> 成たしやないか。 **頭取** 吉の字ハ有がたい文字なればこそ、評書位付にも上上吉に至るを役者衆中の手柄と致し升る。 **南** 吉の字ハ結構な筈じや。岡しまやの三吉香ハ五痔脱肛、ひゞ、霜はれに奇妙じや。 **藝者** 橘香敢ハ二日酔ニふり出して飲とよふき<sup>ク</sup> 升。 **女中連** 岡島練りつかふと、小倉屋の鬢附ハ遣われぬハイナ。 **仲居連** 小倉屋のひん附ハ嫌ひじやけれど、小倉染の縮めんの半多りにしても装束にしてもよいわいなア。 **④手代** サアそれ故大分仕入升がよふ賣れ升。 **④手代** 當春りくわんさま京上りニ付、彼地の御ひいき連中々、芝居の大幕と揃への手拭うこん色にふせん橘の紋てゝり升が、小倉の色昏の狂言故、三吉狐色とも、うこん橘ともてはやしまする。 **リクツ言** 小倉の狂言故三がい立花の紋を付よふなものじやニ、ふせん蝶ハ孚源氏の時、飛軽て初て用ひられた紋じや。

**手代** アリヤ平家の紋のふせん蝶に似せた物てゝり升。 **ほり** 其時から堀江の嶋にのりつね講といふて、藝子や、おやま茶屋、置屋のヒイキ連中が出來た。

**頭取** 其外北辺には璃寛連と申があられば、京都四条の川東に、橋組と申て鶴組に劣らぬヒイキか沢山にゝり升。 **南** 璃寛連々ハ

床刀の簾ミナいつとても立派ニして送られ升。其外棧敷かけの聯も淡路丁船場丁の清水さんの大きなお世話。 **ツルウ** ア、コレく清水さんくと伊介の事斗りいふて貰ふまい。今でこそ璃寛ヒイキ、芝

翫ヒイキとて連中の群々か出來たれと、其以前、ア、いつやらで有た トナオモヒ ヲ、それく、文化

四年の頃、璃寛丈に故障の事が有て暫らく道頓堀へ出勤なく、其後もめ事も済んだ角の芝居へ出られた其時ハ、からだわちゐさいが、此男がかたぬいで、ヒイキ連中いひ合、のほりを沢山に送りました事がある。其後芝翫丈へ数本の幟を立るやうにしたも、マアわしが元祖じや。 **ヒイキ** 芝翫丈に

もいろくの幟があれど、塩瀬の幟と市場の唐木綿の大幟ハ璃寛丈のいさほし、外ニ類なしじや。

**むた口** 其ひいきのつよい此大坂で、引ついて芝居を打テバよいに、芝翫丈ハとかく芝居をよくつゝけてさつしやるから木戸表方のよろこびじやといふ升。 **江戸** 最前芝翫の評のときもいふたが、一度も江戸へ下へらぬ璃寛のヒイキするほどふか芝翫の思わくもいなものだが、イヤおら斗りでもない。吉原のおいらん粧ひも、璃寛の噂を聞及び熊坂乃時かつら雉といふうたを送り、大坂でも其替歌を拵へて、きつく流行たとある、これらが誠のヒイキといふものた。 **ヒイキ** ソリヤなんぼニ芝翫が

ゑらひといふても、江戸へも行ず唯一トすじの藝を立通し、生立の大立者大哥舞妓の役者ハ此人だ。夫に當時のかゞやト一口にいわれぬわい。〔江戸〕何馬鹿やろらめ、生立の大哥舞妓など太平楽をいやがる。其大立者が今生立のめい上りの鶴さんとかたせを競て、何のかのといやげいぶんだとおもつていやがるか。藝道修行乃為た。大芝居小芝居の頓着ハし子エ。今のいきほいを見ろ。あまり廣言はきやがると還つて立花のふげいぶんだヨ。エ、かげんにちよつくばつて居ろ。

〔京より〕あの人さんがたはちまきでやいと人じゃそふな。〔江戸〕何はちまきでやいだ。とんだ事をぬかしやがる。芝居ハ何とおもつて居やがる。陽氣の為だゾ。夫にエ、衆様だのと音なく淋しくして人躰がつて居りやエ、かとおもつてあきれラア。閑情を好やろう等ハ奥山這入て抹香のかざでもくらつたがエ。〔頭取〕是ハけしからぬ。おまちなされ升。〔うかもれん〕かつらをの哥ハ陽氣でよかつた。

アダタ

見ぬ恋に イキタコがれ 浪花の花山あらし」

スキタ

ト諷ふ。〔若手〕エ、やかましいわい。りくわんが熊坂ハ京大坂で大當りじや。〔芝い好〕中の芝居の熊坂の看板ハ嶋の内の八まんへ絵馬に奉納、娘かけきよの看板ハ天王寺新清水へ奉納して、岡嶋氏と記してある。〔京〕猿廻しの絵馬ハ京の清水へ奉納して有る。〔芝居好〕其さる廻しで思ひ出した。

岡嶋屋のは次分ハ幾度見ても飽ハない。有田唄の声のよさ、  
おさるめでたや 目出たやな

〔樂ヤシリ〕イヤそれ斗りじやナイ。ツイちよつと端シリヤ長歌諷われてもよい声じや。アノ声が〔25〕鈴木左橋にやりたい。〔ヲダテ〕イヤ左きつハ声々酒飲して貰ふ方がよからう。〔ヒイキ〕芝翫斗り狂

哥や發句が出来るじやない。岡嶋やも面白ひ事じや。前かた紀州行屋宮内乃道の記ハ摺ものが出たわい。〔板木ヤ〕夫ハ〔26〕故璃環丈の卅三回忌の摺ものハ仰山でよかつた。〔本ヤ〕イヤまた夫々仰山ハ其佛事ニ松屋町の本利からの進もつ、釣臺いつぱいの紙袋へ極上々の日向椎茸入て、看板着た男に荷なわせ、心齋ばし筋を練り「物乃やうにして通つたもおかしかつた。〔北五〕いか様本利

といふ男も、大の璃寛信仰で、尾張ミやげの矢立に小刀からのり入の仕込たを、璃寛好じやとて諸方へ見せ歩行れた。〔本ヤ〕今でハ心齋橋の詰に矢立店が三四軒も出来、本利カ璃寛好じやといふた矢立カ沢山に仕入て有ル。〔ハルロ〕りくわん好乃菜籠ハチト役者にハ似合ぬ事、どふか當振舞に往て、硯ぶたたや鉢の有(肴カ)を持って戻るゝかと思われる。〔頭取〕成ほどそふ思召も道理、ソリヤはまやき迄むしつて戻る役者衆もムれ、大建ものゝ世界にてハとんとな事、璃寛丈の好は菜籠でハムり升ぬ。マアちよつとした獨り前の弁當、または菓子入、腰へさし込ムすつぽんも拵てム

り升。其時の酒の肴入ル積り、それを菜籠じやといひ出したへえらい間違じや。**北より** 其菓子入で思ひ出したて、人の見る前でほりく、喰て居るへ扱々不躰ナ事しや。**女中連** 璃寛さん乃内の

咄し聞ふと楽しんで待て居るのに、何じややらすつほんじやの菜籠のと、あけくの果にはヨウさらへ講て見る面白イ鬚の鶴ウとやらいふ人が、菓子「喰ふのが璃寛様の評かへ、わたしらへそんな事聞にや来ませぬわいな。」**皆く** コリヤそふ有そふナ物じや。**ヒイキ** 頭取早ふ岡嶋屋の評ハどぶじや。

**頭取** 成ほと何れも様の御待兼も御尤、璃寛丈ハ生得律儀篤実なる氣質故、諸方のヒイキも強く自然と備る人徳有て、北辺乃旦那様は申及はず、京都、名古屋、其外のヒイキくより送るゝ進物、誠二山海珍ぶつに飽満チ、名月に椿を見る話斗、歓楽の身分といへとも、其身は質朴を専一とし、朝ハ未明に家内の下ぬうちに庭のしつくい場を洗ふたり、諸方から来た進物に懸た水引を湯のしして亦々餘處への進物に懸られ升が、コリヤしゆミでハムリ升ぬ。世界の冥加を思ふて致され升事でムリ升。**清水** さ様く其内水引と申物ハ随分大せつに致されるがよいて、我等の旦那先キ米屋の某ハなまこ袴の久三つれた身からても、途中に水引か一筋おちてあつても拾ふて袂へ入られ升か、則これと同日の論とヒイキ口でいふのじやない。ちやらなし大しんじつてムリ升。**ムタロ** 朝ハ未明におきるといふたまゝの事か、二日酔して芝居の始りのおそぬい事ハ度々の事じや。芝翫丈の評場でもいふ通りじや。**楽やシリ** りくわん丈ハ内に居らるゝときも、又楽屋入致さるゝにも、けつかうな数珠を片時も離さず首にかけて居らるゝを、えらい有かたやじやと人ハおもふか、岡じまやの心ハ又格別な物じや。家内の召つかひ下男も下女も、どふて役者の内へ奉公三来るもの故、マア面白いの浮気が多く、口入屋でもわたしや岡嶋屋へ往て見たい。給銀ハ何ぼふても大事な。

璃寛様の顔を毎日傍で見たいなどいふて来る程の者ゆへ、篤実ていねいな親方の氣二入ふ管もなしと有て、強ふ呵ツたり、かす喰したら、出替り時にも成らぬ先きに飛で出て、ぶたいと地とへえらい違ひじやとわんざんいわるゝがいやさに、何事も見て見ぬふり、いゝたぬ事もいふまいとて、首にかけられた堪忍の数珠を守ると言地口でムリ升。**筆者曰** ぶたいと地とえらひ違ひじやとハ余におこがましい。よしにしてもらひたい。**南** 岡嶋屋ハふたいの狂言斗りじやない。内にさへ通さぬ場として、「芝居の懸合に来る人通るべからずと張紙出して有にハ、芝居方が困るわい。

**頭取** 其儀は近來多病にて、始終りうゐんにて胸がつかへ、または背が痛など致ス故でムリ升ス、

**皆々** 舞は千代ませ千代ませと 栄へる宿こそ目出度けれ、

文政三辰年 正月吉日 作者 五文舎一笑

- (1) 摂陽奇観四六巻 文政二年十月の項に、「此頃 紅毛渡り更紗目鏡流行」、説明に「大坂にて贗物多く製ス」
- (2) 摂陽奇観四六巻 文政二年七月「當世見聞謎づくし」：順慶町の坐禪豆「同四五巻 「世上流行 座禪豆店」
- (3) 役者世世の接木 「此人二代の内に女千人の願を聖天宮へかけしおうせし人なり」
- (4) 摂陽奇観四六巻 「文政二年二月 天王寺開帳二付大坂市中より寄附物夥しく種々の趣向あり此節蝶々くといひてうかるゝ事大ひに流行ス別而道頓堀大かぶきちう芝居の役者花美に立出これを又見んとて見物群集ス」 歌舞伎年表 「文政二年二月 役者天王寺へ蝶々くといひて、うかれ行。」
- (5) 歌舞伎年表 「大芝居 中芝居 子供芝居 役者内儀見立相撲」(文化八年) 「行司 二左衛門 いま」
- (6) 役者世世の接木 初代市川団十郎は、宝永元年春市村座の舞台で生島半六により刺殺される
- (7) 摂陽奇観四六巻 「文政三年正月西高津新地三丁目小島屋専助かしや堺屋力松同居歌舞妓役者片岡松江孝心に付御ほうび鳥目三貫文被夢下置務」
- (8) 摂陽奇観四六巻 文政二年五月 西高津新地九丁目大野屋善右衛門かしや 高津屋太七同居かぶき役者百村紋九郎 當卯三十六歳 祖母 妙清 當卯百二歳 手當米十俵被夢下置務候(編者曰ク原本此ノ所老行空白) 「文政二年七月 當世見聞謎づくし 百村門九郎の祖母さん…百よりうへじや」
- (9) 役者世世の接木 「辞世 けふも夢寝ても起てもゆめの夢 ゆめに夢見る夢の世の中 三代目市紅 門人市川市藏爾後に元祖蝦十郎師恩を思ひ千日竹林寺に石碑を営む事奇特千萬也又俵團三郎團之介の兩人は江戸出勤ゆへ兄團之介は叶わざる事有てしばらく延引なれど弟團三郎は取ものも取あえず上阪為て追福の當怠りなく遊行寺に辞世を彫刻して石碑を建る」 摂陽奇観四四巻 文化五戊辰十月九日 「市川團藏死…：釈了西下寺町遊行寺ニ墓あり千日竹林寺にもあり けふも夢寝てもおきても夢の夢夢の夢見る夢の世の中」
- (10) 歌舞伎年表 文政二年正月 大阪(角) 『錦の蔦かづら』傘の一本足(三五郎) 三五郎角にて傘の一本足／ 摂陽奇観四六巻 「文政二年七月 當世見聞謎づくし… 来芝の景事…：足一本で當つた」
- (11) 摂陽奇観四六巻 文政二年十二月 「嵐三五郎大西芝居へ出勤…：給金正月分七拾兩前金五十兩二月の手付 三拾兩都合百五十兩請取出勤尤蔵衣装也」
- (12) 摂陽奇観四五巻 「文化年間 牽牛花流行 文化七八年の頃より雅俗となく牽牛花を翫ふ事盛んに成行寛永の大菊元祿の百椿近くは寛政の橘に百倍ス…：文化十四年丑ノ秋 浪花牽牛花珍藏家品目」等／
- (13) 玉つくし 文化十三年子の夏大新板(一枚摺) 「すまふ好 浅尾奥山 中村哥七」
- (14) 土卵先生 富土卵(一七五九〜一八一九) 狼狽窟主人 従五位に叙された公家、東山在住、俳人、大衆文化に対して広範な興味と深い関わりあいを持ち、役者評判記や戯作を著し、俳諧、狂歌のサークルでも活躍。歌舞伎役者の最頂であり、璃寛等の俳諧の師匠でもあった。
- (15) 摂陽奇観四六巻 文政二年七月 「當世見聞謎づくし…：籠細工の釈迦」 摂陽奇観四五巻文化
- (16) 三代目中村歌衛門 安永七(七七八)〜天保九(一八三八) 本名大関市兵衛 俳名芝翫・梅玉 別号百戲園 狂言作者名金澤竜玉 屋号加賀屋 実父(初代中村歌衛門)は、「容貌の醜くかりしたため」役者にする事を望まなかつたと三世中村仲藏の随筆に見える。父親に内証で出演した子ども芝居での人氣が契機となつて役者の道を歩む。この時期「首振」芝居で人形遣いの名手文三郎の薫陶を受ける。十六歳で大芝居へ出勤。体矮小で容貌も甚だ上がらず、口跡もまたしゃがれ声で、時として含み声であつたというが、弁舌が極めてやかであつたことから、「歌右衛門は男前は悪いが、芸が上手」をいわれ、先輩で容貌にすぐれた二代目嵐吉三郎(璃寛)や江戸の

三代目坂東三津五郎と覇を競った。あらゆるタイプの役柄をこなし、地芸・所作のいずれにおいても七変化を演じ、元禄以来の一人一役柄の粹をひろげ、「兼ネル」の称を受けた。又師としてすぐれ、多くの若手役者を成功に導いた。教養層にも多数の最頂を持ち、彼を賞賛する本・摺物・画帖などが作られた。

(17) 妙妙戯談 「先年加茂の翁より吉野貴氏の脚色帖中へ送られし狂哥に 天台の止観へ四明中村の芝翫へ芝居加賀屋かしける」

(18) 手前味噌 「歌右衛門の伝」／『歌舞伎年表』文化五年五月五日より中村座「二本桜」の項「文化見聞集」収録

(19) 歌舞伎年表 文化五年 九月 大阪(中) 『舞扇南柯話』南柯夢『六馬琴の作を直す』十一月「大阪(中)かほみせ』嶋巡月弓張』…馬琴述、北斎画の摺物出来る。江戸本所松坂二丁目平林庄五郎版…余が初著述の稗本「弓張月」に据て、浪速中の芝居の顔見世、今年茲仲冬十三日より、新に場をひらくとて聞えしに贈るとて、かつしかの翁の画るまゝに、書肆平林堂の需に応じて、曲亭馬琴の部並書」／『瑠寛花橋』に、文化五年(中)『舞扇南柯話』赤根半七・丹波市『嶋巡弓月』張『鎮西八郎、文化七年・十一年』舞扇南柯話』と記載

(20) 撰陽奇観四五巻 「子のとし春大新ばん 芝翫離寛はやり物見立勝負附」／「最頂芝翫年代記大成」玉つくし文化十三年子の夏大新板」(一枚摺)に芝翫にちなんだ商品収載

(21) 中村歌右衛門  
故郷へはれの錦面姿 下巻 七変化の所作「その時につかふた扇はわざくその大坂へあつらへにおこし 平野町の鶴卯といふ末広師がこしらえたので斬り升」／撰陽奇観四五巻 文化十一年「今年 日の丸鉄扇流行 これは當春中の芝居三而中村歌右衛門…用ひしゆへ男子は勿論遊里の婦人等迄専ら日の丸の扇子をつかふ」

(22) 『梅玉余響』天保九年猿笠著に、「狂歌は蜀山人にとひしが浪花にかへりてより鶴廼屋翁または六々大人に随ふてまなぶ」蜀山人は三津五郎の最頂で、初めは歌右衛門を嫌い、文化八年翫柳主人宛書状に、歌右衛門を「上手なれども江戸者の風上に可置ものに無之…上方役者、上方儒者、皆々大嫌いに候也」けしからぬ不作のげけもの見物」(歌舞伎年表)としている。坂東三津五郎と二人奴上演の際、芝翫を始めて見物にきた蜀山人の座敷へ挨拶に行き、「大和屋と加賀屋と二人奴らさ…この句を貰う。以後蜀山人は芝翫の最頂となった。

(23) 歌右衛門錦絵姿 「岡嶋屋を最頂するは、多く女が勝ちます。歌右衛門は不男ゆえ、娘や内義はさほどには思いませぬども、狂言の仕打に巧者面白味を見ようなら、なかなか嵐吉と一口にはいわれませぬ」

(24) 二世嵐吉三郎 明和六年(二七六九)〜文政四年(一八二二) 岡島屋離寛 初世の実子、長男の嵐猪三郎を置いて二世を襲名。二二歳で大劇場に出勤。終生立役を専門とする。『役者世々の接木』に「近來か程まで揃たる役を見ず。第一美男にて、其の上美形にて、上品で、まづ近世の稀人なり」と評される。文政四年甥大三郎に璃寛の名を譲り橘三郎と改称するが、間もなく死亡。舞台が綺麗で女性に人気があった吉三郎と、凝り性の演技派で玄人好みのする歌右衛門との不仲は有名で、『芝翫隨筆』『撰陽奇観』には、吉三郎の歌右衛門に関する訴状(芝寛最頂の戯作ともいう)が収載されている。後年最頂連中が仲介し二人を和解させ同座が実現する運びとなったが、吉三郎が急逝し実現しなかった。

(25) 歌舞伎年表 「文政元年正月(中)…長唄 鈴木左橋」／「文化三年七月(角)…長歌 鈴木左吉」等

(26) 文化九年十二月 佐藤益之絵 日英交流大坂歌舞伎展(大阪歴史博物館 二〇〇五刊) 一五二頁

参考文献・関連資料 近世の出版物における○内の数字は中之島図書館の請求記号

- 『保古帖』<sup>書影</sup>「芝翫年代記大成」「芝翫ひいき道中記」「芝翫国一覽」「玉つくし」等一枚摺(甲雑六八)
- 『役者風俗三國志』別書名役者三國志 花笠文京編 天保二年 大坂 河内屋太助等四書肆刊(九七二/八)
- 『中村歌右衛門 故郷へはれの錦画姿』八文舎自笑著浪華 河内屋太助 文化九年刊(九七一/七〇) 朝日九七一/一四
- 『俳優世々の接木』別書名<sup>三都</sup>俳優世代の接木 俳優堂夢遊著 文政十一刊(九七一/一三) 朝日九七一/三三(安政六刊)
- 『梅玉余響』猿笠翁編 大坂 河内屋太助 天保一〇年刊(九七二/一三二)
- 『加賀屋 芝翫栗毛』浜松歌国編 大坂 河内屋太助 文化十一年刊(二五五・八/一六) 朝日二五五・八/六
- 『道中記 芝翫帖』芝翫帖 浜松歌国編 狂画堂芦州模 文金堂 文化十一年(九七一/六二) 朝日九七一/六〇
- 『滑稽道中雲助噺』滑稽道中雲助噺 大阪 河内屋太助刊(二五五・八/二八)
- 『滑稽 花競二卷噺』天保五刊(二五五・九/五〇)・璃寛花競 文化十一年刊(二五五・九/一〇・七六)
- 『芝翫節用百戲通』曉鐘成編 狂画堂蘆州画 文化十二年刊(九七一/五〇) 朝日九七一/一六
- 『芝翫百人一首玉文庫』曉鐘成作・画 大阪 河内屋太助 文政二年刊(朝日九七一/一七)
- 『芝翫隨筆』写(甲和三四二)
- 『芝翫隨筆』滑稽文人著 写二篇(朝日九七一/三二) 下卷欠)
- 『四天王大坂入』八文字屋自笑著 江戸 鶴屋金助等 文化十二年刊(九七一/一〇二) 朝日九七一/一五
- 『浪花土産初物語』式亭三馬著 するがや半兵衛 文化五年板(朝日九七一/二五)
- 『中村芝翫 返咲浪華の裡梅』二世立川焉馬著 歌川歌國画 西村屋與八等 天保四刊(朝日九七一/十二)
- 『中村芝翫 吾妻土産 妙妙戲談』南地亭金楽著 丁子屋平兵衛等 天保五年刊(朝日九七一/三一) 〇四一/三二六
- 『東都別 劇場訓蒙図彙』式亭三馬作 上総屋忠介助 文化三年刊(九七一/八二)
- 『中山由男一代狂言録』不二某編 天明二年刊(九七一/一〇)
- 『慶子画譜附録出世目録』八文字屋自笑編 大阪 泉屋卯兵衛 天明六年刊(九二一/六六)
- 『玉の光』別書名嵐小六一代記余祿 八文字屋自笑著 八文字屋八左衛門 寛政八年刊(九七一/七二)
- 『来芝一代記』浪華 綿屋喜兵衛 寛政九年刊(二五五・四/一〇)
- 『桐の嶋台』八文字屋自笑著 八文字屋八左衛門 寛政九年刊(九七一/九八)
- 『嵐小録過去物語』螭螂軒魚丸著 耳鳥齋画 浪華 綿屋喜兵衛 寛政九年刊(九七一/一六六)
- 『璃寛花橋』梨園山人著 (文化十三年)写(九七一/一六二)
- 不夜庵五雲編「梅幸集」上方藝文叢刊四卷 上方芸文叢刊刊行会 一九七九年刊
- 三代目中村仲蔵著 郡司正勝校注「手前味噌」青蛙房 昭和四四年刊
- 伊原敏郎著「近世日本演劇史」早稲田大学出版部 大正二年刊
- 河竹繁俊著「歌舞伎名優伝」修道社 昭和三年刊
- 伊原敏郎著「歌舞伎年表」五・六卷 岩波書店 昭和四八年刊
- 松平進著「上方浮世絵の再発見」講談社 一九九九刊
- 浜松歌国著 船越政一郎編・校訂「撰陽奇観」四五・四六卷「浪速叢書」五・六卷 浪速叢書刊行会 昭和三年刊
- 『日英交流大坂歌舞伎展』大阪歴史博物館 二〇〇五刊
- 藤井高尚・中村歌右衛門著 森銑三・北川博邦編「落葉の下草」日本隨筆大成「続九 吉川弘文館 一九八〇刊

早稲田大学演劇博物館編・刊』上方歌舞伎資料展―三代目歌右衛門の周辺』一九九六年刊

おわりに

大阪府立中之島図書館は、「正平版論語」を始め、町方文書、近世の出版史研究に欠かせない「大坂本屋仲間記録」等、近世の資料を所蔵、一般の閲覧に供している。また、そうした資料を広く利用して頂くために、「大坂本屋仲間記録」「遊遊従之」の出版、紀要への投稿等を通じて紹介してきた。

今回の「役者更紗目鏡」については、中之島図書館での講演会に関連して、荻田清氏にご教示頂いたのが始まりで勉強のために翻刻をしたものであるが、昨秋の大阪歴史博物館による「日英交流大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化」の開催、上方演劇界を代表する名跡「坂田藤十郎」(三代目)の襲名等、中村歌右衛門関係の催しが続いた事もあり紹介することとした。



## 福澤諭吉『覚』についての考察

諭吉と同時代に生きた肥後熊本藩隊長山川龜三郎

稲垣 房子（中之島図書館）

この度、大阪府立中之島図書館に左記の資料を寄贈するにあたり、この資料とそれに関する人物について述べてみたい。

### 覚

一金式拾五両也

右は千八百六十七年式英兵

練法翻訳料百式拾五両

之内金として前書之高

髓二請取申候 当年中

訳書出来候丈ケ七八拾枚

差上、尚又来正月二十日頃

七八拾枚差上可申、金子之義

ハ其都々御遣し可被下候

以上

十二月廿三日 福澤諭吉

\*三箇所「福澤諭吉」角印の押印あり。



このちいさな（二八cm×一六cm）書付は筆者の実父山川信夫が持っていたものである。所有していた信夫も他界し、そのままにしておくのも良くないと、若干の調査をした。山川信夫（一九九四年没）は熊本県上益城郡益城町安永の出身で、生前から「福澤諭吉の書付がある。」と言っていた。信夫の書き残したものの等から調査したものである。

## 第一章 福澤諭吉『覚』から考察したこと

### 福澤諭吉の真筆であるか？

確かに「福澤諭吉」とは読めるがほんのちいさな一枚の書付であり、虫喰いもあり、保存状態はよくない。福澤諭吉の残された他書簡等と比較してもから筆遣いは福澤のものと思われる。

### 何年の書付か？

「十二月廿三日」という日付は何年のことであろうか？年末から年明にかけて翻訳の作業が進んでいることを記述している。「千八百六十七年式」とあるので、当然その後であるが、一八六七年はすなわち慶応三年一月に、福澤諭吉は幕府の軍艦受取委員の随員・通訳として二回目の渡米を果たし、六月に帰朝、多額の資金を用意し多くの書籍を買ってきている。帰国の七月には渡米中の摩擦が嵩じて謹慎を命ぜられ、塾の教科書用と仙台藩と紀州藩のために大量に購入してきた洋書が、神奈川奉行のもとで差し押さえられたが、十月には謹慎処分は解除となり、荷物も年が明けた一八六八年には新銭座の塾に引き取られた。四月には諭吉が新銭座の英学塾を「慶應義塾」と名づけ、塾経営と翻訳・著述に専念した年である。その九月八日に明治と改元された。

後に述べる熊本藩の状況、新政府兵部省などの時代背景から見ると一八六七年から一八七〇年までの間と考えられる。

### ◇「千八百六十七年式英兵練法」とはどの翻訳書のことか？

この『覚』に記されている「千八百六十七年式英兵練法」が翻訳作業は諭吉が訳したのではなく、事務的に請け負ったものと考えられる。

福澤が翻訳を請け負っていたことについては、『福澤諭吉書簡集』第一巻(岩波書店、二〇〇一年)の巻末にある「英字新聞の翻訳」(三七五頁)というコラムにも書かれている。

中津藩の小幡篤次郎(中略)ら六名を呼び寄せて塾生としたのは、元治元(一八六四)年のことであった。新聞の翻訳はこれらの塾生を養うための金策のひとつであったという。それは福澤にとつての洋学塾経営の必要と、諸藩にとつての情報収集の必要との間に始まったことになる。

翻訳原稿の筆写については、中津藩三輪光五郎の談話が残されている。

「多分横字新聞か雑誌の翻訳でせう、政治経済兵器等に関する翻訳の原稿を、一月何回か十冊ばかり、中津から来た学生が九人か十人で写しました。一冊は十行二十字詰で十五

六枚もありましたらう、これを急いで写すのですが、書いてある事柄はこれまで見たことも聞いた事もないことばかりですから、写すのにも手間が取れます。(中略)其十冊の写本を先生はどう処理されたか分かりませんが、浜町の熊本藩邸に居た国友某といふ人などは、其配布を受けたやうです。そして写字を命ぜられるのは、中津の学生に限っていました。」

また、翻訳料の相場は「五三山口良藏宛書簡慶応四年六月七日付」(一〇〇頁)では、訳書の種別によるページあたりの翻訳料を提示している。

一、兵書。窮理書。地理書。舎密書。新聞紙之類 十行二十字之訳書壹枚二付 代金壹両  
一 政治書。経済書。万国公法。兵制論等 都て議論文、同断二付 代金壹両三分

右之通何時ニても、日を限り無相違翻訳仕候」(『福澤諭吉書簡集』第一巻より)

「覚」によると翻訳料は百弍拾五両という大金であり、七八拾枚に分割しているという分量としてもある程度まとまった訳書と考えられる。金銭の管理は厳密であつた福澤が、一時金にも「覚」としたため押印したものであろう。

ちなみに、熊本藩からの依頼で翻訳をしたことは、会田倉吉著「福沢諭吉」(吉川弘文館 人物叢書新装版一六九頁)に記述がある。

「明治元年の入学(慶應義塾・筆者補記)者数は一〇三名、それから二年が二五八名、三年は三二六名というような勢いで、そのため同二年には、熊本藩から頼まれて翻訳した『洋兵明鑑』五冊何百部かの買い上げ代金六〇〇両で、二階建講堂一棟を増築したほか・・・」

問題の「千八百六十七年式英兵練法」が、この『洋兵明鑑』にあたるのかどうかは確認できてない。

他に『洋学史事典』日蘭学会編 (雄松堂出版 一九八四年刊)の記述を参考に以下の二書が候補として挙げられる。

「英国歩操新式」橋爪貫一訳 三巻五冊 明治元年(一八六八年)刊

原書は一八六二年の制定なるものを、スナイドル元込銃の採用によって一八六七年に改正した英国陸軍の歩兵操練書 Field Exercise and evolution of infantry. にあり、1. 生兵・小隊教練、2. 中隊教練、大隊教練からなる。

「英国歩兵練法」赤松小三郎訳 八冊 慶応元年(一八六五年)刊。

原書は Field Exercise and Evolution of Infantry. の一八六二年版を基に一八六四年を用いて補入している。内容は、1. 生兵・小隊、2. 中隊、3. 施条銃使用法、4.

同上、5・大隊、6・同上、7・大隊運動、8・軽歩兵兵で、他に一八六四年版を用いた慶応四年版があり、別に慶応三年（一八六七年）刊の『重訂英国歩練法』九冊があつて、横隊編と要用の諸件編が追加されている。

一八六七年式と明示しているところを見ると改訂版かと思われる。ところで、福澤は著作権に関して非常に厳格であつたので、右翻訳書であれば、翻訳者との関係はどのように考えるかも疑問が残る。

この翻訳書の特定は今後調査を続けたい。

福澤諭吉『覚』は誰宛に書かれたものか？

福澤諭吉『覚』は熊本藩士山川亀三郎（清房）に宛てて書かれたものと考えられる。

山川亀三郎は『覚』を所持していた、故山川信夫の祖父、つまり筆者の曾祖父にあたる。

亀三郎は幕末明治に肥後熊本（細川）藩の藩兵であり、陸軍の砲兵隊の技術はフランスの将校に学び、海軍の操艦術は英国士官に教わつたそうである。

山川信夫が父（正）から譲り受けたか、亀三郎が建てた熊本の屋敷（上益城郡益城町広安村字安永）を処分した時に保管したものと考えられる。

## 第二章 山川亀三郎（清房）について

福澤諭吉の生まれは太陰暦一八三四年一月二日生まれであるが、太陽暦でいうと一八三五年（天保五年）一月一〇日にあたる。先に考察した『覚』の受取人と考えられる山川亀三郎の生年は一八三五年といわれるので、ほぼ同年代となる。激動の幕末明治を同年代として生きてふたりのかわりが興味深い。慶応から明治に福澤諭吉とかわりがあつたと推察できる

山川亀三郎のことについて述べてみたい。

以下は山川亀三郎の孫にあたる山川信夫が生前、書き残した著書『山川家の人々』（昭和四五年 教育タイムス）からの引用である。

亀三郎（清房）の生い立ちと軍人としての

経歴

山川家はもと福島正則（広島藩）の家臣



で、七本槍で有名な賤ヶ岳の合戦の際、敵將三人を倒した。福島家が亡びた後、細川家の客分になり、熊本県上益城郡益城町広安村字安永に屋敷を賜り、現在も住民に「山川」と呼ばれる雑木林の一区画が残っている。

山川家の近代の中興の祖は山川清房である。彼は一八三五（天保四）年山川清簾（きよかど）の三男として安永に生まれた。母は津久礼の豪族鈴木家の出であるが、母が二子ある家の後添いに来たために、幼名亀三郎と呼ばれた。（中略）少年時代、熊本藩の塾生となってからは学力衆に秀で、居寮長に選ばれた。その後明治変革期の軍人として成績よく、賞与として金二千疋を戴いたという。浦賀に米艦が来た時、彼は二十歳で選抜されて、肥後藩兵として同地に出兵する際、お別れに津久礼の祖母を訪れた。祖母は畳の上には上げず、腰かけたままで出兵の祝杯をとらせ、「亀三郎は切れる刀をもっているか」とねんごろに尋ねたという。厳格の中にも愛情に満ちたこの賢明な外祖母は、古武士そのままの清房の人格形成に強い影響を与えているようである。

『山川家の人々』より

\* 肥後藩は一八五三（嘉永六）年のペリー来航から四日後の六月七日、幕府から相州（神奈川県）沿岸本牧の警備を命ぜられ、藩兵三〇〇名を派遣している。

『熊本県史 近代編第一巻』二六二頁より

肥後藩兵としてであるか、明治政府の軍人としてであるか、時代は不明であるが、陸軍の砲兵隊の技術はフランス将校に学び、海軍の操艦技術は英国仕官に教わったところである。英国の士官官から時計を買う時、金時計も銀時計も中の機械は同一であることを確かめて、銀時計を買い受け、長い間愛用していたが、遠州灘で肥後藩の軍艦が遭難し、彼は陸地に泳ぎついたが、長時間の遭難にも彼の所持する時計だけは狂わなかったと自慢していた。

『山川家の人々』より

\* 明治三一（八七〇）年二月、兵部省は各藩の常備兵員を定めた。これにもとづいて肥後藩は、「三月藩士強壯ノ者撰ンデ英式二倣（なら）ヒ常備兵二大隊（中略）予備兵一大隊砲兵二隊（中略）に編制」した。（中略）しかし、この英式常備兵は翌年秋の兵部省の兵制改革方針にもとづいて、仏式に変革されることになった。

『熊本県史 近代編第一巻』二六九頁より

清房は若い頃から、陸軍・海軍の兵術をフランス人、イギリス人について学んだだけ

に、外国語はできなかつたようだが、生活技術はヨーロッパ的なものを早くから身につけ、ぶどう酒を呑み、パンや牛肉を食し、紅茶・コーヒー・マーメイド・トマト等を用いていた。清房の人となりを最も端的に表現するものに、次のことがある。家には三丁のアメリカ製六連発拳銃があつた。屋敷は周辺より少し高く、ちよつと城郭を思わせる感じの地形で、家屋の四方の壁と戸袋には銃眼が作られてあつて、屋敷のどの方向から賊がうかがつても射撃ができるように用意されていた。更に、妻と小さい娘達にはアメリカ製六連発拳銃の射撃訓練をさせたそうで、近くにある自己所有の桑畑の土手に紙に書いた標的をつくり、手を取つて訓練させた。その往復には、暴発しても人に害を与えないために、娘達に、歩兵が小銃をかつぐ形で、短いピストルをかつがせて歩かせたそうである。

『山川家の人々』より

#### 山川亀三郎（清房）と堺事件

山川亀三郎が歴史のひとコマに登場する。幕末大坂の二堺事件である。堺事件と、その際、切腹を命じられた土佐藩士を護送した山川隊長のことを記録した文書は、三つある。一番古いのは、森鷗外の小説『堺事件』『新小説』第一九号第二卷（大正三年二月一日発行）である。これには山川亀三郎を亀太郎と記述している。次いで昭和一二年四月、宝文館刊の寺石正路著『明治元年土佐藩士泉州堺烈拳』（一二九頁）がある。三点目は徳富蘇峰の大著、「近世日本国民史」『明治天皇御宇史』第八冊（明治書院昭和一八年刊、七二頁）である。

堺事件とは一八六八（慶応四）年二月一五日、フランス軍艦デュプレー号水兵の堺市中狼藉により、堺を警護していた土佐藩兵がフランス兵一名を殺傷したものである。明治新政府はフランスの強硬な抗議により、土佐藩士二〇名に切腹を命じ、一週間後の二月二三日、泉州堺の妙国寺が切腹の場と決まった。同時に肥後熊本藩と安芸広島藩に、大阪長堀の土佐藩邸から、土佐藩烈士二〇名を、妙国寺まで護送することが命じられた。その後（細川）藩隊長が山川亀三郎であつた。

#### 森鷗外『堺事件』の記述より

先手は両藩の下役人数で、次に兵卒数人が続く。次は細川藩の留守居馬場彦左衛門、同藩の隊長山川亀太郎、浅野藩の重役渡邊競の三人である。陣笠小袴で馬に跨り、

持鎧を豎てさせている。次に兵卒数人が行く。次に大砲二門を挽かせて行く。次が二十挺の駕籠である。駕籠一挺毎に、装剣の銃を持った六人の兵が附く。二十挺の前後は、同じく装剣の銃を持った兵が百二十人囲んでいる。後押は銃を負った騎兵二騎である。次に両藩の高張提灯各十挺が行く。次に両藩士卒百数十人が行く。以上の行列の背後に少し距離を取って、土佐藩の重臣始め数百人が続く。長径凡そ五丁である。

長堀を出発して暫く進んでから、山川亀太郎が駕籠に就いて一人々々に挨拶して、箕浦の駕籠に戻ってこう云った。「狭い駕籠で、定めて窮屈でありましょう。其上長途の事ゆえ、簾を垂れた儘では、鬱陶しく思われるでありませう。簾を捲かせませうか」と云った。「ご厚意忝う存じます差構ない事なら、さやう願ひませう」と箕浦が答えた。それで駕籠の簾はすべて巻き上げられた。又暫く進むと、山川が一人々々の駕籠に就いて「茶菓の用意をしていますから、お望みの方に差上げたい。」と云った。

両藩の二十人に対する取扱は、万事非常に鄭重なものである。

寺石正路著『明治元年土佐藩土泉州堺烈挙』の記述より

高知県郷土史家寺石正路は昭和一〇年頃、堺事件を調べるうちに、切腹した藩士の遺品類が熊本県の山川家に残されていることを知ることとなり、肥後藩隊長山川亀三郎の娘婿山川正にその閲覧を申しでている。遺品や辞世の句等に接し、大いに感激、堺事件をまとめたその著作の巻頭に「烈士遺墨三葉」として、それらの写真を掲載している。

また、山川亀三郎の縁者徳富蘇峰と事実の確認をする書簡を交換している。同著の巻頭に徳富蘇峰の書簡が掲載されている。

#### 徳富蘇峰先生書簡

(前略)然るに尊著御引用相成候、山川亀太郎なるものは、老生長姉の夫にして、即ち老生の義兄に當り候、山川亀三郎なる者と存候、右は大正の初期春陽堂にて出版したる森鷗外君の著述にも亀太郎と有之、或はそれをご襲用相成候ものかと存候、熊本藩は山川亀太郎なる者無之、然も亀三郎なるものが當時の熊本兵の隊長に有之候、而して堺事件の土佐人士と関係ある次第は同人宅に左の書類等有之候間、何かの御参考に可相成と差出候、即ち竹内弥三郎君の辞世、大石甚吉君の辞世二点、川

合（ママ）銀太郎君の形見の絹の布片、右三種及その人名録差出候、且つ山川龜三郎なる者の身分を証明する為兵部省の辞令一通、熊本藩要人の口上書一通差出候。右の次第に就き、老生の如きも単に熊本県人であるばかりでなく、此事に若干の關係ある者の親類として、最も尊書に向て感謝措く能はざるものに候。勿々頓首  
昭和九年十二月初六

蘇峰迂生

寺石先生 玉机下

#### 土佐藩烈士の遺品

堺事件について、龜三郎（清房）は後年次のように述懐している。「彼らはけつして罪を犯した罪人ではない。国家のために一身をささげた国土である。元禄の昔、大石良雄以下の赤穂浪士が細川藩にお預けになった時の故事に習って、丁重に遇した。」と、死を決した烈士達も、山川隊長が指揮する肥後藩士の武士の情けには、十分の敬意を表した。藩士達は、筆・紙・墨を用意して、後日の記念に一筆願いたいと望むものが多く、心得のある烈士の多くが、快くこれに応じた。

山川家には六番隊士大石甚吉の辞世の和歌、八番隊士川谷銀太郎が紋服の小袖を刀で切って、行年、姓名を墨書した絹地、八番隊員竹内弥三郎の辞世の和歌などが保存されている。



君のため死<sup>て</sup> 魂は神となり

早く攘夷のなるを守らん

土藩 竹内弥三郎藤原栄久

山川家では、これらの遺品を大切に保管してきたが、近年になり最もふさわしいと考えられる堺妙国寺に一式を寄贈した。山川龜三郎関連で幕末熊本<sup>の</sup>動向をしたためた手紙や文書が含まれる。一八六九（明治二）年六月から翌年五月までの初代熊本藩知藩事を任じられた細川韶邦（よしくに）宛の九月廿五日付太政官文書等興味深い文書が含まれている。



明治期の亀三郎については以下の文章がある。「肥後藩隊長亀三郎は、同藩錚々の人物にして、明治三年練兵を天覧に供する時、藩兵の連隊司令となり、兵部省より下文の感状を給わる。曰く、熊本藩山川亀三郎先般練兵天覧之の節聯隊司令申付候處勉勵盡力候に付目録之通差遣候事、庚午五月兵部省と以つてその人格閱歴を徴する。」、『明治元年土佐藩土泉州堺烈學』より

亀三郎の妻常子は徳富一敬<sup>三</sup>の長女／徳富蘇峰・蘆花の姉

前述の徳富蘇峰の書簡にあるように、山川亀三郎の妻常子は蘇峰の長姉にあたる。彼らの母久子は上益城郡益城町の矢鳥家の出身で、久子の姉は熊本県女子教育につくした竹崎順子、妹津世子は横井小楠に嫁ぎ、妹ひとり矢嶋楯子は日本基督教婦人矯風会創設した。常子も早くからキリスト教に帰依をしており、亀三郎の死後（明治三七年没）は父母・一敬と久子の看病のため上京し、山室軍平の救世軍に入隊し、佐々木信綱門下に入り歌集も出している。また、若い時に学資の面倒を見てくれた長姉のために蘇峰・蘆花から著作や国民新聞は全部送られてきていたので、家族で良く読んでいた。

亀三郎（清房）は広島勤務の時、同藩の雨森ミツ子と結婚した。妊娠した妻を肥後の実家に送り届けたが、長女磨智（まち）は実家で生まれ、事情は分からないが、最初の妻とは間もなく離婚している。清房は若い時から経済的に苦労して育ったので、兄二人と違って質素倹約で、軍人としての俸給も貯蓄し、退職の時の一時金と合わせると、相当の財力の余裕があったようである。清房の特異な経歴と財力は地方では注目的となり、この地方の豪族である津森村の杉堂の矢鳥直方は、徳富常子との再婚の世話をした。常子は水俣の徳富一敬の長女であるが、一度結婚して一女を生み、離婚して家に帰っていたのである。



常子

大江義塾時代の猪一郎（蘇峰）は長姉の結婚のために、清房との折衝等の役割を果たしたようである。二人は木山の『丹波屋』

の二階をかりて家庭をもち、それまでに雨森家に預けてあった長女磨智を引き取った。明治一五、六年頃に、安永に屋敷を求めて家を建てた。『山川家の人々』より

幕末から明治にかけての熊本の地で新しい時代を築いていった群像の中に若い日の山

川龜三郎が果たしたであろう軍人としての働きが、このちいさな書付に見ることができ  
かもしれない。

#### 参考文献

- 寺石正路著『明治元年土佐藩士泉州堺烈拳』（宝文館昭和一二年四月）  
蘇峰徳富猪一郎著「近世日本国民史」『明治天皇御宇史』第八冊（明治書院 昭和一八年）  
『熊本県史近代編 第一巻』（熊本県 昭和三六年）  
山川信夫編著『山川家の人々』（教育タイムス 昭和四五年）  
森林太郎『鷗外全集第十五巻』（岩波書店 昭和四八年）  
日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版 昭和五九年）  
会田倉吉著『福沢諭吉』（吉川弘文館 人物叢書 新装版昭和六〇年 一六九頁）  
慶應義塾編『福澤諭吉書簡集第一巻』（岩波書店 平成一三年）

#### 注

- 一 赤松小三郎は江戸時代後期洋学者で英国兵書の翻訳で知られるが、慶応三年九月京都で暗殺される。
- 二 「王政復古直後の攘夷事件。慶応四年（一八六八年）二月十五日、当日堺に入港したフランス軍艦水兵が上陸し周辺住民に乱暴を働いたため、同地警備の土佐藩兵が襲撃し十一名を殺傷した事件。このころこつした事件が相次いだ、成立したばかりの新政府は外国と事をかまえる不利を考えて、箕浦猪之吉（隊長）以下二十名（うち九名は、フランス艦長の申し出により助命）の土佐藩士に切腹を命ずるなど、フランス側の要求をすべて認めた。」（世界大百科事典より）
- 三 徳富一敬は横井小楠の高弟であり、小楠が一八六九年に暗殺された後、相弟子の竹崎律次郎は明治維新の際、細川藩から熊本県への藩政改革に取り組んだ。

## 小野十三郎遺漏詩二十四篇

高松 敏男（元中之島図書館）

平成の世である。今更、太平洋戦争下の一篇の詩に問題があるかどうか、提起すること自体に意味があるのかと言われればそれまでである。判断は読者に任せる。しかしいくら歳月が過ぎ、時代が移りかわろうと、事實は事実として、真実は真実として、記録しておかなければならない事柄も一方にはあり、カモフラージュされたままで終らせるより、芸術家や詩人自身が、その事実についてのちどう対処したかが問われなければならない事柄もある。でなければ詩史・文学史・芸術史も意味をなさない。

大阪府立中之島図書館に平成六年六月二六日付で受入れられている、昭和一六年一月一五日発行の月刊漫画雑誌「大阪パック」、「皇軍慰問特輯号」に掲載の小野十三郎氏の詩には、そうした意味での問いが残されていると思えるので、全文を掲載する。

紀元二千六百一年

世紀更まる

第一年。

炳乎として

東亜の海に

いま大きな太陽がのぼる。

かつてわれらの先人が

太古の猛烈な羊齒の中から

うち仰いだ

無垢の光芒

再び地平を射る。

暗い海

山骨の刺々しさ

まがりくねった木々よ

靄よ。

われらは希ふ。

大陸に 海洋に

われらの視野の

明るく大きく晴れわたり

われらの戦ひの前途益々栄あらんことを。

世紀更まる

第一年。

謹みてここに

戦没英霊

並びに皇軍将兵に対して

深き感謝の黙禱を捧ぐ。

これはかつての日本帝国が皇紀二千六百年にかこつけて国民の愛国感情の高揚をはかった時に、「大阪パック」新春臨時増刊の巻頭に、「慰問袋」として掲載されたものである。そしてたまたま偶然にもこの詩を目にした時、時局を共に生きて当時の世相を皮膚感覚で知っている世代とはいえ、平民派の「詩人であると同時に、アナーキズム文学の理論的支柱（アナキスト系の革命詩人の一人）」（伊藤信吉）、そして戦後は「短歌的抒情否定」を宣言した小野氏の詩であっただけに、ぼくは目を疑った。発表された時期が、米軍がガダルカナル島に上陸するよりも、日本が対米英宣戦布告するよりも早く、この時期に、本当に小野氏の詩なのか、と急いで『定本小野十三郎全詩集』、『小野十三郎著作集』（全三冊）を繰り、巻末の寺島珠雄編「年譜」をも確認したものだ。しかしどうしてかこの詩は収録からはずされていて、詳細きわまる二つの「年譜」、『著

『作集』の「補遺」「編注」にも見えない。そこで小野氏の書き残したものを総あたりすることははじめ、どこかにこの詩のことが述べられていないか、と調査を進めてみると、単行本『奇妙な本棚 詩についての自伝的考察』(昭三九・六・二〇 第一書店)中のエッセイ「奇妙な本棚」に、小野氏自身がわが書斎の本棚に並ぶ書物を見ながら、戦時中の自分の精神史を、自己弁護とも、自悔とも、ひらきなおりともつかぬ、文字通り奇妙な内容の回顧がなされている。

要旨はこうである。

「わたしの四畳半の書斎には、組み立て式の本棚が列べて三つ置かれている。これは「二十余年一度も動かしたことがない」。「眼をやると、アンバランスな奇妙な配列で」、「まん中の本棚の上三段だが、最上段と次の段につまっているのは、もっぱら科学工業に関する本である」。「いずれも戦争中に蒐集したもので」、「日本重工業読本」(中略)、「航空機工場読本」(中略)といったところ相ついで出た時局向きの初歩的な本」で、「わたし自身の生活とも能力ともあまり直接かんけいのなさそうな書物がかなり大量に仕込まれていることも奇妙だが」、それらと「対照的にその本棚の三段目に」は、「日本古典に関する研究書や鑑賞本がずらりと列んでいる」。「万葉集がもつとも多く」、茂吉の「柿本人麿」、保田與重郎の「万葉集の精神」、蓮田善明の「神韻の文学」という恐るべき本も収まっている。「わたしはそのころ、朝に「日本重工業読本」を読み、夕に「万葉集の精神」を読んでいたことはまずまちがいない」。そして「万葉集の精神」に危く引きこまれそうになってハッと気がついたとき」、わたしは「作業教本や技術書にしがみついた」。

「しかし、この昔のままに上下に配列されている」「書物のコントラストは」、「戦時下において一人の詩人が経験した精神の往反運動の模様を示すものである」。「わたしは純然たる知識として学んだ旋盤やフライス盤の構造や」、「各種ゲージ類の個別的な性能そのものの中にも」、「文学的古典の研究書や鑑賞本のあるものから影響を受けた精神主義がしのびこんでいなかっただと云えない」。「わたしはその直後、「大阪朝日」の求めに応じて「空の要塞飛ぶ」という詩を書いて、その四発爆撃機の機胴に描かれた日の丸を讚え、「見ていたら涙が出た」と云っている。また、当時「毎日」の記者をしていた井上靖が、物質的に不如意な生活をしていたわたしに多少の原稿料でもという好意から、「陸軍記念日に題する詩を一つたのまれ」、「明治の軍歌」という詩をよせました」。さらに文学報国会の『辻詩集』に寄せた「木と鉄と鋼」、「毎日」に書いた「質と量」では、「質において、量においても敵をしのぎ、物や兵器の不足のために流される同胞の血の一滴を惜しみ、防ぎとめよう」と露骨に心情を吐露した言葉を綴ったことを、「一体わたし

は本気でそんなことを考えていたのだろうか」と煩悶、しかし「わたしが学んだ思想と、その思想によって裏づけされ、支えられた感情に即して云えば、その場合、沈黙こそが最も確実な手段であったかもしれない」。そして「その沈黙に耐え得ずして」、「求められれば、虚名と多少の物質的な報酬がからんで、これが拭い難い汚点となり、命とりとなることも考えずに、このような詩を書いた事実はかくすことができない」。「本質的には、高村光太郎をはじめ当時多くの詩人が書き、戦後それによって文学者の戦争責任の問題を問われた「愛国詩」の基調にある訴えの性質と少しも変わりはないか」と自悔する。が、この前半の自悔的モノローグは、後半になると、ひらきなおりともとれる口調にだって変わる。

すなわち、「わたしのこれからの作品の多くは黙殺された」。「わたしの目にふれたところでは、まだこの証拠物件を決め手として、わたしの戦争責任を摘発しようとした者はない。吉本隆明にそれがあるときいているが、彼が発見できたのは、たぶん文学報国会の「辻詩集」の中の一編くらいだろう。戦後に出したわたしの五冊のどの詩集にもこれらの作品は収録されていない。わたし自身が黙殺したのである。だがわたしはそれにより証拠いん滅を計ったわけではない。現にこれらの詩は、一冊のスクラップブックに製作年月の順に貼って保存されており、もし戦時中わたしという一人の詩人の精神の位相を材料としなにかを研めようとする人がいるなら（目下、わたしがそれを使用中だが）いつなんどきでもこの切抜帖を提供する用意がある」。「参考資料ならまだ他にもかなりあるから」、「いい気な部分に容赦なくメスを入れてもらえたらありがたい」と云い切る。

寺島珠雄氏は、『定本』の「年譜」でこの時代の小野氏のことを、「このころ科学技術書を多く読む。戦時下精神主義への平衡剤。自己抵抗。しかし、時局詩を書かないわけにはいかなかった」と要約している。

ところでぼくは、これまで小野十三郎氏の残した「奇妙な本棚」というエッセイと、「紀元二千六百年」という一篇の詩にことさらこだわってきたが、それはぼくが昭和二〇年三月一四日の未明に大阪の密集した市街地で、B29の焼夷弾の中を逃げ惑った体験が忘れられずに、小野氏の戦争責任を追及しようとしているのではない。N・ベルチャーエフが『わが生涯』で述べているように、時代にはそれぞれその時代特有の気分があり、R・シュタイナーの神秘思想でさえ、一時期ヨーロッパの思想界を席卷したぐらいであるから、一人の生活に追い詰められた詩人が時局に便乗し、戦争賛美を詩に刻みつけたからといって、そこにどれだけの責任が問えるかは疑問

である。むしろ、文学者の場合の戦争責任を問題にするなら、中之島図書館正面に碑があり、戦中に『愛国百人一首』を編さんした川田順氏こそ先陣を走ったと云えそうである。が、小野氏の場合に限って特に気になるのは、その対処の仕方である。氏は「奇妙な本棚」の前半で、自己の精神史をかえりみて、自悔の姿勢を見せながら、後半にいたると、俺の腹はすわっているんだといわぬばかりに、「証拠いん滅をはかったのではない」、「いつなときでもこの切抜帖を提供する用意がある」、「容赦なくメスを」とひらきなある。にもかかわらずこの「パンドラの函」は遂ぞ開けられることはなかった。繰り返すが存命中に編集・発行された『定本全詩集』、その補遺版『小野十三郎著作集』第三巻、いずれの巻末の詳細な「年譜」からも抹消されたままである。

かつて本多秋五氏は、「近代文学」同人の座談会で、戦争責任の問題は、「当事者として、文学者が自発的に考えることが真っ先に行われなければならない」、「文学者の責務」昭二・四「人間」と言葉を残したが、一度活字となって世に出たものは、自身の手でまっ先におおやげにすべきである。例えその行為によって一時期批判を浴び、傷つくことがあっても。小野十三郎という詩人の果たした役割と評価は、それによって見失われるものではない。

以下、先に引用の「紀元二千六百年」を除き、多くの調査しえた範囲での、小野氏の遺漏詩の紹介を果たしておきたい。但し、「大阪パック」掲載のものは、現在では大阪府立中之島図書館の書架で閲覧可能なので、巻末に詩の題名のみ記載にとどめる。

## 夜釣り

「あしかび」第1集

昭二六・四・一

伝馬を横づけ

かたむいた屋根の上にあがって

天明まで糸をたれている。

眼下の海は暗く且つ深い。

廃墟と化した製鋼所の大鉄骨構造か

その中にどつぷりと沈んでいるのである。

かれらがときどき交わす会話や

咳ばらいは

しかしそこへは

達しない。

その中は

いつもひんやりとしている

くつ音もしわぶぎも

本をめくる音も

高い天上に冴えたひゞきとなる

しつとりと紙にとけこんだ活字よ

かすかなかびのにおいよ

きみがそうしてうつむいて

くいいるように

ひらいた本の頁に眼をそゞいでいるとき

重い足どりで

時はしづかにきみのかたわらに歩みきたり

じつときみを肩こしに見守っている

あゝ 中之島図書館 五十年の歴史

木枯しの夜も

明々と灯あかりをつけて。

「大阪パック」掲載詩（以下題名のみ）

- |          |   |        |          |
|----------|---|--------|----------|
| “ 世相戯詩   | 通天閣異変／偽刑事横行す／掏摸の教訓  | 三五卷一〇号 | 昭一五・一一・一 |
| “ 世相戯詩   | 日米対抗猫八試合／爆弾町会／雨天好日  | 三五卷一一号 | 昭一五・一二・一 |
| “ 世相戯詩   | 薪炭バスと国民性／わが家の家庭料理   | 三六卷一号  | 昭一六・一・一  |
| “ 世相戯詩   | 仏とぶつかつた僧侶／死の奇病事件／埋蔵金伝説  | 三六卷三号  | 昭一六・二・一  |
| “ 世相戯詩   | 彗星南方よりきたる／硫酸法／卓上ピアノの遍歴  | 三六卷五号  | 昭一六・四・一  |
| “ 世相戯詩   | 烏賊 <small>いか</small> の甲羅 <small>こっこう</small> ／市場の魚屋が一匹の大鯛を仕入れてきた／<br>富士山から石油が出るといふ話 | 三六卷六号  | 昭一六・五・一  |
| “ ニュース詩集 | スコットランドのゆりかもめ／ケエト・スミスが歌つてゐる／  |        |          |

ほつれん草飢饉／倫敦の犬

三六卷二二号 昭一六・一一・一



#### 編集後記

1964(昭和39)年12月に創刊された「大阪府立図書館紀要」は1998(平成10)年までに34号が発行された。36年にわたり掲載された論文、資料紹介、翻刻、レファレンス・分類・整理の理論等は府立図書館の歴史物語る貴重な資料となってきた。しかし諸般の事情により1998年の発行後は途絶えたままになっていたが、その間、図書館も社会の情報環境も大きく変化してきた。今回「大阪府立図書館紀要」を再刊させるにあたり、大阪府立図書館のホームページ上で公開することとし、広くこの紀要を読んでもらえるようにした。大阪府立図書館としては、電子媒体で出版する初めての紀要であり、音声認識への配慮も行っている。今後とも継続発行できるよう努力していきたい。

なお、当紀要に掲載された著作物の著作権は執筆者に属し、その著作の使用に関しては大阪府立図書館が著作権者の了解を得ている。

#### 編集委員（ は編集長）

中之島図書館 鹿野一美 稲垣房子 前田香代子 前田章夫 森田俊雄 中島和子  
中央図書館 小谷良信 三谷久子 佐藤敏江 藤田章子

大阪府立図書館紀要 第35号

2006年3月31日

編集・発行

大阪府立中之島図書館

〒530-0005 大阪市北区中之島1-2-10

大阪府立中央図書館

〒577-0011 東大阪市荒本5-7-3

<http://www.library.pref.osaka.jp/>

< 無断転載を禁ずる >

大阪府立図書館紀要

第三十五号

二〇〇六年三月